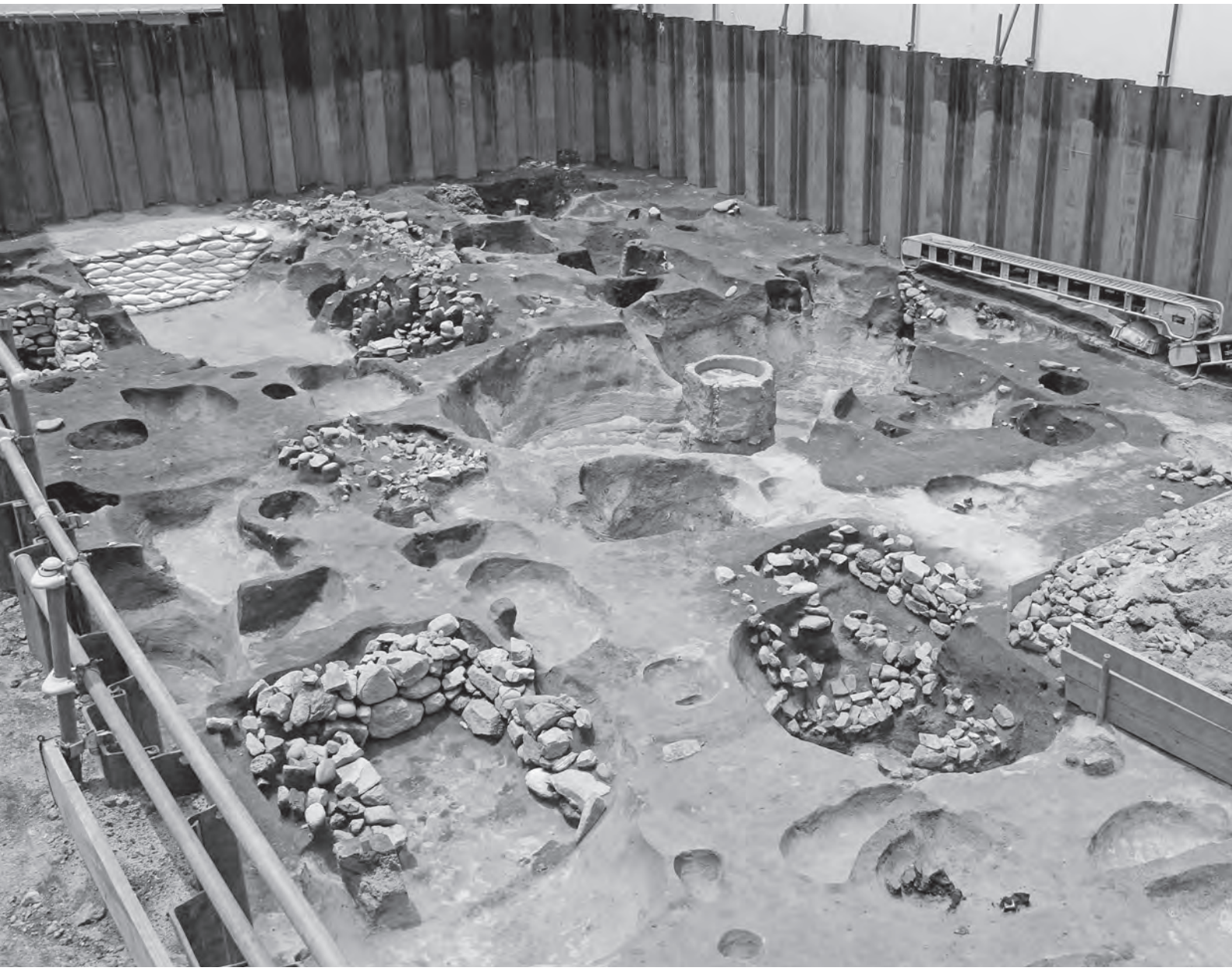
博　多　159

－博多遺跡群第205次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1339 集



2018

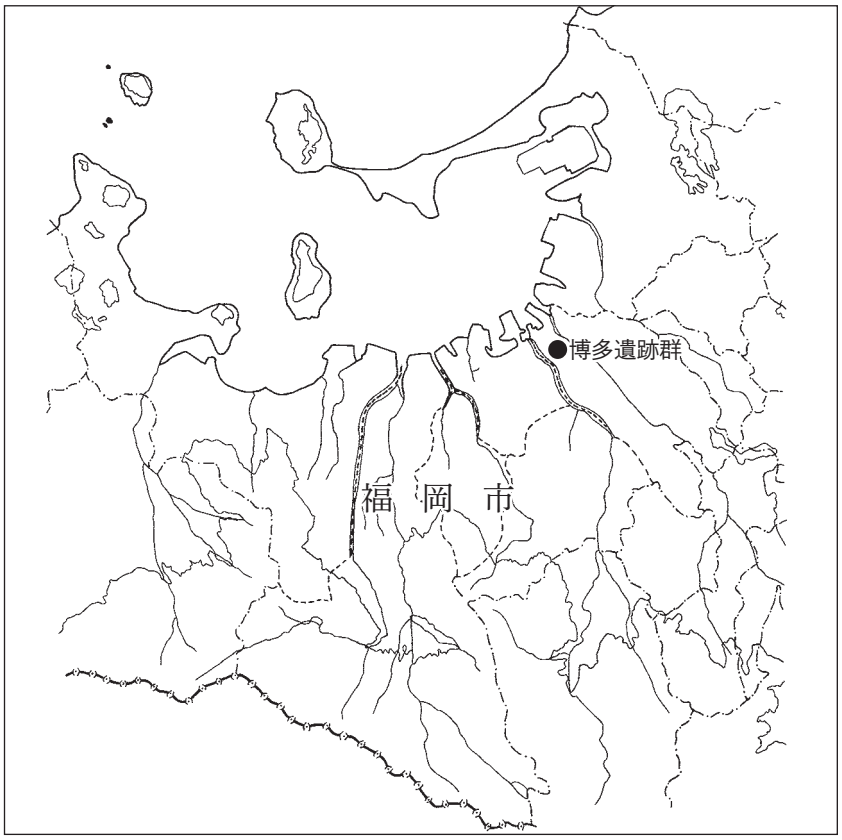
福 岡 市 教 育 委 員 会

はかた

博多 159

－博多遺跡群第205次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1339 集



調査番号　１６０１
遺跡略号　HKT-205

２０１８
福 岡 市 教 育 委 員 会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えていた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書は、共同住宅建設に伴う博多遺跡群第205次発掘調査について報告するものです。博多遺跡群は中世の国際貿易都市として知られており、今回の調査でもそれを裏付けるような多量の貿易陶磁器をはじめ、都市生活の痕跡を示す数多くの文化財が発掘されました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました明和地所株式会社福岡支店様をはじめ、関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。

平成30年３月26日

福岡市教育委員会

教育長　**星　子　明　夫**

例　　言

1．本書は、福岡市博多区下呉服町419番、420番、421番の共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が2016（平成28）年４月４日から７月30日にかけて発掘調査を実施した博多（はかた）遺跡群第205次調査の報告書である。
2．遺構の呼称は記号化し、溝→ＳＤ、井戸→ＳＥ、土坑→ＳＫ、ピット→ＳＰ、その他→ＳＸとした。遺構番号はピットを除き、種類に関係なく連番とした。ピットは別に番号を付けた。
3．本書に使用した遺構実測図は野村俊之、服部瑞輝、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は光吉千里、山本麻里子が作成した。また、製図には三浦悠葵（埋蔵文化財課）、篠田千恵子、増永好美、田上があたった。
4．本書に使用した写真は服部、田上が撮影した。
5．本書に使用した標高は海抜高である。
6．本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し６°20′西偏する。
7．出土した陶磁器の分類は白磁については、森田勉1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究№２』、青磁については、上田秀夫1982「14～16世紀の青磁の分類」『同』、青花については小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『同』（ただし、染付を青花に読み替え）による。
8．本書の編集・執筆は田上が行った。
9．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

調査番号	１６０１			遺跡略号	HKT－205
調査地地籍	博多区下呉服町 419 番、420 番、421 番			分布地図番号	千代博多　48
開発面積	490.53 ㎡	調査対象面積	290 ㎡	調査面積	325 ㎡
調査期間	2016（平成 28）年４月４日～７月 30 日				

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　１．調査にいたる経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
　３．調査地点の立地と環境 …… 2
Ⅱ　調査の記録 …… 4
　１．調査の経過と概要 …… 4
　２．発見された遺構と遺物 …… 8
　　ＳＫ０７ …… 8
　　ＳＸ１０ …… 8
　　ＳＸ１１ …… 10
　　ＳＫ２３ …… 11
　　ＳＫ２５ …… 11
　　ＳＫ２８・ＳＸ２９ …… 13
　　ＳＫ３０ …… 14
　　ＳＫ３７ …… 18
　　ＳＫ３８ …… 18
　　ＳＸ３９ …… 21
　　ＳＫ４０ …… 21
　　ＳＫ４１ …… 23
　　ＳＫ４６ …… 23
　　ＳＤ４７ …… 25
　　ＳＫ５０ …… 26
　　ＳＫ５１ …… 26
　　ＳＫ５２ …… 26
　　ＳＫ６１ …… 27
　　ＳＫ５３ …… 28
　　ＳＫ５４ …… 28
　　ＳＫ５５・ＳＸ７５ …… 28
　　ＳＫ５９ …… 34
　　ＳＫ６０ …… 35
　　ＳＫ６２ …… 37
　　ＳＫ６４ …… 38
　　ＳＫ６６ …… 41
　　ＳＫ７６ …… 41
　　ＳＤ７９ …… 43
　　ＳＫ８３ …… 45
　　ＳＸ８４ …… 45

ＳＫ９０ …… 46
ＳＫ９２・ＳＸ１６３ …… 48
ＳＫ９４ …… 50
ＳＸ９５ …… 50
ＳＫ９６ …… 51
ＳＫ１０２ …… 52
ＳＫ１０８ …… 53
ＳＫ１１２ …… 53
ＳＫ１１３ …… 56
ＳＫ１２０ …… 56
ＳＫ１２６ …… 57
ＳＫ１３２ …… 59
ＳＫ１３４ …… 60
ＳＤ１３８ …… 61
ＳＫ１４８ …… 61
３．その他の出土遺物 …… 62
中国産青磁 …… 62
中国産白磁 …… 62
中国産青花 …… 62
中国産陶器 …… 68
朝鮮産陶磁器 …… 70
国産陶器・土器 …… 70
石製品 …… 71
金属製品 …… 71
玉類 …… 72
銭貨 …… 73

Ⅲ　まとめ …… 74

Ⅰ　は　じ　め　に

１．調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は2015（平成27）年12月11日付けで、明和地所株式会社福岡支店より、福岡市博多区下呉服町419番、420番、421番における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を受理した。

これを受けて経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係では、申請地が博多遺跡群の範囲内であることから試掘調査が必要と判断した。試掘調査は翌年１月８日に実施し、現地表下2.2ｍで中世後半期の遺物を含む層を確認した。

試掘調査の結果をふまえ、申請者と遺跡の取り扱いについて協議を行い、建築工事によって影響がある部分を対象に本調査を実施することで合意した。

その後、2016（平成28）年３月24日付けで明和地所株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年４月４日より７月30日まで発掘調査を実施し、翌2017（平成29）年度に資料整理および報告書作成を行った。

２．調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託　明和地所株式会社福岡支店

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査：平成28年度・資料整理：平成29年度）

調査総括　福岡市経済観光文化局文化財部

	埋蔵文化財課	課長	常松　幹雄（28・29年度）
		調査第２係長	加藤　隆也（28年度）
		調査第１係長	吉武　　学（29年度）
庶　　務	埋蔵文化財課	管理係長	大塚　紀宜（28年度）
		管理係	入江よう子（28年度）
	文化財保護課	管理調整係長	藤　　克己（29年度）
		管理調整係	松尾　智仁（29年度）
事前審査	埋蔵文化財課	事前審査係長	佐藤　一郎（28年度）
			本田浩二郎（29年度）
		事前審査係主任文化財主事	池田　祐司（28・29年度）
		事前審査係文化財主事	大森真衣子（28年度）
			中尾　祐太（29年度）
調査担当	埋蔵文化財課	調査第２係主任文化財主事	田上勇一郎（28年度）
		調査第２係文化財主事	服部　瑞輝（28年度）
整理担当	埋蔵文化財課	調査第１係主任文化財主事	田上勇一郎（29年度）

調査補助　野村俊之

調査作業　石川洋子　伊藤美伸　辛川容子　居石美穂　鈴木智子　田中トミ子　田中ゆみ子
日高芳子　吹春憲治　北条こず江　水田政敏　水田ミヨ子　山口あずさ

整理補助　光吉千里　山本麻里子
整理作業　篠田千恵子　増永好美　渡部光子

３．調査地点の立地と環境

博多遺跡群は玄界灘に面する博多湾岸の砂丘上に位置する遺跡である。玄界灘を渡ると朝鮮半島、さらにその向こうには中国大陸があり、日本の中でもっとも大陸に近い地域にある。その立地から、古くから大陸の影響を受けてきた。特に古代から中世にかけては国際貿易都市として発展し、出土する遺物も国際色豊かなものである。大量の中国からの輸入陶磁器は国内に類を見ない。また、朝鮮、タイ、ベトナムなどからもたらされ陶磁器類も目を引くところである。

博多遺跡群が立地する砂丘は、現地表の微地形やボーリング調査、埋蔵文化財発掘調査などにより、海岸線に沿って３列並んでいることがわかってきた。一番海寄りは「息浜（おきのはま）」と呼ばれる。陸地化するのは比較的遅かったようで、おもに12世紀後半以降都市化が進んだ。陸地側２列は「博多浜」と呼称している。息浜と博多浜の砂丘は11世紀後半頃中央部でつながり、両側は海が湾入していた。その後埋め立てで入海は縮小し、17世紀初頭には「息浜」と「博多浜」は一体化した。

今回調査を行った205次調査地点は「息浜」に位置し、「博多浜」との付け根（現在の呉服町交差点付近）から北北西に400ｍほどの地点である。

これまで周辺では幾度かの調査が行われている。

北側の101次調査では16世紀代の円形や方形の土坑、石組土坑、17世紀代とみられる掘立柱建物が

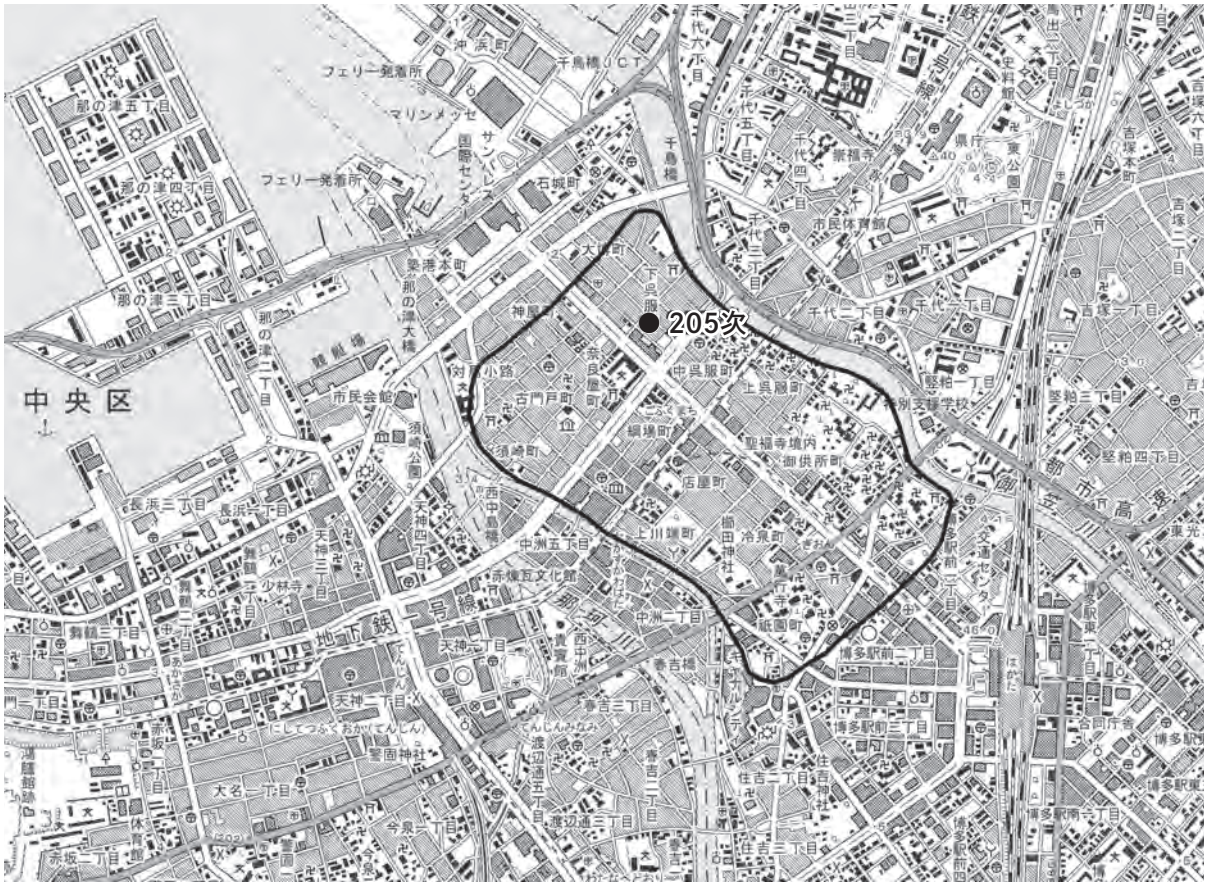


Fig.1　博多遺跡群と調査地点の位置　（1/25,000）

検出され、輸入陶磁器や鍛冶関連遺物が出土している。

南側では153次調査が行われている。17世紀以降の大型建物の石基礎、銅盤・銅瓶・鉄壺を埋納した土坑、石組土坑、井戸が検出されたが、中世期の遺構・遺物は多くない。205次調査以降に南隣では212次調査が行われ、205次調査で検出された溝の延長が確認されている。

西側に位置する82次調査では16世紀代の円形や方形の土坑、石組土坑などが調査された。井戸は近世以降のものである。陶磁器はあまり多くないものの、翡翠釉がかけられた青花皿や五爪の龍が描かれた青花碗など優品が出土している。その北側で行われた113次では狭い調査範囲ながら25基もの石組土坑が調査された。16世紀後半以降のもので、多くは近世のものであった。井戸も近世以降のものである。中世期の遺物はあまり多くない。

南西の博多小学校建設では111次調査が広範囲で行われ、元寇防塁とみられる石塁が途切れながらも延長53m、幅3.3 ～ 3.5m、残存最大高1.3mで検出された。この延長を考えると205次調査地点は元寇防塁の外側となる。そのほか15 ～ 16世紀の井戸・土坑・石組土坑・掘立柱建物や数多くの輸入陶磁器が出土している。また、メダイや十字架・メダイの鋳型といったキリスト教関連遺物が出土している。

Fig.2　調査地点の位置と周辺の調査地点（1/2,000）

Ⅱ　調　査　の　記　録

１．調査の経過と概要

調査区は鋼矢板で囲まれた建物予定部分である。調査に入る前に施工者により約２ｍ鋤取りが行われ、排土は場外搬出された。

2016（平成28）年４月４日に機材の搬入を行い、４月５日より作業員による発掘調査を開始した。調査で発生する排土は北東隅に置き、その部分の調査は最後に行った。調査のための掘削は安全のため鋼矢板から１ｍ引きを取って行った。測量用グリッドは敷地にあわせ２ｍ四方に設定し、アルファベットと数字で位置を示した。標高約2.6ｍで第１面の調査を行ったが、東側は地山である砂丘砂が露出したため、１面のみの調査となった。井戸４基、石組土坑４基、土坑75基、石基礎１基、溝３条、ピットなどを検出した。井戸はすべて近世以降のものであった。東側の遺構の一部では炭化物粒を含む土坑があり、炭化米ではないかと思われたため、覆土を水洗して回収した。６月８日に第１面の全景写真を撮影し、その後、石組の解体や掘り足し、実測を終了した。２面へは人力で掘削し、包含層の遺物はグリッド単位で取り上げた。梅雨時の雨で作業は進まず、一部の遺構の壁は流失した。第２面では土坑32基、ピットなどを検出した。７月８日に第２面の全景写真を撮影、その後、掘り足しや実測を完了させた。７月15日に重機により、排土を移動し、残った北東部の調査を開始した。思ったより遺構が濃く、期間に余裕がなくなったため、炭化物粒を含む遺構の覆土水洗を一部断念した。石組土坑２基、土坑38基、溝４条、ピットなどを新たに検出した。７月30日に機材を撤収し、調査を終了した。

以下、中世のおもな発見された遺構と遺物を報告する。

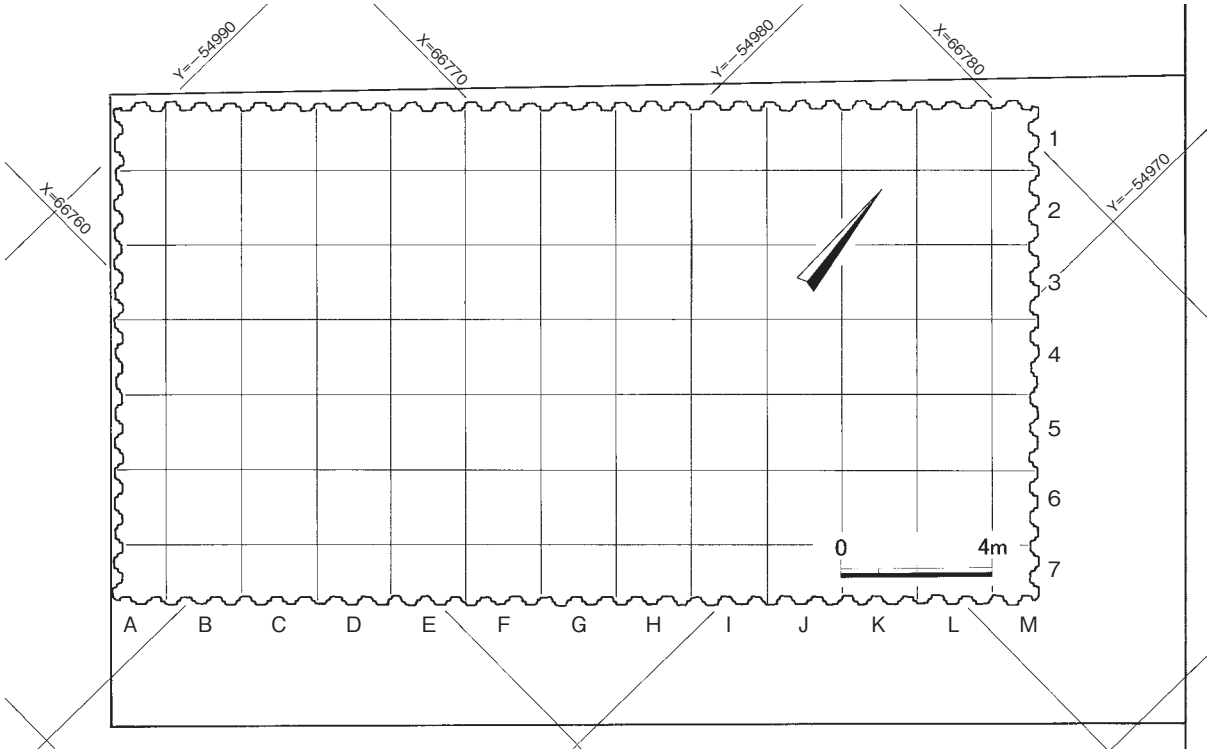
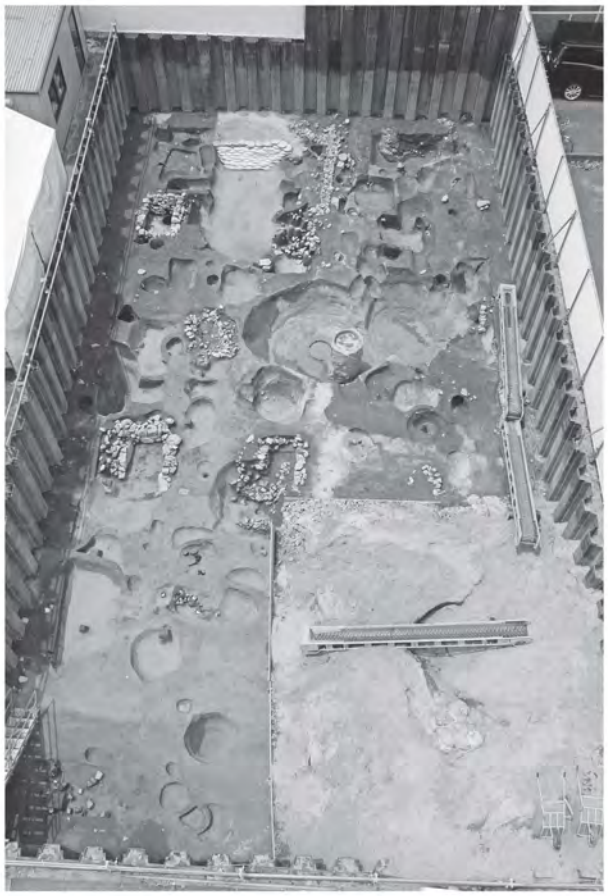


Fig.3　調査区域図　（1/200）



左上
　Ph.1　第１面全景（東から）

右上
　Ph.2　第２面全景（東から）

右下
　Ph.3　北東部全景（東から）

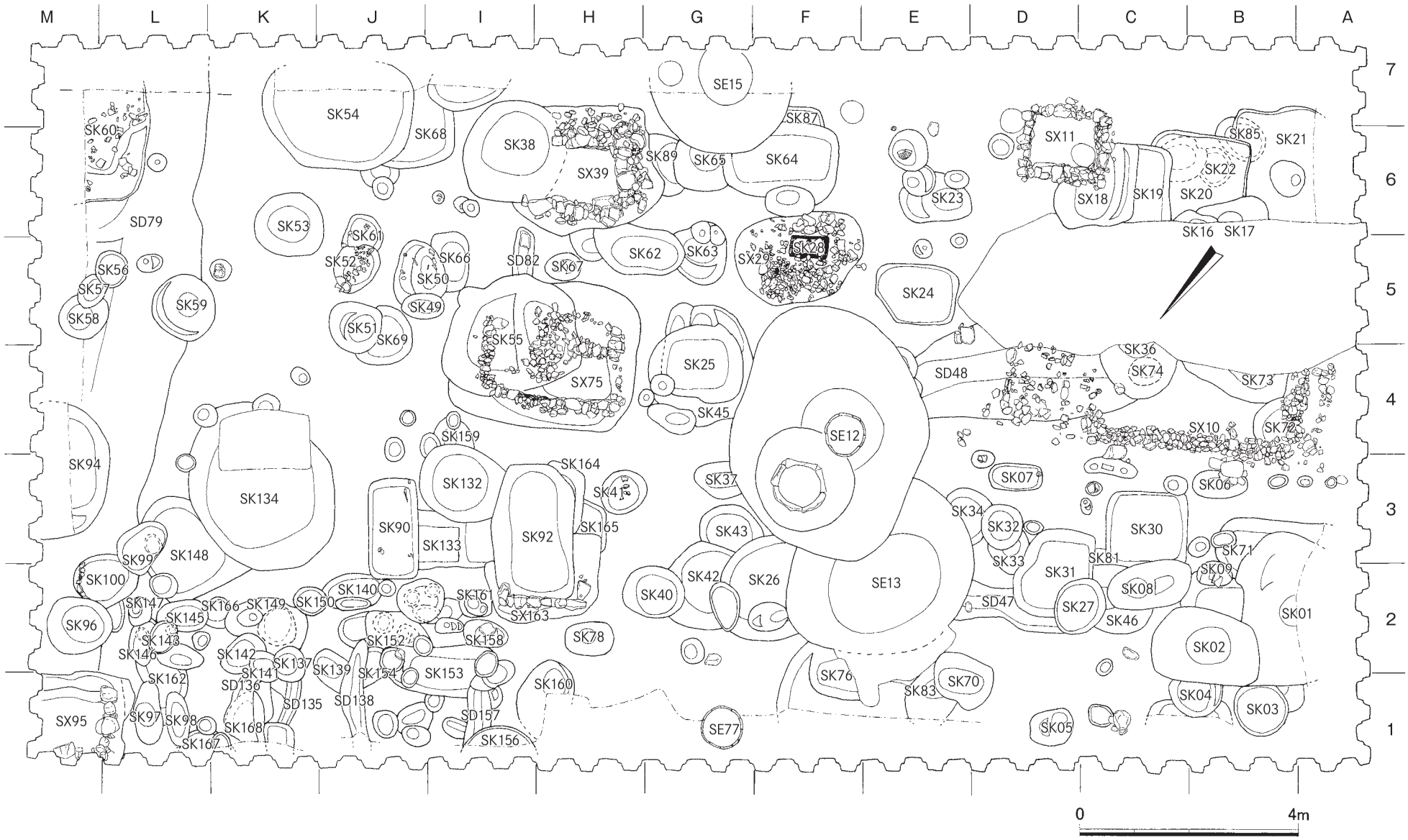


Fig.4　第１面遺構分布図（1/100）

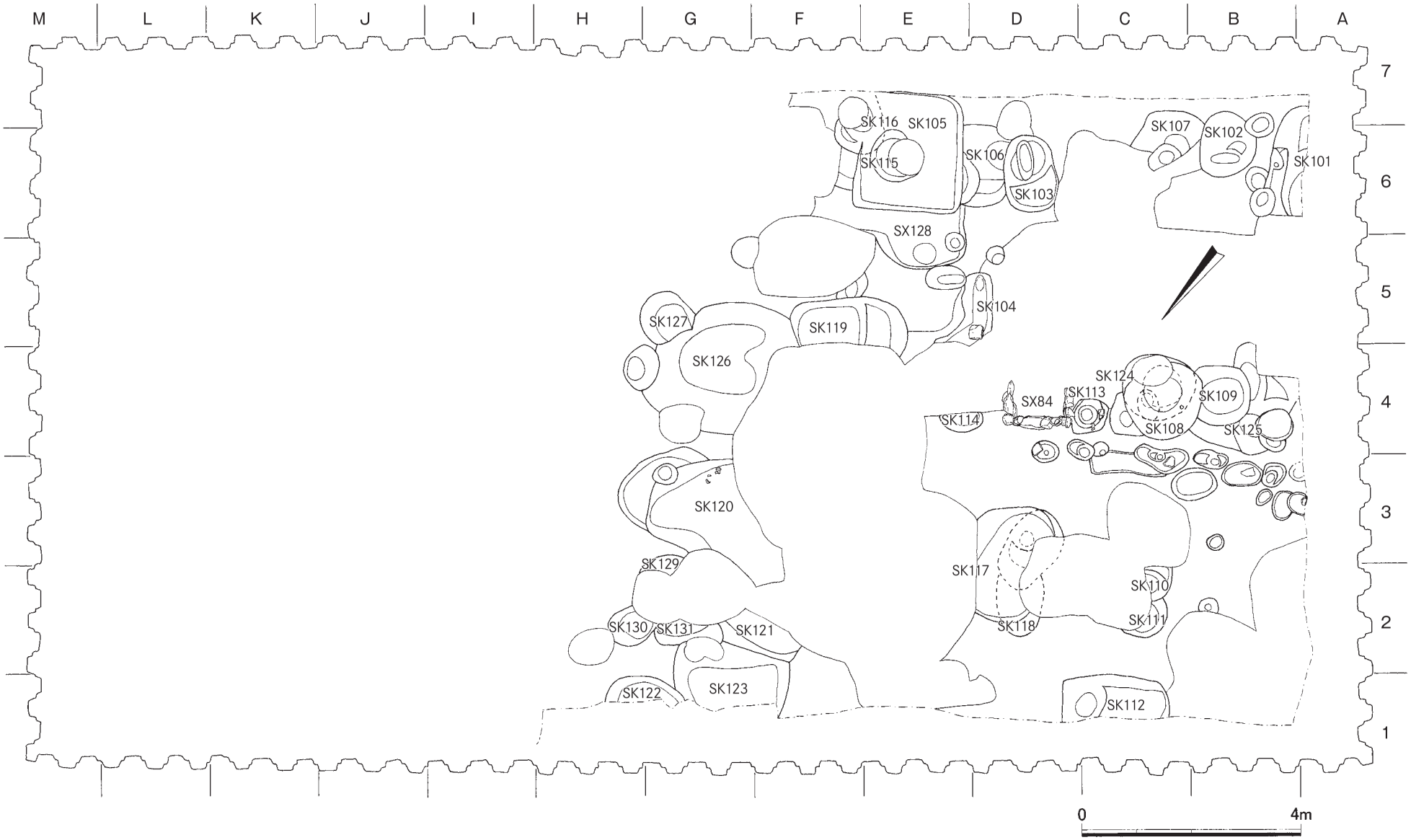


Fig.5　第２面遺構分布図（1/100）

２．発見された遺構と遺物

SK07（Fig. ６・７、Ph. ４）

Ｄ－３に位置する隅丸長方形の土坑。第１面で検出した。長軸1.0ｍ、短軸0.5ｍ、深さ15cm。覆土は灰褐色砂質土で炭化物・焼土を含む。西側から青花皿が出土している。

出土遺物をFig. ７に示す。**１**は中国華南産の碁笥底を呈する青花皿Ｃ群。胎土は淡黄色でやや粗く硬質である。釉は黄灰色で透明度・光沢とも低く、内面から外面最下位までやや厚く施釉される。全体に貫入がある。呉須は黒ずんだ発色となる。体部外面最下位に白色砂が付着している。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

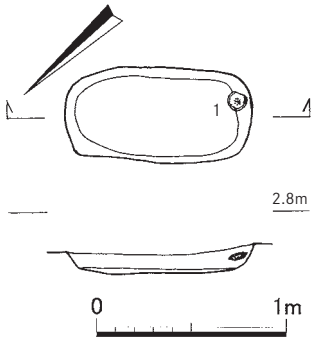


Fig.6　ＳＫ０７実測図（1/40）

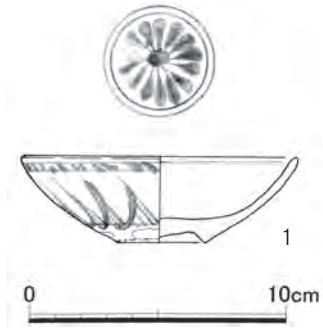


Fig.7　ＳＫ０７出土遺物実測図（1/3）

SX10（Fig. ８・９、Ph. ５）

調査区西側第１面で検出した石列でＡ－３グリッド南東を隅にして南に２ｍ、東に６ｍ延びる。東西方向は４ｍで南に折れている可能性もある。建物の基礎と考えられる。石列の北には幅約２ｍ間隔で大振りの礫があり、建物礎石の可能性もある。

出土遺物をFig. ８に示す。**２・３**は中国景徳鎮産青花皿。東西方

Ph.5　ＳＸ１０（東から）

Ph.4　ＳＫ０７（南から）

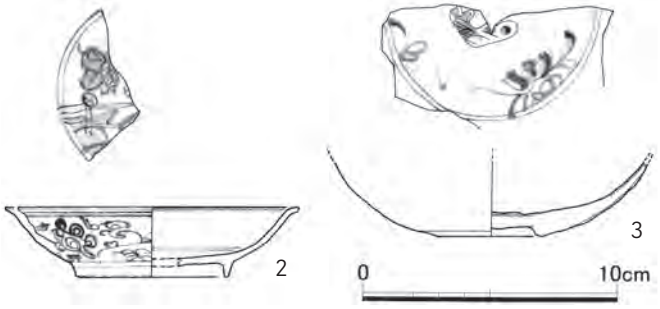


Fig.8　ＳＸ１０出土遺物実測図（1/3）

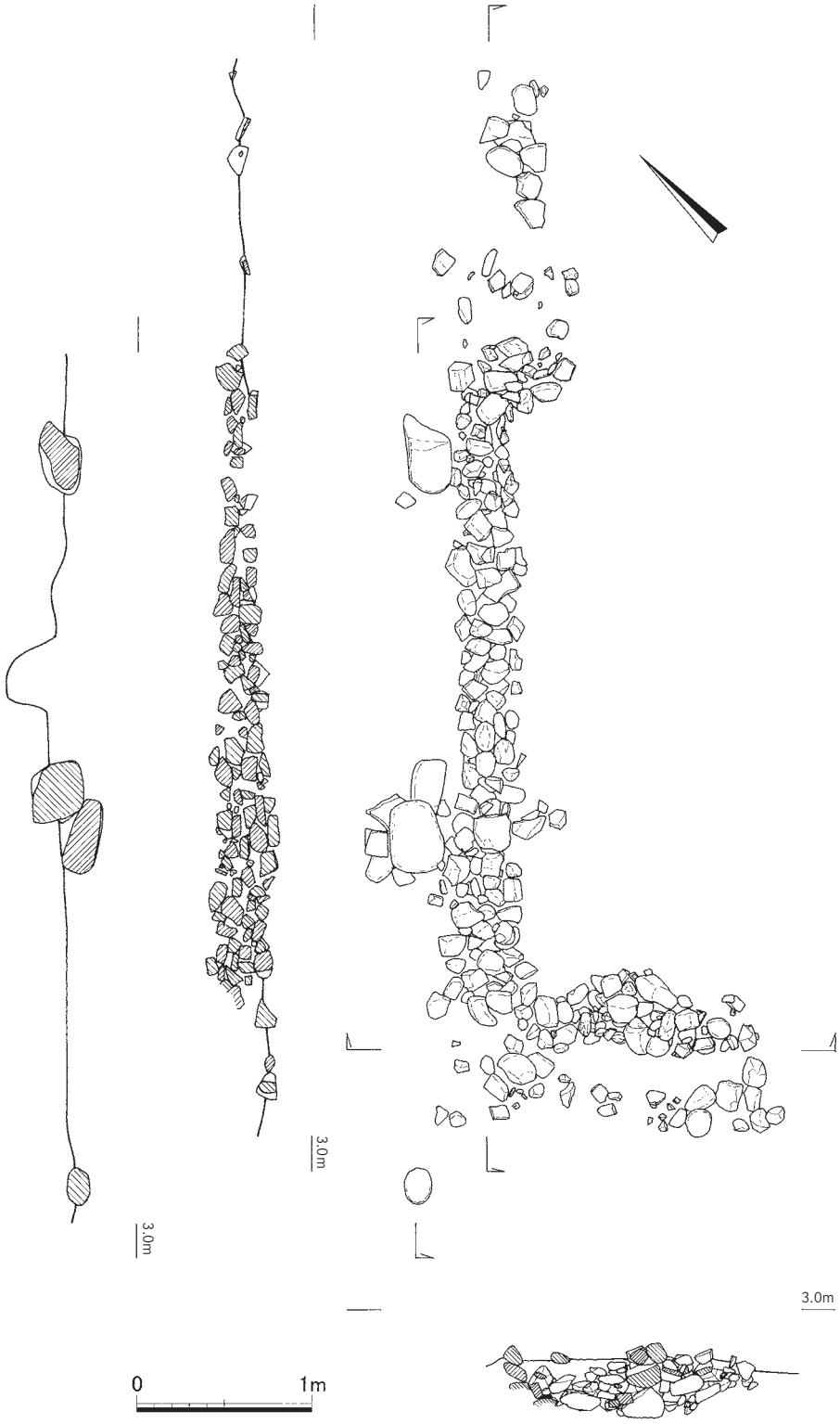


Fig.9　ＳＸ１０実測図（1/40）

向の石列から出土している。**2**はB１群。胎土は白色、緻密で釉はやや厚く透明度が高く光沢がある。全面施釉後、畳付の釉を掻き取る。畳付に砂粒が溶着している。呉須の発色は良い。ＳＤ４８、ＳＸ８４出土片と接合している。**3**はＣ群。内底に魚文を貼り付け､呉須で水草を描く。釉は外面がやや青みがかり、内面は透明である。**341**の鉛玉も出土している。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

SX11（Fig.10・11、Ph. 6 ・ 7）

第１面Ｃ・Ｄ－６・７で検出した石組土坑。東側の残りが良く、西側は上部の残りが悪い。残存部分での石組の内法は長辺1.1m、短辺0.8m。深さは80cmである。北東隅に円形

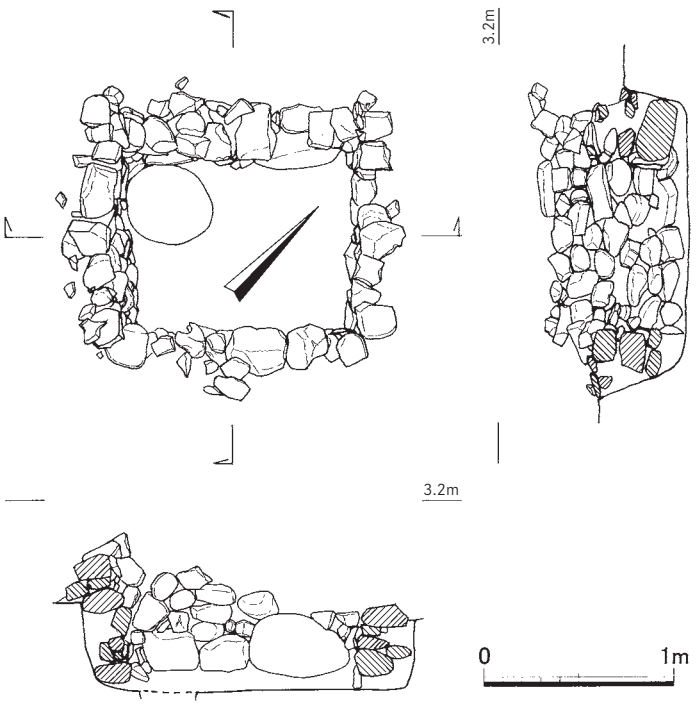


Fig.10　ＳＸ１１実測図（1/40）

Ph.6　ＳＸ１１（東から）

Ph.7　ＳＸ１１（南から）

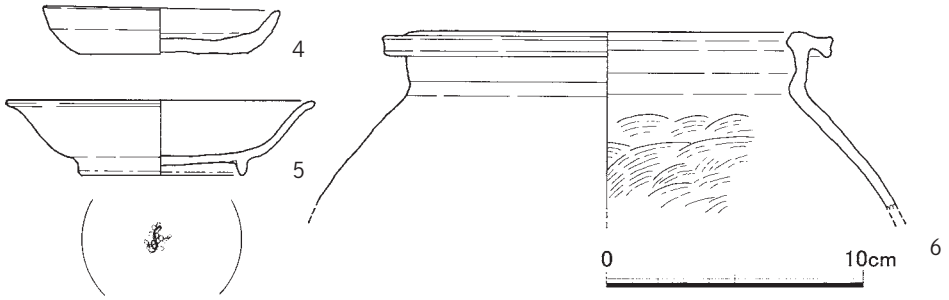


Fig.11　ＳＸ１１出土遺物実測図（1/3）

の深い撹乱を受ける。

出土遺物をFig.11に示す。**4**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。口径9.2cm、底径6.5cm、器高1.8cm。**5**は中国景徳鎮産の白磁皿Ｅ－２ｂ類。外底に呉須で花文のような文様を入れる。ＳＫ２０出土片と接合している。**6**は朝鮮王朝の陶器壺。胎土は暗茶色で緻密で硬質、白色微細砂を多く含む。釉は薄く、光沢はある。外面は暗灰緑色、内面は暗茶色を呈する。**326**の硯も出土している。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

SK23（Fig.12・13）

第１面Ｅ－６で検出した楕円形の土坑。東側が深くなる。２つのピットに切られている。長軸1.3m、短軸0.9m、深さ30cm。

出土遺物をFig.13に示す。**7**は中国景徳鎮産の白磁皿Ｅ－２ｂ類。**8**は中国景徳鎮産の青花皿Ｆ群。体部に縦方向にヘラ彫りを入れる。胎土は白色・緻密。釉は青色味がかかる。全面施釉後、畳付の釉を掻き取る。二次被熱、もしくは焼成不良のため表面が荒れている。**9**は備前焼擂鉢。ＳＫ１８・ＳＤ４８出土片と接合している。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

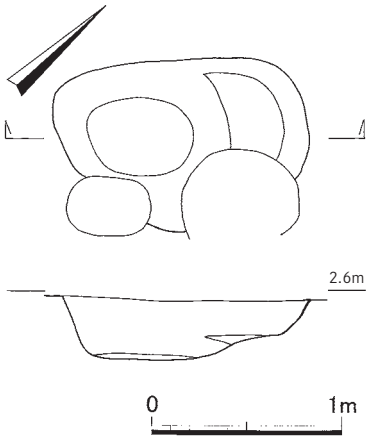


Fig.12　ＳＫ２３実測図（1/40）

SK25（Fig.14・15、Ph. ８）

Ｇ－４・５に位置する隅丸方形の土坑。第１面で検出された。上部を浅い遺構に切られている。長辺1.5m、短辺1.3m、深さ80cm。

出土遺物をFig.15に示す。**10**は中国龍泉窯系青磁の碗。胎土は淡灰色で微砂粒を含み、やや粗い。硬質。釉は青灰色に近く、光沢はあるが透明度は低い。全体にごく粗い貫入が入る。内面から高台外面まで厚く施釉されている。Ｅ－５に位置するＳＫ２４出

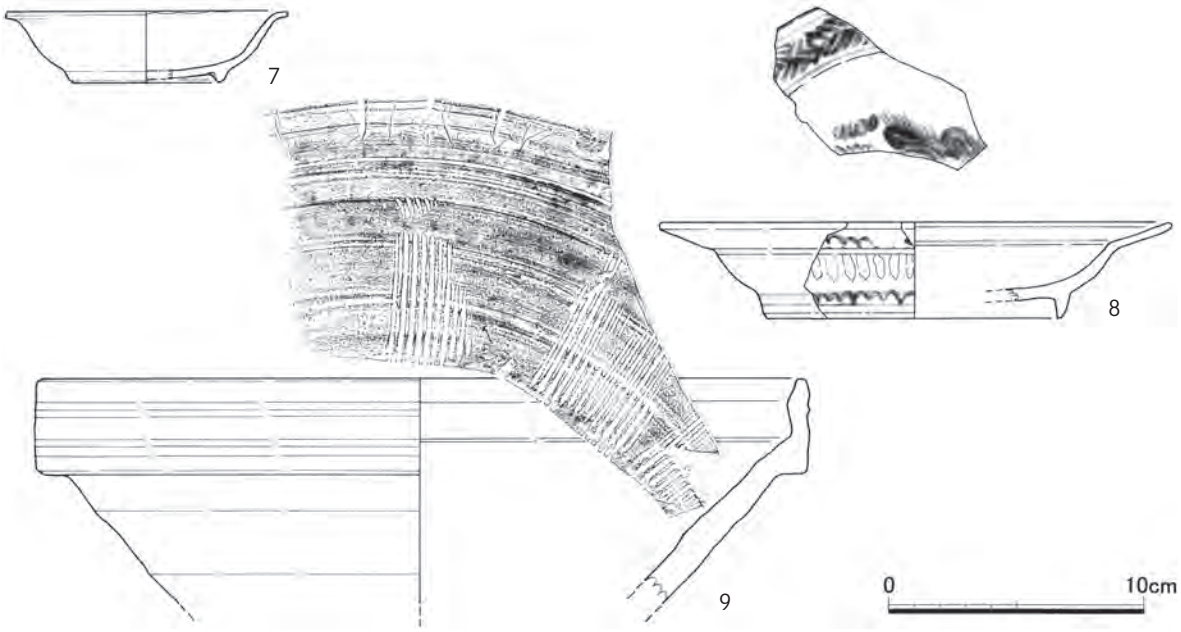


Fig.13　ＳＫ２３出土遺物実測図（1/3）

土片と接合した。**11**は中国景徳鎮産の青磁皿。口縁部を４輪花とする。胎土は白色・緻密で淡緑色の釉がやや厚くかかる。**12**～**14**は中国景徳鎮産の白磁皿。**12**は碁笥底のＥ－３類。ただし口縁は外反する。体部最下位まで施釉され、露胎部は橙色を呈する。破損後にススが付着している。**13**・**14**はＥ－２ｂ類。Ｆ・Ｇ－６にあるＳＫ６４出土片と接合している。**14**の外底には呉須で銘が入るが残存悪く詳細不明。**15**・**16**は中国景徳鎮産の青磁皿Ｂ１群。**15**は内底に玉取獅子を描く。呉須は灰色味の発色。**16**の絵柄はあまり類を見ないがＳＫ６４でも出土しており、組物でもたらされたものであろう。体部内外面に唐草文が描かれる例は新潟県至徳寺遺跡で例があり、

Ph.8　ＳＫ２５（南から）

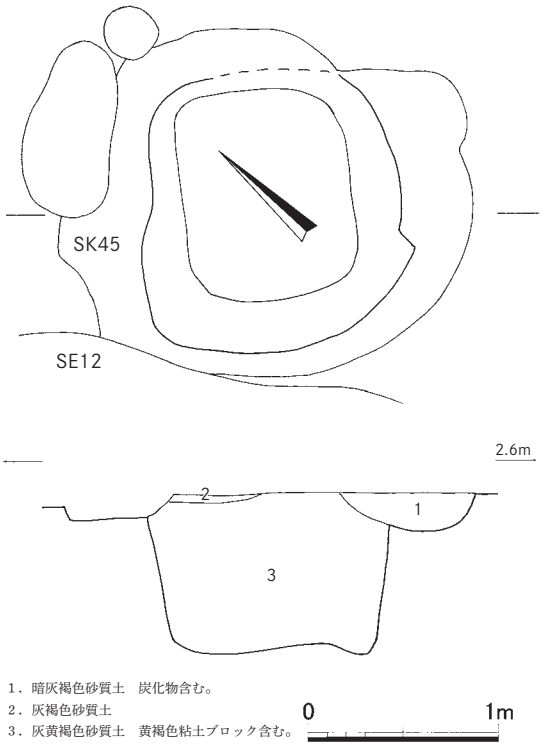


Fig.14　ＳＫ２５実測図（1/40）

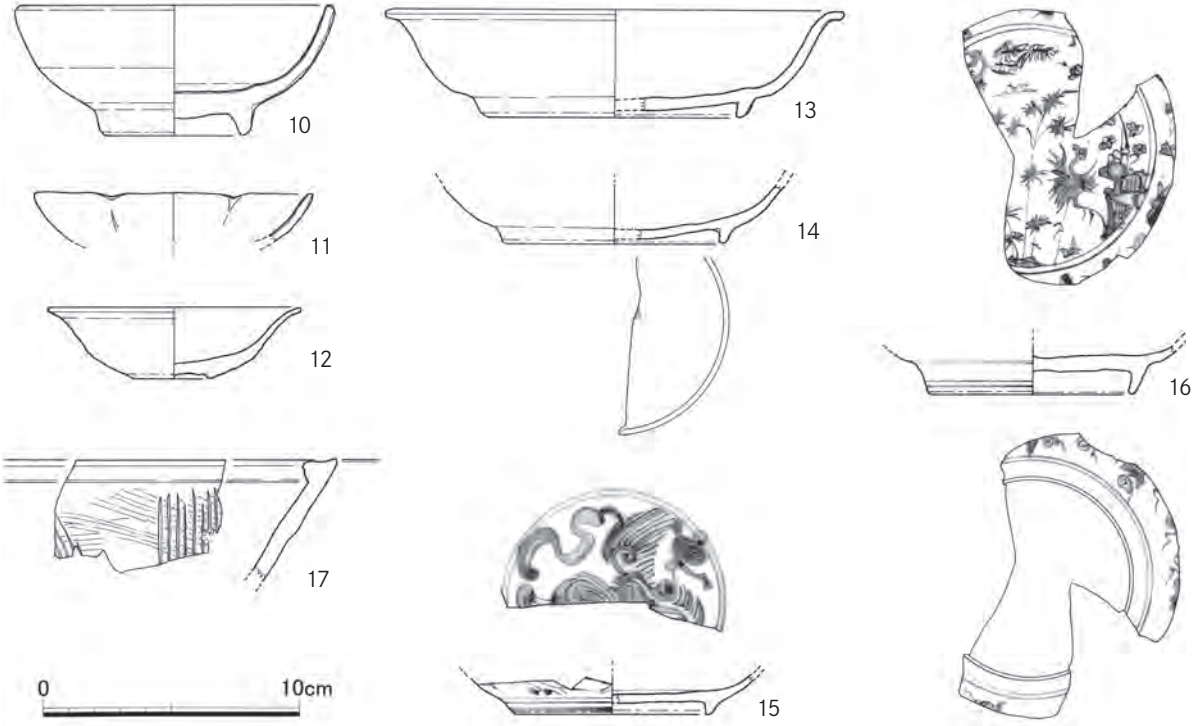


Fig.15　ＳＫ２５出土遺物実測図（1/3）

Ｂ１群でも古相に位置づけられている（鶴巻2006）。**17**は瓦質の擂鉢。口縁部内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。防長系とされる。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。ＳＫ６４との接合関係が多く、同時期に廃棄、埋没したと考えられる。

SK28・SX29（Fig.16・17、Ph. 9～12）

第１面Ｆ・Ｇ－５・６で検出された隅丸方形の土坑。検出時は礫の集中部であり、その中に長方

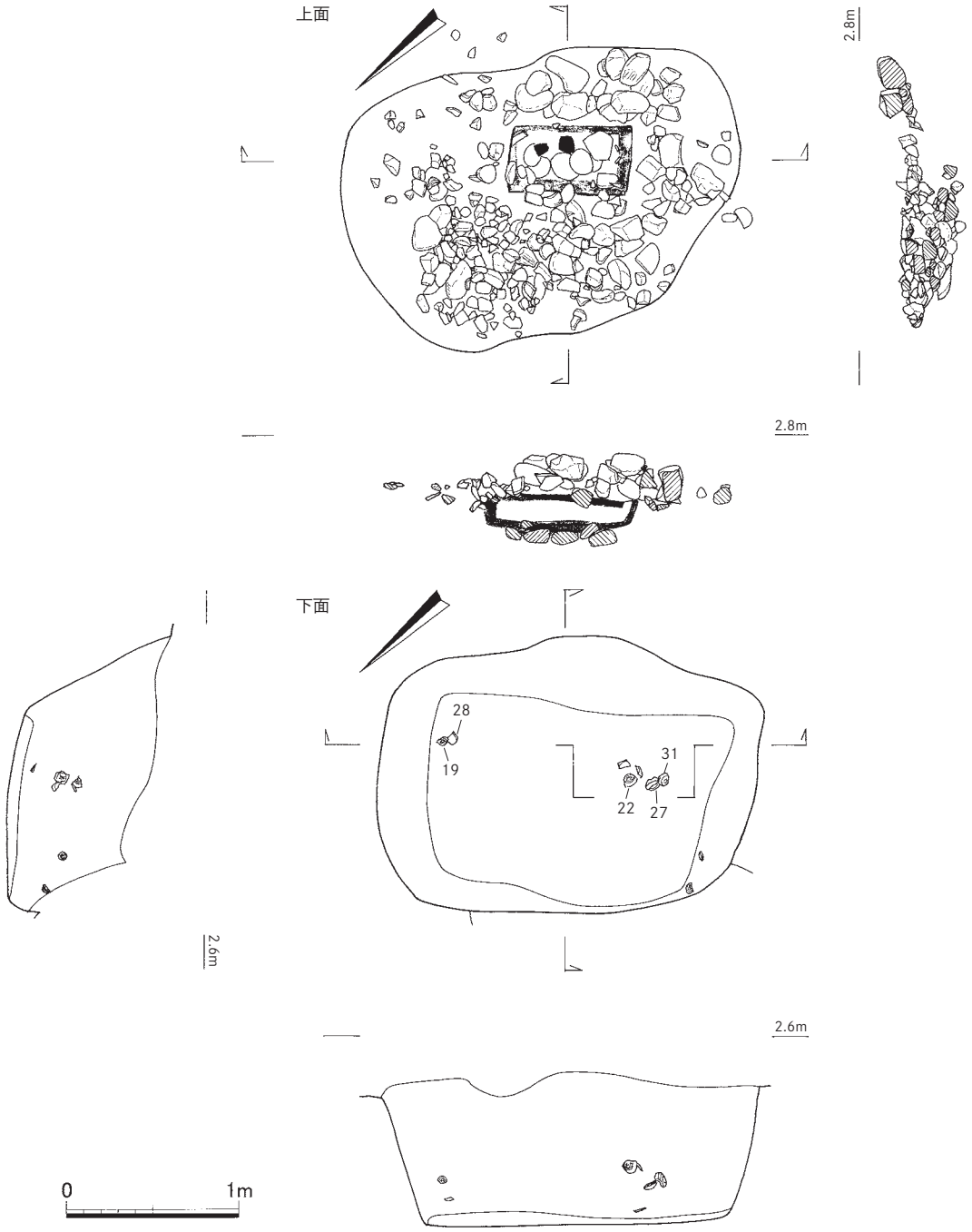


Fig.16　ＳＫ２８・ＳＸ２９実測図（1/40）

Ph.9　ＳＫ２８（南から）

Ph.10　ＳＸ２９（南から）

Ph.11　ＳＸ２９下部（西から）

形枠の炭化物が見られた。長方形枠をＳＫ２８、礫集中部をＳＸ２９とした。枠は長辺70cm、短辺40cm、高さ15cmの規模であり、その枠の下にも礫が１層あった。枠内にも大型炭化物片があるが、礫は少ない。礫は上部のみで、下部から土師器の坏・小皿・青花皿Ｃ群などが出土した。掘り方は隅丸長方形で長辺2.2ｍ、短辺1.6ｍ、深さ90cm。

出土遺物をFig.17・Ph.12に示す。すべてＳＸ２９出土。**18～20**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。**18**は口径6.4cm、底径4.4cm、器高1.3cm。**19**は口径6.5cm、底径5.0cm、器高1.2cm。**20**は口径6.8cm、底径5.0cm、器高1.7cm。**21･22**は土師器の坏。底部は回転糸切り。**21**は復元口径10.8cm、復元底径7.0cm、器高2.0cm。**22**は復元口径10.8cm、底径6.6cm、器高2.2cm。外底に板状圧痕。**23**は口縁が内湾する土師器の鉢。底部は回転糸切り。口径11.6cm、底径4.1cm、器高6.8cm。内面にロクロ目を残す。**24～26**は外面に線描蓮弁文を施す中国龍泉窯系青磁の碗Ｂ－Ⅳ´。**27～29**は中国景徳鎮産の白磁皿。**27**は碁笥底のＥ－３類。**28・29**はＥ－２ｂ類。**29**の外底には呉須で銘が入るが方形の枠の部分のみが残存する。**30～34**は中国華南産の碁笥底を呈する青花皿Ｃ群。釉は黄色味がかる。**30～33**は内底に「寿」字。呉須は青黒く発色する。内面から外面底部脇まで施釉。**30・31**の釉は透明度が低く、にぶい光沢で、**32・33**の釉は透明度高く光沢がある。**34**は内底と外底を露胎とし、露胎部分は橙色に発色する。**35**は陶器壺。外面にタタキ調整痕がある。胎土は暗茶色を呈し、緻密、硬質。白色微砂粒を多く含む。中国産であろう。このほか、緑色透明のガラス玉が３点（**342～344**）出土している。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＫ３０（Fig.18・19、Ph.13）

Ｃ－３に位置する略正方形の土坑。ＳＫ０８に切られ、ＳＫ４６・ＳＫ８１を切る。一辺1.4～1.5ｍ、

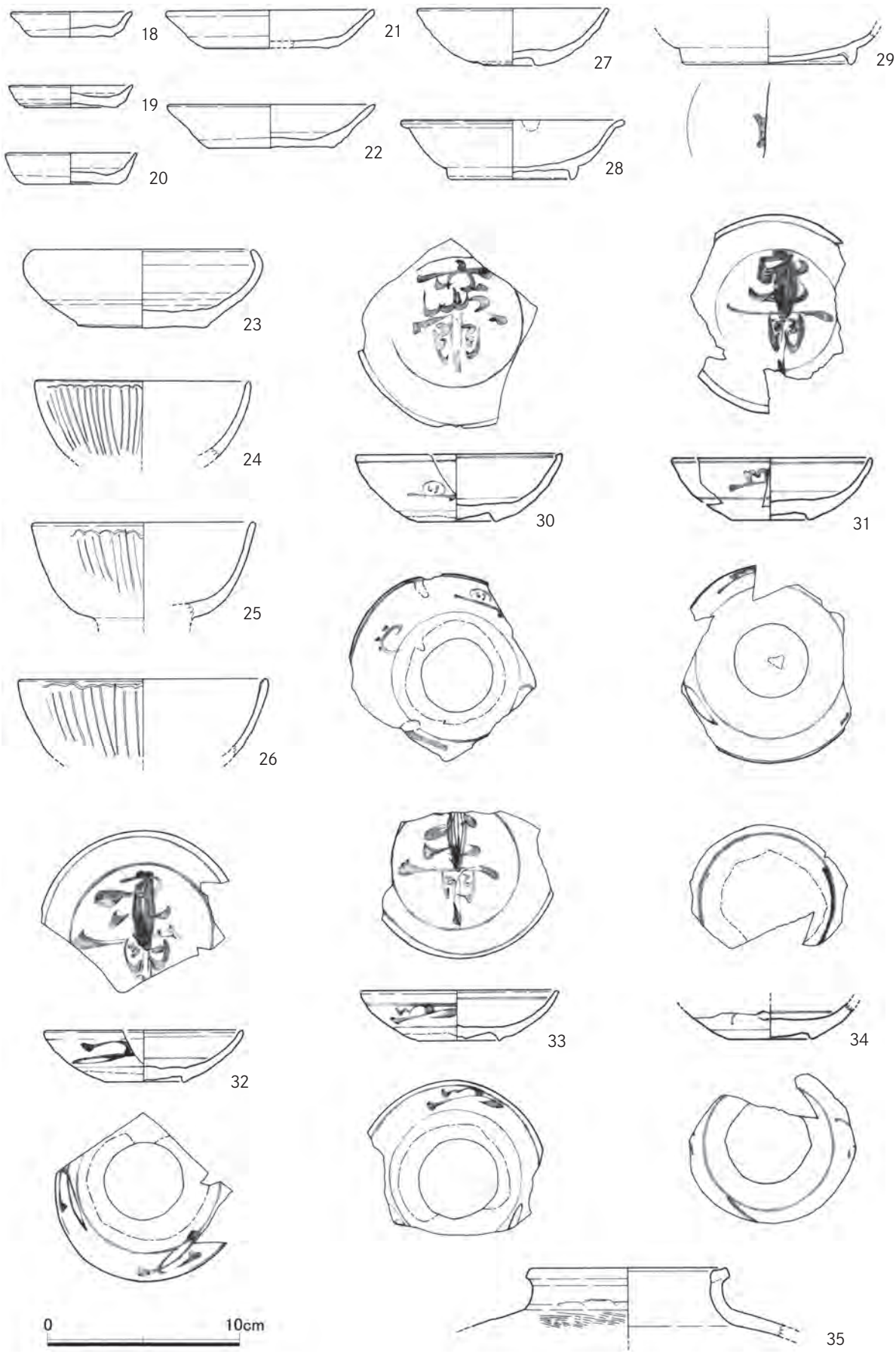
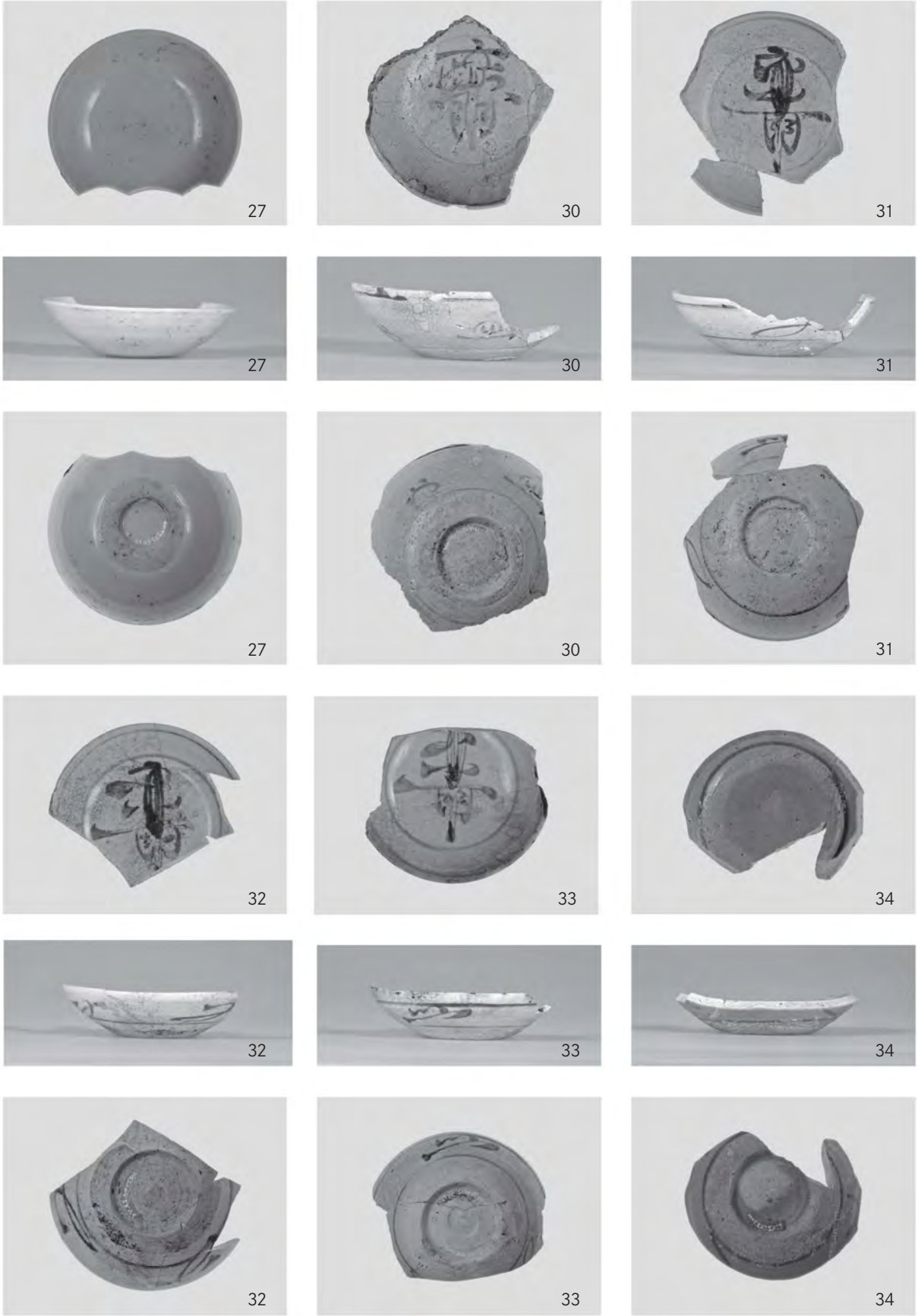


Fig.17　ＳＸ２９出土遺物実測図（1/3）

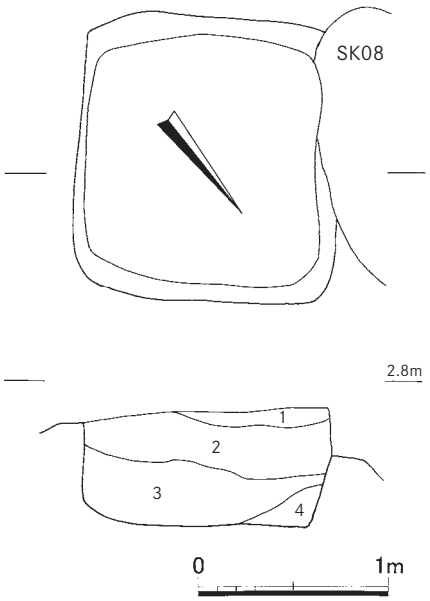


Ph.12　ＳＸ２９出土遺物（約1/3）

深さ60cm。整った形状をしており、地下蔵として利用されたか。

出土遺物をFig.19に示す。**36**は中国景徳鎮産の青花碗Ｃ群。内底に二重の渦文と丸を三つ結合した文、体部外面に丸を三つ結合した文を描く。呉須の発色は灰色味だが比較的良い。ＳＫ７６、近世井戸ＳＥ１３出土片と接合している。**37**は中国華南産の青花碗。内底に黒ずんだ発色の丸文が入る。釉は灰色味で透明度はやや低い。光沢は

Ph.13　ＳＫ３０（東から）



1. 茶褐色砂質土　炭化物・焼土含む。
2. 暗灰褐色砂質土　炭化物多く含む。焼土含む。
3. 暗灰褐色砂質土　２より明るい。しまりなし。炭化物・焼土含む。
4. 灰黄褐色砂質土　炭化物含む。

Fig.18　ＳＫ３０実測図（1/40）

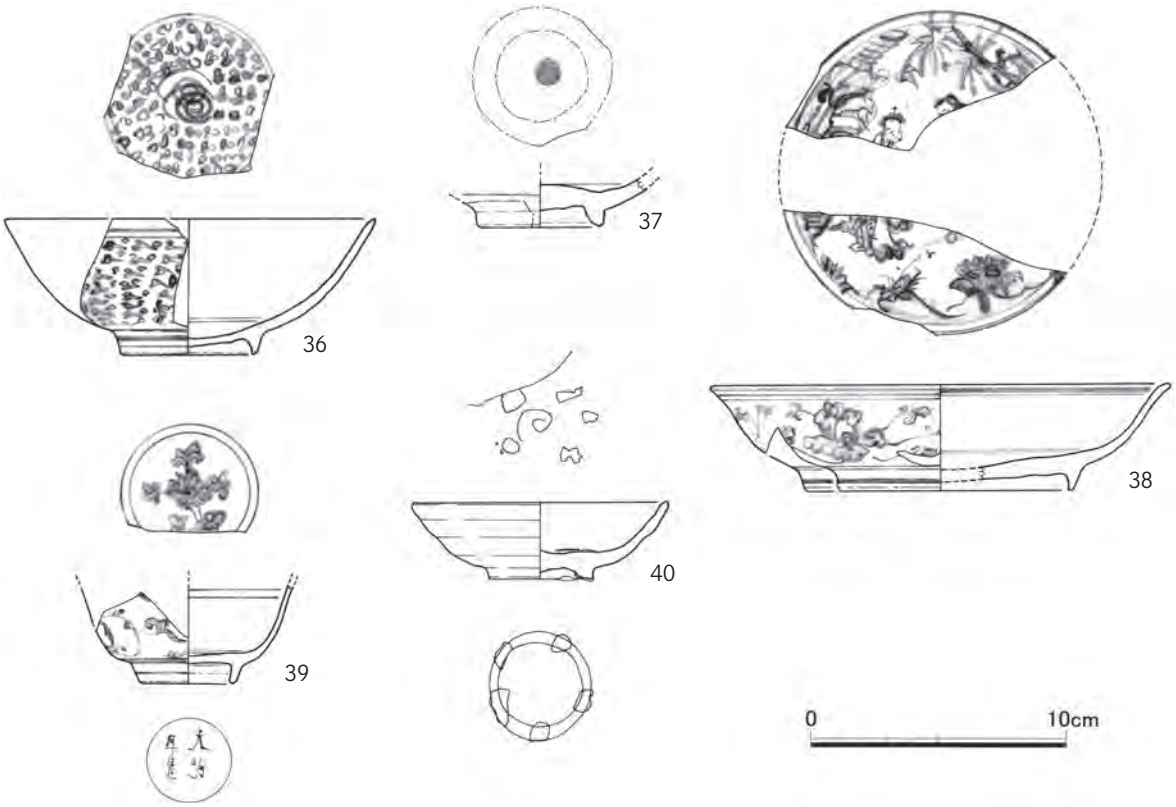


Fig.19　ＳＫ３０出土遺物実測図（1/3）

強くごく細かい貫入が入る。内面から外面高台脇までやや厚く施釉され、内底の釉を輪状に掻き取る。近世井戸ＳＥ１３出土片と接合している。**38**は中国景徳鎮産のやや大きめの青花皿Ｂ－１群。内面に人物、体部外面に牡丹唐草文を描く。近世井戸ＳＥ１３出土片と接合している。**39**は中国景徳鎮産の青花坏。内底に花卉文、外面胎部に唐草文を描き、外底に「大明年造」の銘。**40**は朝鮮王朝の灰青陶器の皿。内底、高台畳付にそれぞれ５ヶ所の砂目。胎土は灰色で黒色と白色の微砂粒を含む。釉は緑がかった灰色で光沢がある。暗赤褐色～黒色の斑点がある。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

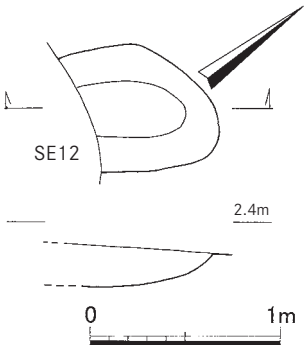


Fig.20　ＳＫ３７実測図（1/40）

SK37（Fig.20・21）

Ｇ－３に位置する楕円形の土坑。近世井戸ＳＥ１２に切られる。残存長軸0.8ｍ、短軸0.7ｍ、深さ20cm。

出土遺物をFig.21・Ph.13に示す。**41**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。内面と外面の一部にスス付着。復元口径7.3cm、底径5.0cm、器高1.0cm。**42**は土師器の坏。底部は回転糸切り。復元口径10.2cm、復元底径5.2cm、器高1.7cm。**43**は中国景徳鎮産の青花碗Ｅ群。ＳＫ１２０・ＳＫ１６０出土片と接合した内底に人物を描く。外底に銘を入れる。**44**は朝鮮王朝褐釉陶器の瓶である。胎土は内部が暗赤色、外面が灰黒色を呈し、白色砂粒を含む。外面に褐色～暗緑褐色の光沢のある釉がかかる。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

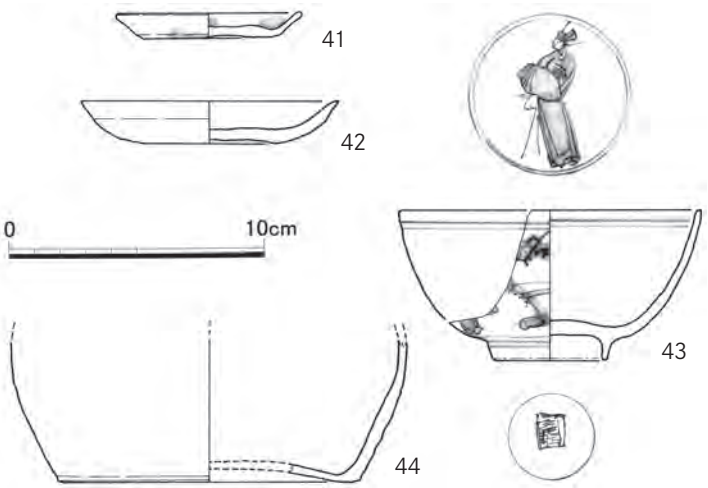


Fig.21　ＳＫ３７出土遺物実測図（1/3）

SK38（Fig.22・23、Ph.14）

Ｈ・Ｉ－６・７に位置する円形の土坑。径1.9～2.0ｍ、深さ50cm。ＳＸ３９を切る。

出土遺物をFig.23・Ph.14に示す。**45**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されていたもの。口径6.9cm、底径1.8cm、器高4.2cm。**46～52**は土師器の坏。底部は回転糸切り。**46**は口径9.8cm、底径5.3cm、器高2.2cm。内面一部にススが付着。**47**は復元口径10.2cm、底径7.2cm、器高2.2cm。**48**は復元口径10.5cm、復元底径7.3cm、器高2.3cm。外底に板状圧痕。**49**は復元口径

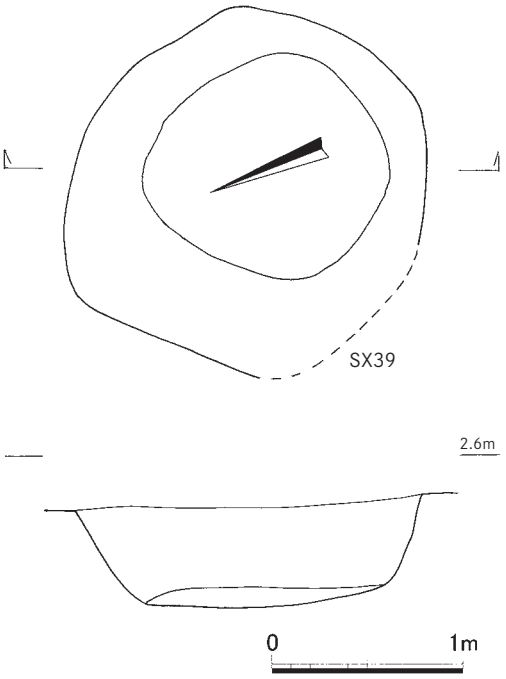


Fig.22　ＳＫ３８実測図（1/40）

10.8cm、復元底径7.1cm、器高2.6cm。外底に板状圧痕。**50**は復元口径11.6cm、復元底径6.6cm、器高2.1cm。胎土緻密で砂粒の混入は少ない。橙白色～淡橙色を呈する。**51**は復元口径11.6cm、底径5.0cm、器高3.3cm。他に比べ底径が小さく器高が高い。外底に複数の糸切り痕。**52**は復元口径8.6cm、復元底径6.2cm、器高3.5cm。体部が直立する。**53・54**は中国景徳鎮産の白磁皿。**53**はE－２ｂ類。**54**は菊皿のE－４類で外底に呉須で「下」銘が残る。「天下太平」であろう。1.4m北に位置するＳＫ５５出土片、さらに北のＩ－１包含層出土片と接合した。**55**は中国産白磁の稜花皿で内底の釉を輪状に掻き取る。外面は高台脇まで釉がかかる。胎土はやや粗く黒色粒子を含み、軟質。釉はやや青緑がかり、光沢がある。細かい貫入が入る。**56**は中国福建省産の白磁皿。内底と体部下半は露胎。外底に墨書がある。「田」

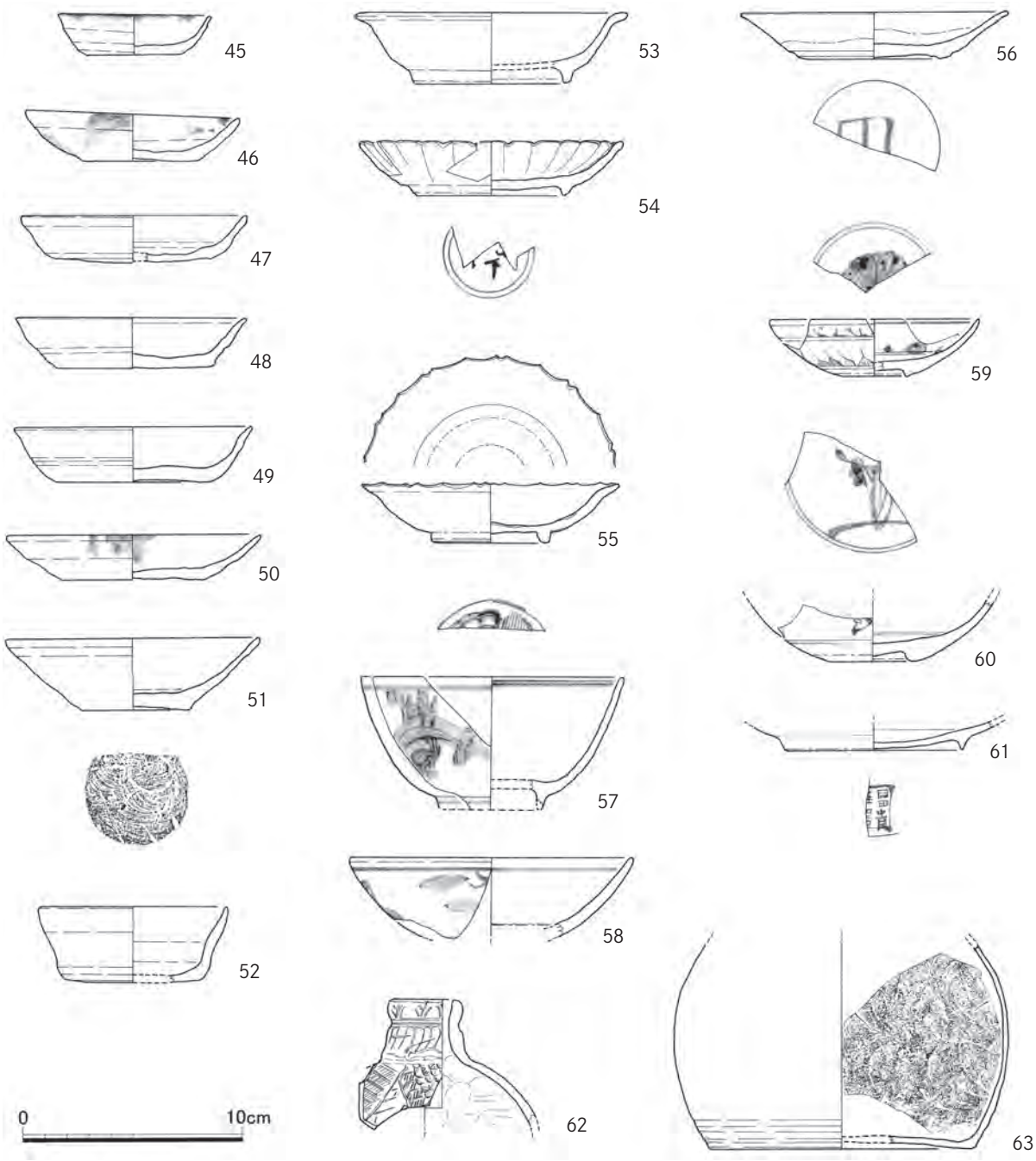
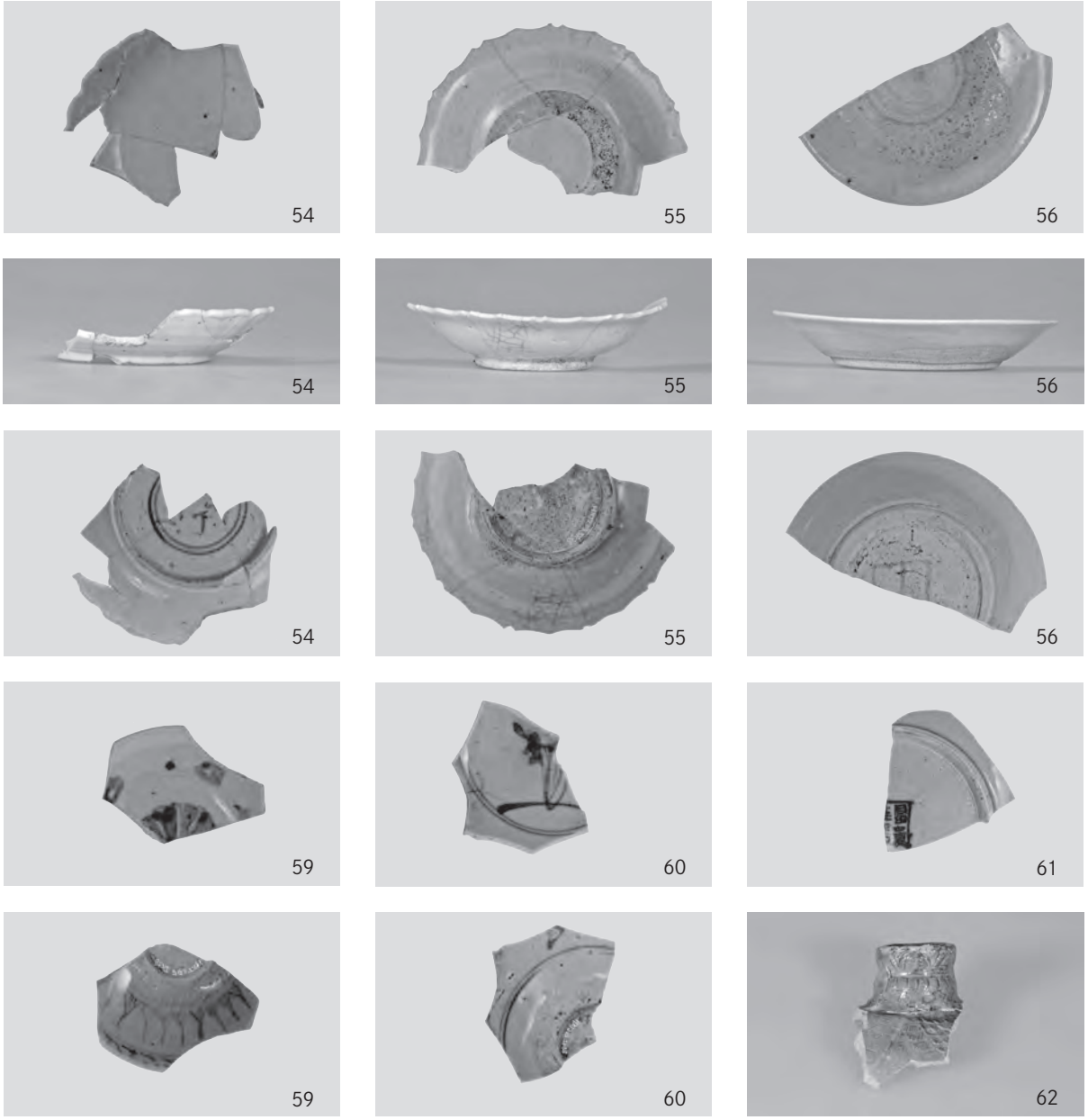


Fig.23　ＳＫ３８出土遺物実測図　(1/3)



Ph.14　ＳＫ３８出土遺物（約1/3）

か。**57**は中国景徳鎮産の青花碗Ｅ群。やや青味がかった釉がかかる。呉須は内面、やや黒ずんだ発色、外面は橋上の人物群を描き、発色は良いが、にじんでいる。**58**は中国華南産の青花碗。口縁は直口、灰黄色味の釉を厚くかける。内底の釉を掻き取っている。呉須はやや淡く、にじんでいる。**59～61**は中国景徳鎮産の青花皿。**59・60**は碁笥底を呈するＣ群。**59**は黄色味がかった釉がかかり、呉須は発色悪く、黒味がかり、圏線と外面は非常に薄い。**60**はやや青味がかった釉がかかり、呉須の発色は良い。**61**はＢ２群。内底は圏線のみ、外底には「富貴佳器」の銘。**62**は中国の華南三彩水注。鴨形水注の破片と思われる。型打成形される。胎土は淡黄茶色で砂粒の混入は少ないがやや粗い。やや軟質。釉薬は明緑色で、光沢がある。口縁のごく一部に黄色、白色の部分がある。釉下に白色化粧土を施す。ＳＸ２９・ＳＫ１１６出土片と接合している。**63**は朝鮮王朝陶器の瓶である。外面に施釉され、茶褐色を呈する。内面は露胎、暗灰色で、一部釉垂れがある。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

SX39（Fig.24、Ph.15）

G～I－6・7に位置する石組土坑。東側はＳＫ３８に切られ、石積みは残っていないが石材の抜き取り痕が一部残っている。石組の内法は長辺1.6m、短辺1.0m。深さは60cmである。

SK40（Fig.25・26、Ph.16）

G・H－2に位置する略円形の土坑。径1.0～1.1m、深さ70cm。

出土遺物をFig.26・Ph.16に示す。**64・65・69**が上部15cmまでの上層から出土し、それ以外はその下、中～下層から出土した。**64**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。口径7.0cm、底径4.9cm、器高1.2cm。**65・66**は中国産の白磁皿Ｅ－２ａ類。高台脇まで釉がかかる。**66**の釉薬は青味強い。**67～69**は中国景徳鎮産の青花碗。**67**はＤ群。**68・69**はＥ群。**68**は内底に如意雲、外面体部に花卉文を描き、外底に「大明年造」の銘を入れる。**69**は内底に

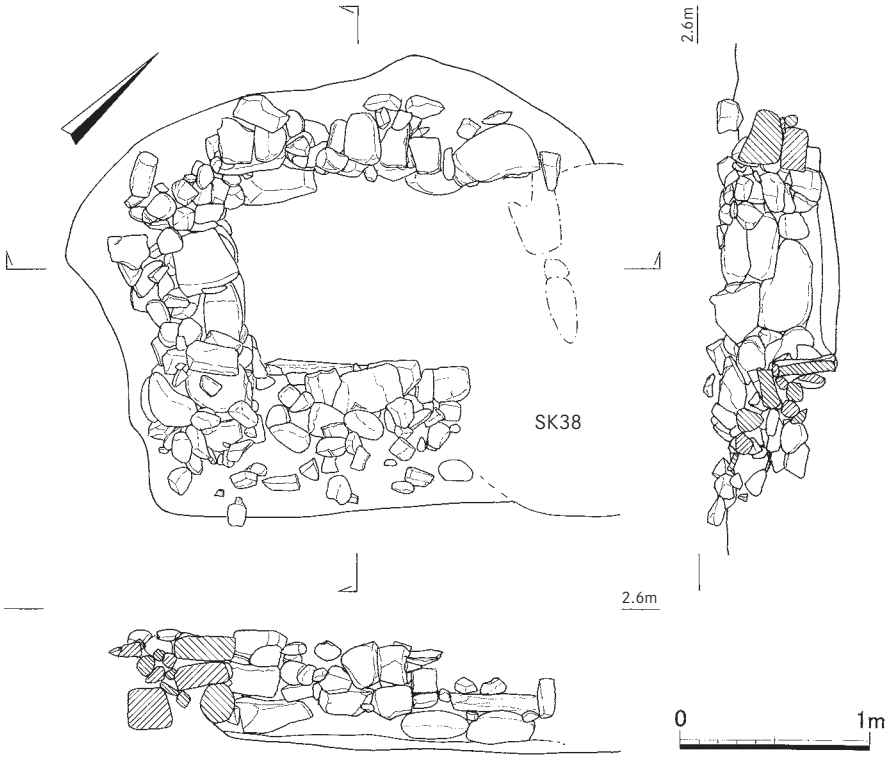


Fig.24　ＳＸ３９実測図（1/40）

Ph.15　ＳＸ３９（東から）

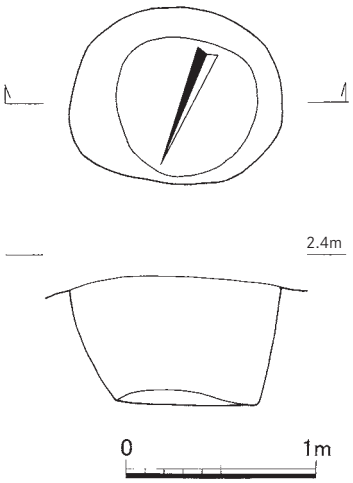


Fig.25　ＳＫ４０実測図（1/40）

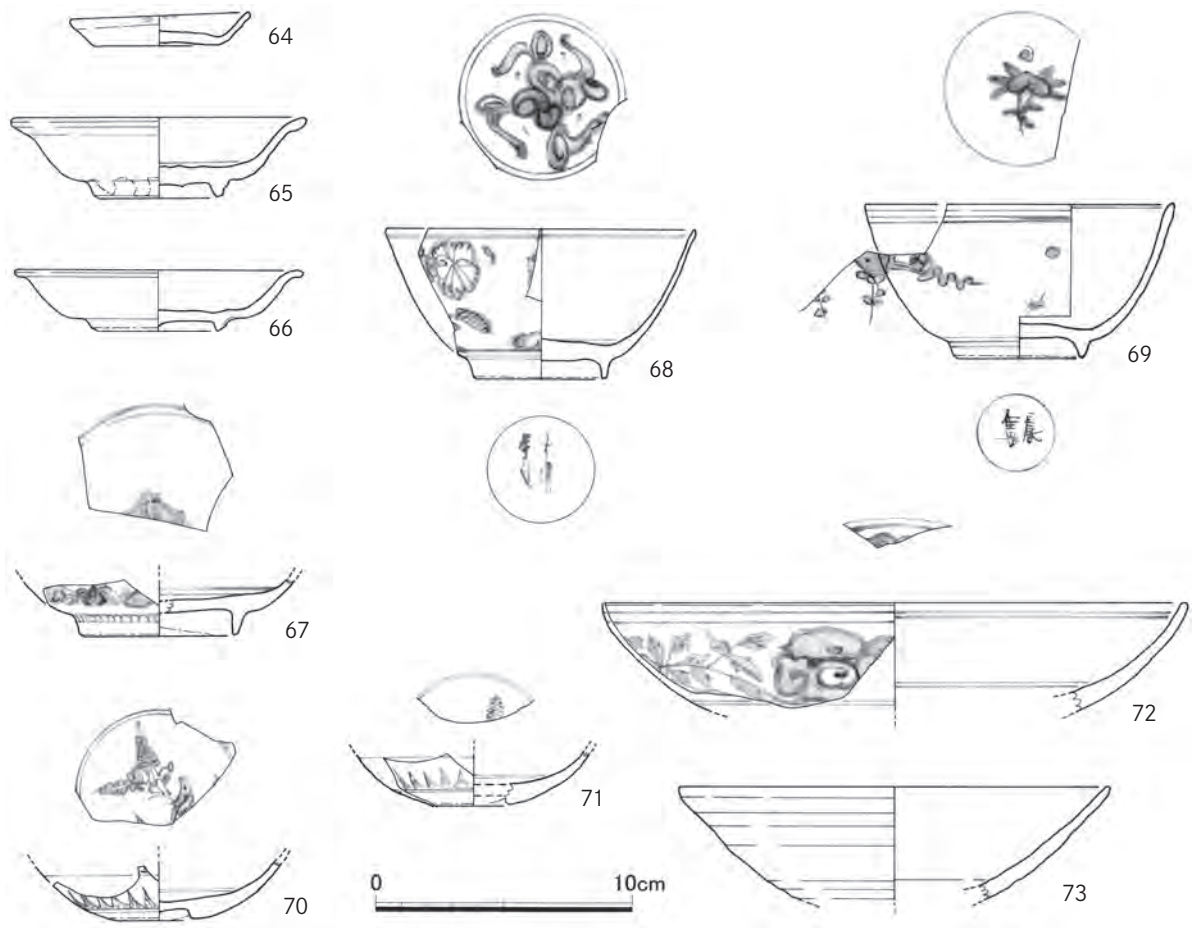
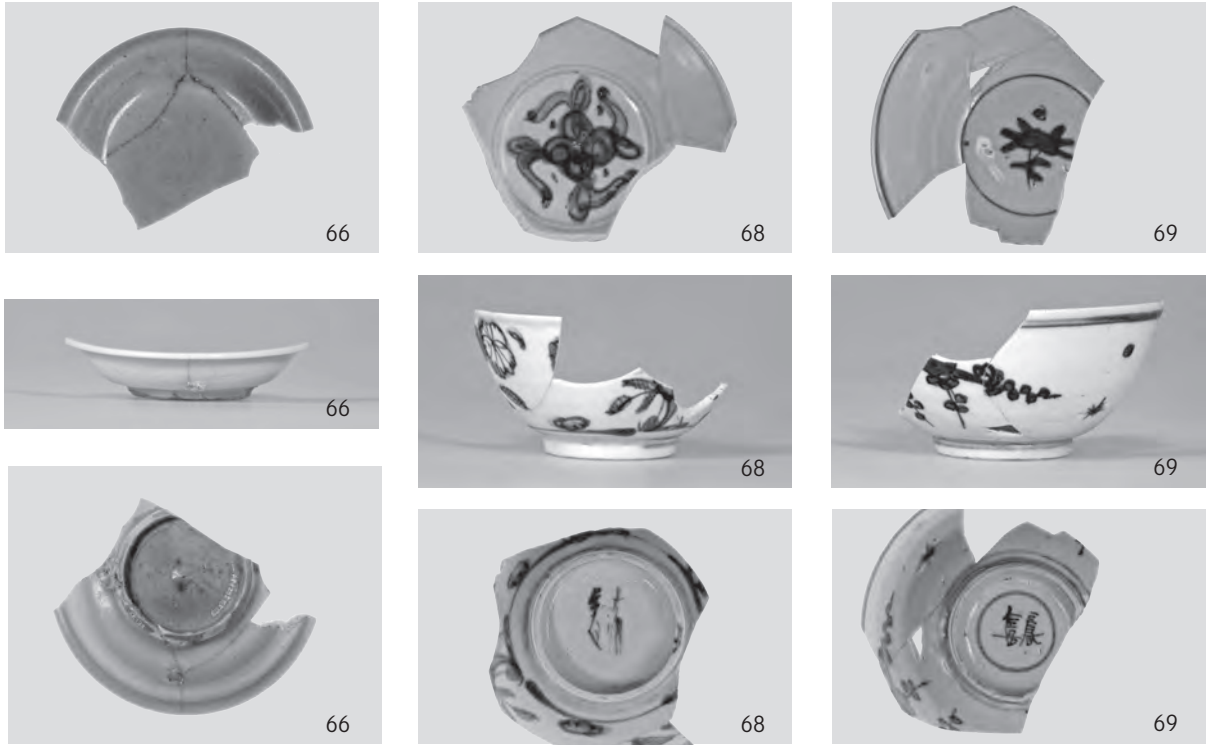


Fig.26　ＳＫ４０出土遺物実測図　（1/3）



Ph.16　ＳＫ４０出土遺物（約1/3）

花卉文、外面体部に梅月文を描き、外底に「長春佳器」の銘が入る。Ｃ－３包含層出土片と接合。**70・71**は中国景徳鎮産の青花皿Ｃ群。**72**は中国華南産の青花皿。やや大振り。黄灰色味で透明度やや低く、光沢鈍い釉がかかる。**73**は朝鮮王朝の灰青陶器の碗。**353**の土玉も出土している。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

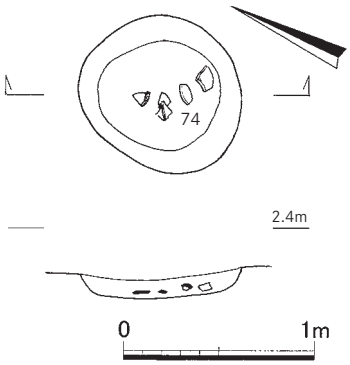


Fig.27　ＳＫ４１実測図（1/40）

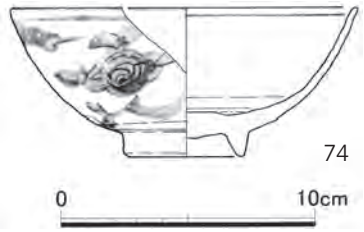
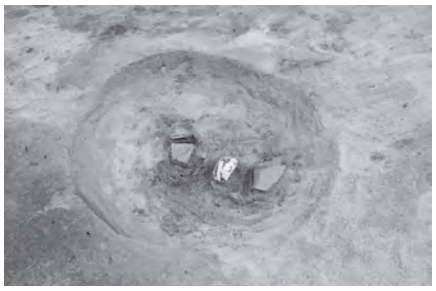
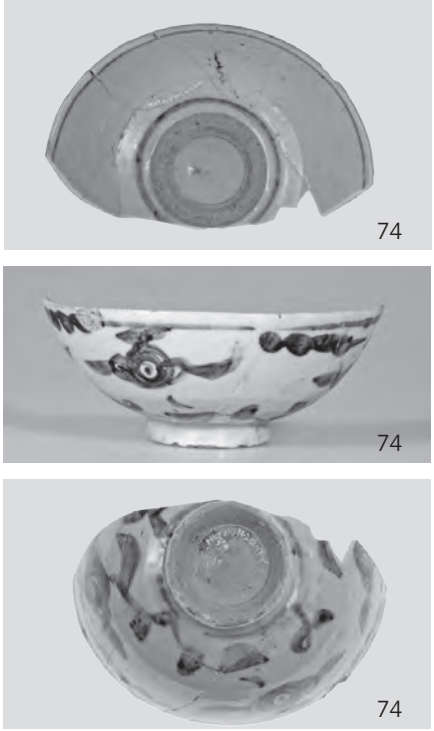


Fig.28　ＳＫ４１出土遺物実測図（1/3）



Ph.17　ＳＫ４１（南から）



Ph.18　ＳＫ４１出土遺物（約1/3）

ＳＫ４１（Fig.27・28、Ph.17・18）

Ｇ・Ｈ－３に位置する略円形の土坑。径0.9m、深さ15cm。

出土遺物をFig.28・Ph.18に示す。**73**は中国華南産の青花碗。内面から高台外面まで施釉され、内底は輪状に掻き取る。成形時のケズリ痕が比較的顕著に残る。呉須の彩度は低い。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

ＳＫ４６（Fig.29・30、Ph.19）

Ｃ－２に位置する楕円形の土坑。東側はＳＫ３１に切られ、残存しない。残存長軸1.2m、短軸1.3m、深さ90cm。そのほか、ＳＫ０８・２７・３０・ＳＤ４７に切られ、ＳＫ８１を切る。

出土遺物をFig.30・Ph.19に示す。**75**は体部外面に線描蓮弁文を施す中国龍泉窯系青磁の碗Ｂ－Ⅳ´。胎土は黄白色、硬質。釉は黄茶色で透明度はやや低く、全体に細かい貫入が入る。光沢あり。内面から高台内面中位まで厚く施釉される。ＳＫ３１出土片と接合した。**76・77**は中国景徳鎮産の青花碗Ｃ群。**76**は内底と体部外面に丸を三つ結合した文を描く。Ｆ－２包含層出土片と接合した。**77**は内底に法螺貝、口縁外面に波濤文、体部外面にアラベスク文を描く。ＳＫ３１・４２・ＳＤ４７出土片と接合した。**78**は中国景徳鎮産の青花皿Ｃ群。内底に魚文を貼り付け、呉須で水草を描く。外面は無文。**79**は中国景徳鎮産の瑠璃釉碗。内面と高台内は透明釉で、外面に濃紺色の釉がかかる。近世井戸ＳＥ１３出土片と接合。**80**は朝鮮王朝の硬質白磁碗。ＳＤ４７出土片と接合した。**81**は朝鮮王朝の粉

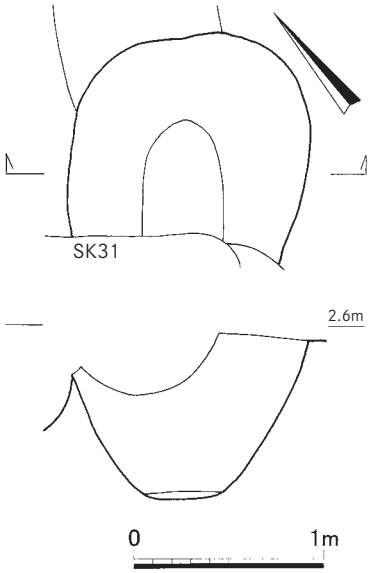


Fig.29　ＳＫ４６実測図（1/40）

青沙器刷毛目碗。**82～84**は瓦質土器片口擂鉢。**82**は４本単位の擂り目。16ヶ所に配置か。胎土は砂粒の混入少なくきめが細かい。暗灰色～灰褐色を呈する。**83**は４本単位の擂り目。13ヶ所残存しているが、全体で16ヶ所あったと思われる。胎土は砂粒の混入少なく均質。暗灰色～灰白色を呈する。ＳＫ０８・３１・４２出土片と接合している。**84**は８本単位の擂り目。12ヶ所に配置か。胎土は１mm以下の砂粒をやや多く含む。内面灰色、外面黒灰色を呈する。口縁部内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。防長系。ＳＫ８１・１１１出土片と接合した。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

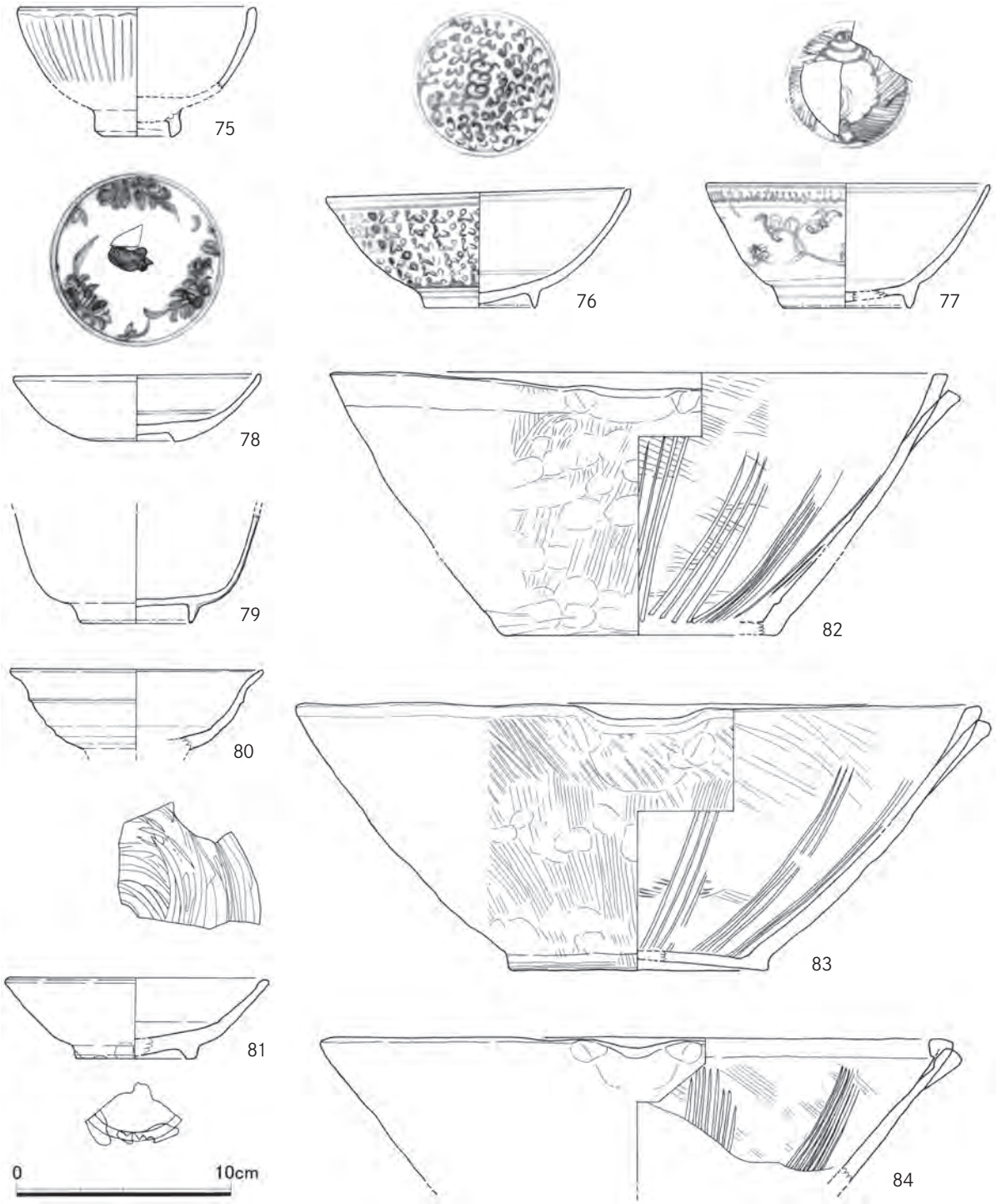
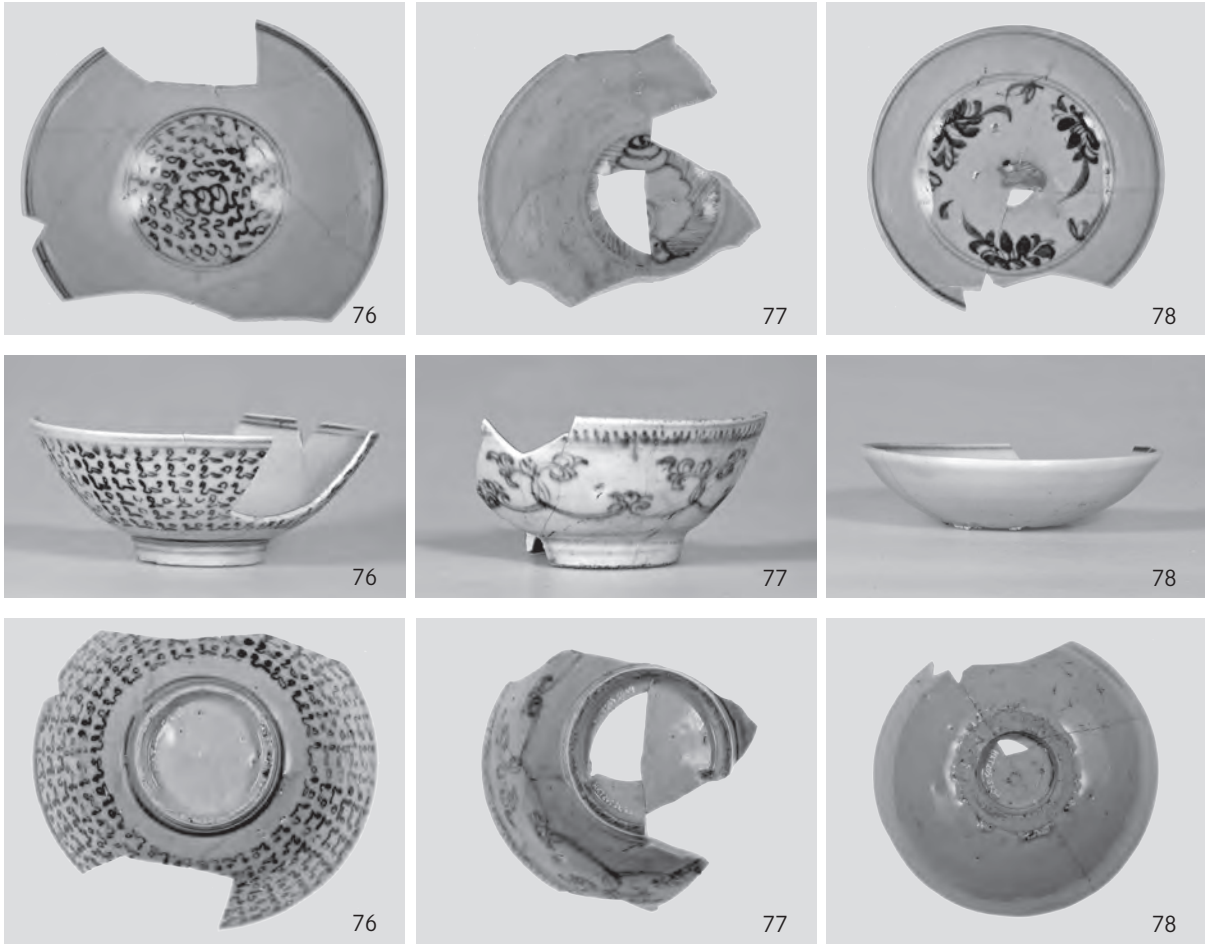


Fig.30　ＳＫ４６出土遺物実測図（1/3）



Ph.19　ＳＫ４６出土遺物（約1/3）

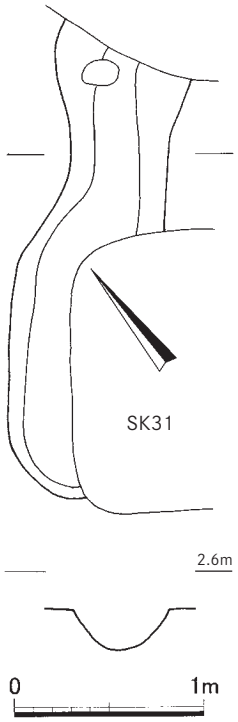


Fig.31　SD４７実測図（1/40）

SD47（Fig.31・32）

Ｃ～Ｅ－２に位置する溝。東側は近世井戸ＳＥ１３に切られる。南側をＳＫ３１に切られ、西側でＳＫ４６を切る。残存長2.5m、幅50～70cm。

出土遺物をFig.32に示す。**85～87**は中国景徳鎮産の白磁皿Ｅ－２ｂ類。**88**は中国景徳鎮産の青花碗Ｂ群。体部外面に牡丹唐草文、口縁内面に四方襷文を施す。

出土遺物や切り合いから16世紀後半の遺構と考えられる。

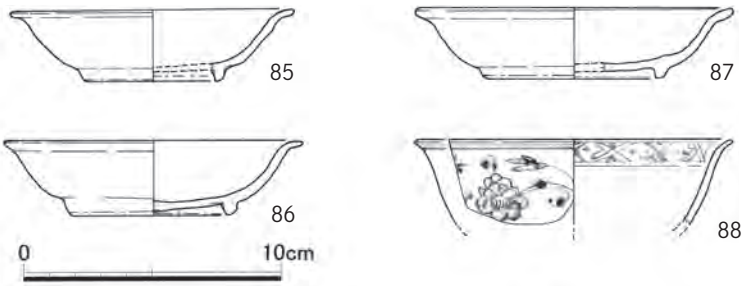


Fig.32　SD４７出土遺物実測図（1/3）

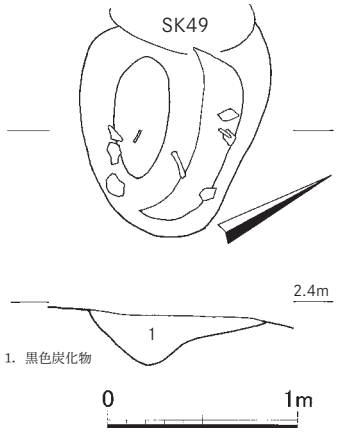
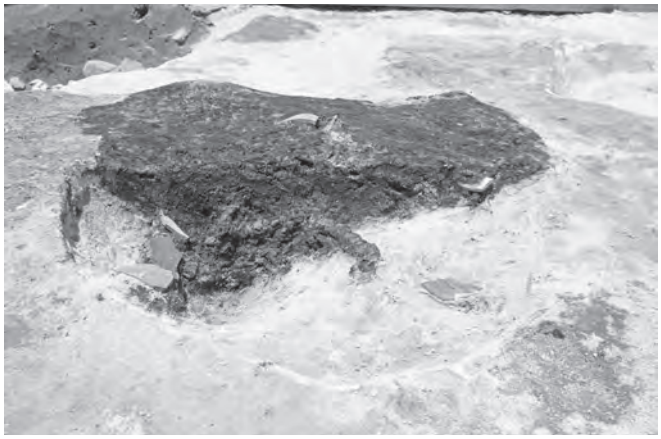


Fig.33　ＳＫ５０実測図（1/40）



Ph.20　ＳＫ５０土層（南から）

SK50（Fig.33、Ph.20）

Ｉ・Ｊ－５に位置する楕円形の土坑。西側が深くなっている。長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍ、深さ30cm。炭化物で埋まっていた。水洗の結果、炭化した籾と塊状の籾が浅いコンテナケース３分の１ほど採集できた。ＳＫ４９に切られ、ＳＫ６６を切る。

SK51（Fig.34）

Ｊ－４・５に位置する略円形の土坑。径0.9～1.0ｍ、深さ20cm。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、外皮を取り除いた炭化麦が浅いコンテナケース３分の１ほど採集できた。ＳＫ６９を切る。

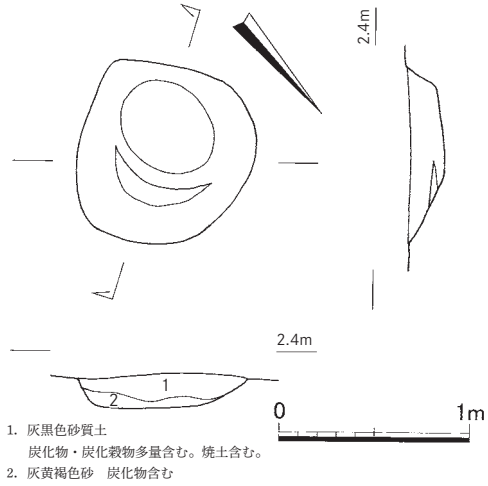


Fig.34　ＳＫ５１実測図（1/40）

SK52（Fig.35・36、Ph.21・22）

Ｊ－５に位置する楕円形の土坑。長軸1.0ｍ、短軸0.8ｍ、深さ15cm。ＳＫ６１を切る。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、炭化した籾と外皮を取り除いた炭化麦が浅いコンテナケース３分の１

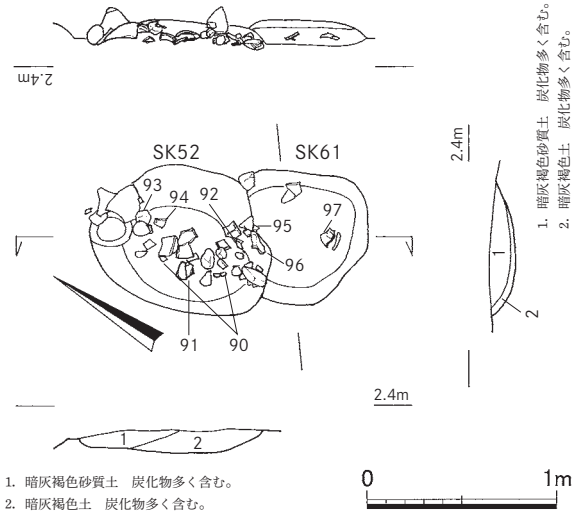


Fig.35　ＳＫ５２・６１実測図（1/40）

Ph.21　ＳＫ５２（東から）

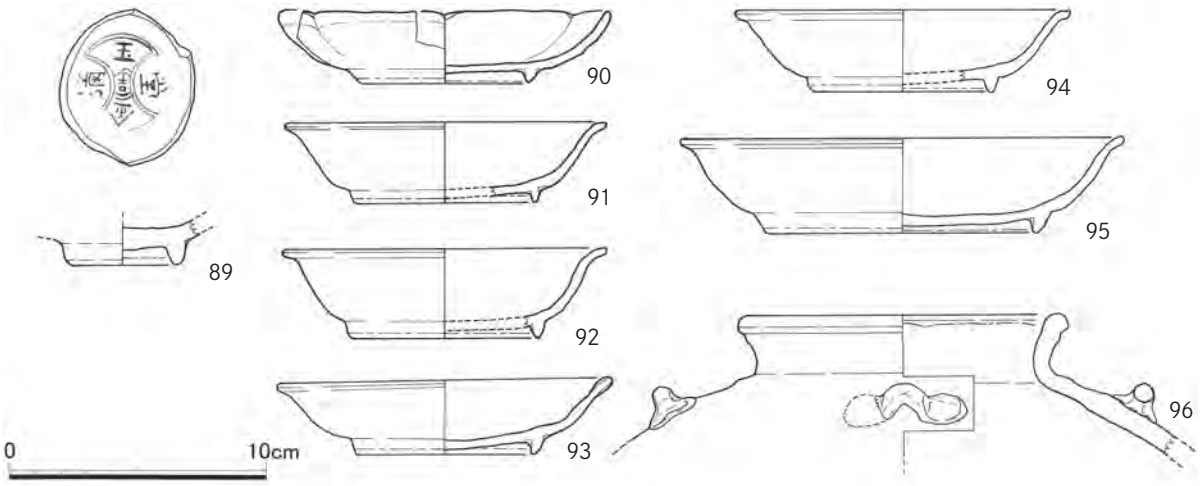


Fig.36　ＳＫ５２出土遺物実測図（1/3）

ほど採集できた。ＳＫ６１を切る。

出土遺物をFig.36・Ph.22に示す。**89**は中国龍泉窯系青磁の碗。釉は灰緑色で透明度はやや低く、光沢は強い。粗い貫入が入る。内面から外面高台内面中位まで施釉。内底に分銅に「吉」と「金玉満堂」のスタンプ。**90～95**は中国景徳鎮産の白磁皿。**90**はＥ群輪花皿。６弁花となる。**91～95**はＥ－２ｂ類。**93**はＳＫ５１、**95**はＳＫ５３・５９・６１出土片と接合した。**92**と**94**は同一固体の可能性がある。**96**は備前焼の耳付壺。胎土は暗紫茶色で緻密、硬質。白色微砂粒・褐色砂粒をやや多く含む。口縁部に暗褐色で薄く、体部に暗灰緑色で厚く施釉される。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

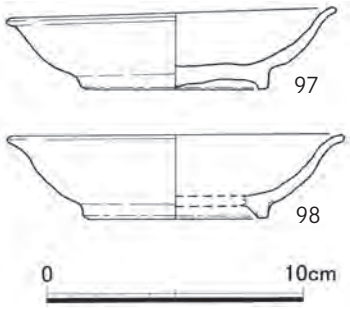
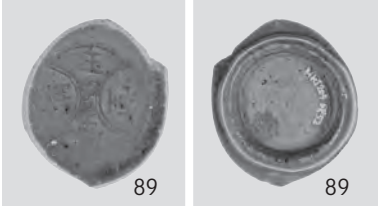
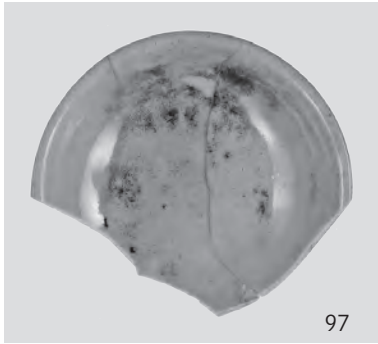
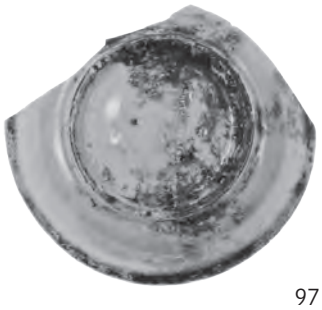


Fig.37　ＳＫ６１出土遺物実測図（1/3）



Ph.22　ＳＫ５２出土遺物（約1/3）





Ph.23　ＳＫ６１出土遺物（約1/3）

ＳＫ61（Fig.35・37、Ph.23）

Ｊ－５・６に位置する略円形の土坑。径0.7ｍ、深さ15cm。ＳＫ５２に切られる。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、炭化した籾と少量の外皮を取り除いた炭化麦、外皮がついたままの炭化麦が浅いコンテナケース６分の１ほど採集できた。

出土遺物をFig.37・Ph.23に示す。**97・98**は中国景徳鎮産の白磁皿Ｅ－２ｂ類。**97**は一般的な景徳鎮産の白磁皿Ｅ－２ｂ類より厚手で、特に底部は外底部中央が突出する。高台も太い。全面にススが付着している。**98**はＳＫ５２出土片と接合した。

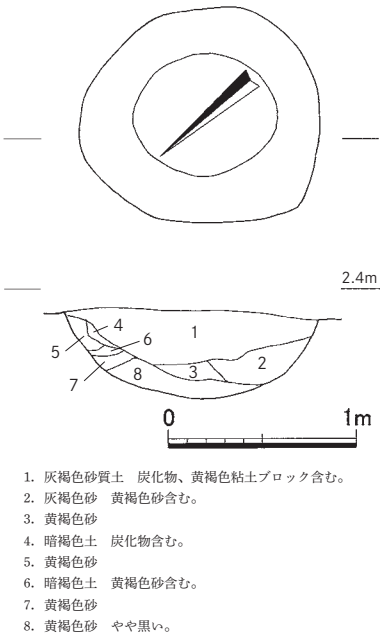


Fig.38　ＳＫ５３実測図（1/40）

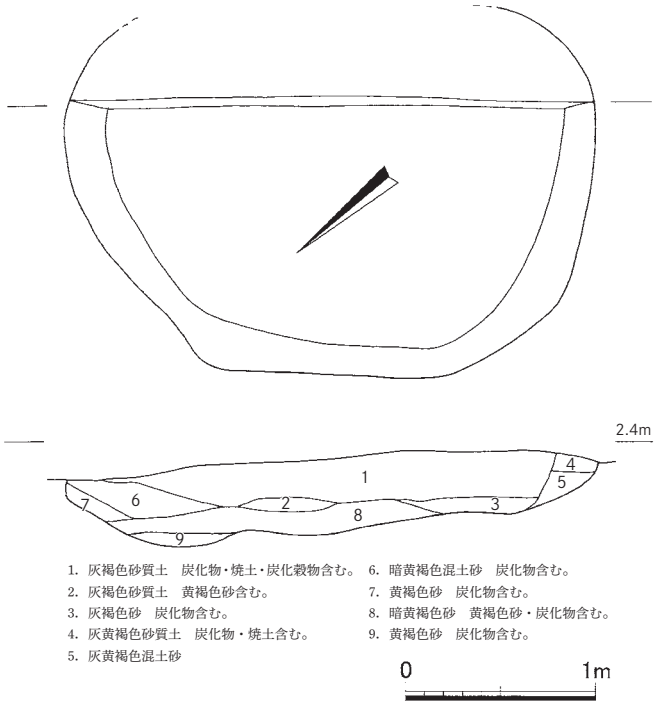


Fig.39　ＳＫ５４実測図（1/40）

Ph.24　ＳＫ５３土層（北から）

Ph.25　ＳＫ５４土層（北から）

SK53（Fig.38、Ph.24）

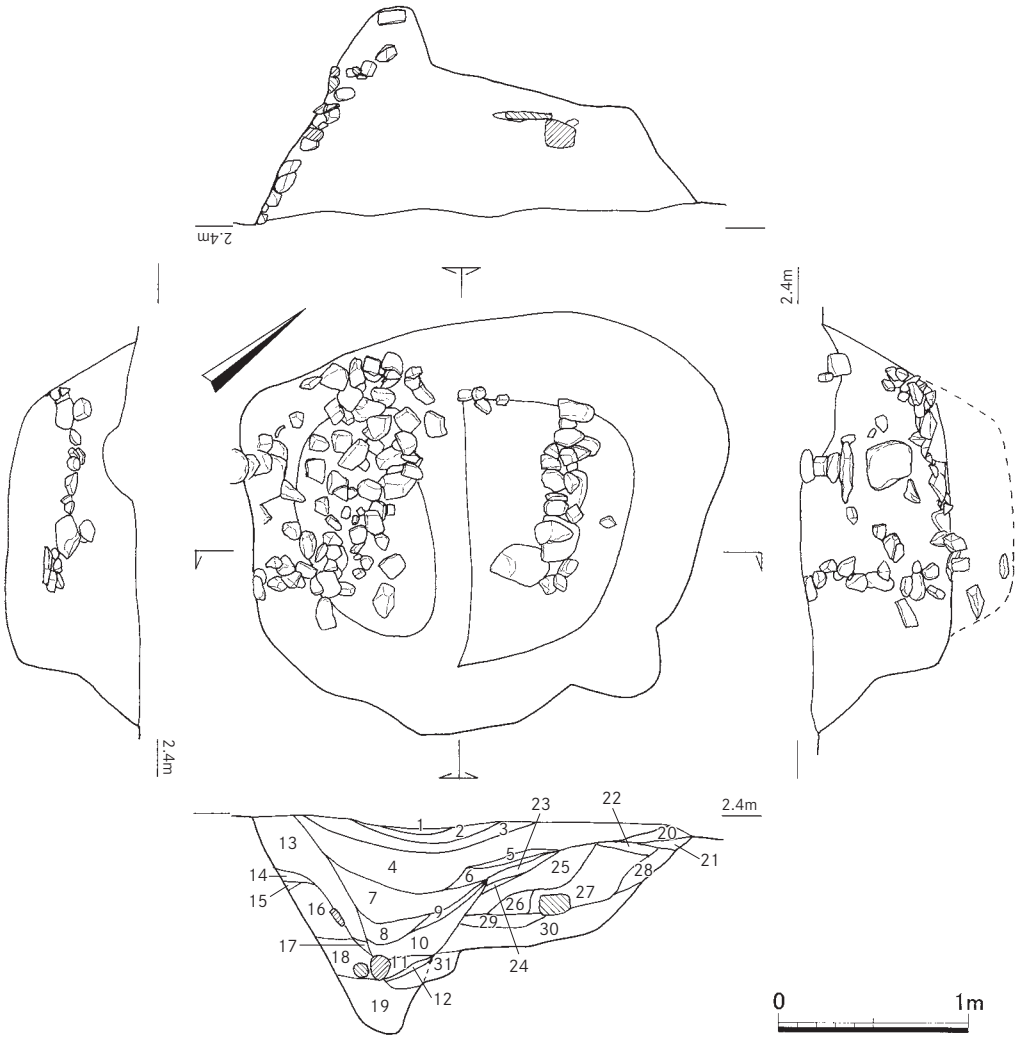
Ｊ・Ｋ－５・６に位置する略円形の土坑。径1.2 ～ 1.3m、深さ50cm。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、炭化した籾と少量の外皮を取り除いた炭化麦が浅いコンテナケース３分の１ほど採集できた。

SK54（Fig.39、Ph.25）

Ｊ・Ｋ－６・７に位置する楕円形の土坑。長軸2.8m、想定短軸2.0m、深さ40cm。南側は調査区外に延びる。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、炭化した籾と塊状の籾、微量の外皮を取り除いた炭化麦が浅いコンテナケース１箱ほど採集できた。

SK55・SX75（Fig.40 ～ 43、Ph.26 ～ 31）

ＳＫ５５はＨ・Ｉ－４・５に位置する土坑。長軸2.5m、短軸2.0m、深さ115cm。ＳＸ７５を切る。調査時に掘りすぎており、ＳＸ７５の東壁積石を露出させている。西側の礫はＳＸ７５を破壊したの



1．黄褐色粗砂
2．暗灰褐色砂質土　炭化物・焼土含む。
3．灰茶褐色砂質土
4．灰茶褐色砂質土　炭化物多く含む。
5．灰色砂質土　黄褐色砂含む。
6．灰色砂質土　炭化物含む。
7．灰色砂質土　粘性あり。炭化物多く含む。
8．暗黄褐色混砂土　粘性あり。炭化物含む。
9．灰茶褐色粗砂
10．暗灰色粘質土　暗灰色砂・炭化物・焼土含む。
11．灰色シルト
12．暗灰色粘質土　炭化物含む。
13．暗灰色砂質土　炭化物・焼土含む。
14．暗灰色砂質土　黄褐色砂含む。
15．黄褐色砂
16．灰褐色砂質土
17．暗黄褐色砂　炭化物含む。
18．暗灰色粘質土　炭化物・焼土含む。
19．黄褐色砂　灰褐色砂含む。
20．茶褐色砂質土　炭化物・焼土含む。
21．暗黄褐色砂
22．茶褐色砂質土　黄褐色砂含む。
23．灰褐色砂
24．暗灰色粘土
25．暗灰褐色砂質土　炭化物含む。
26．灰黄褐色砂
27．灰茶褐色砂質土　炭化物含む。
28．暗黄褐色砂質土　黄褐色砂含む。
29．暗灰褐色砂質土
30．暗黄褐色砂質土　黄褐色砂含む。
31．暗灰色砂質土　炭化物含む。

Fig.40　ＳＫ５５実測図（1/40）

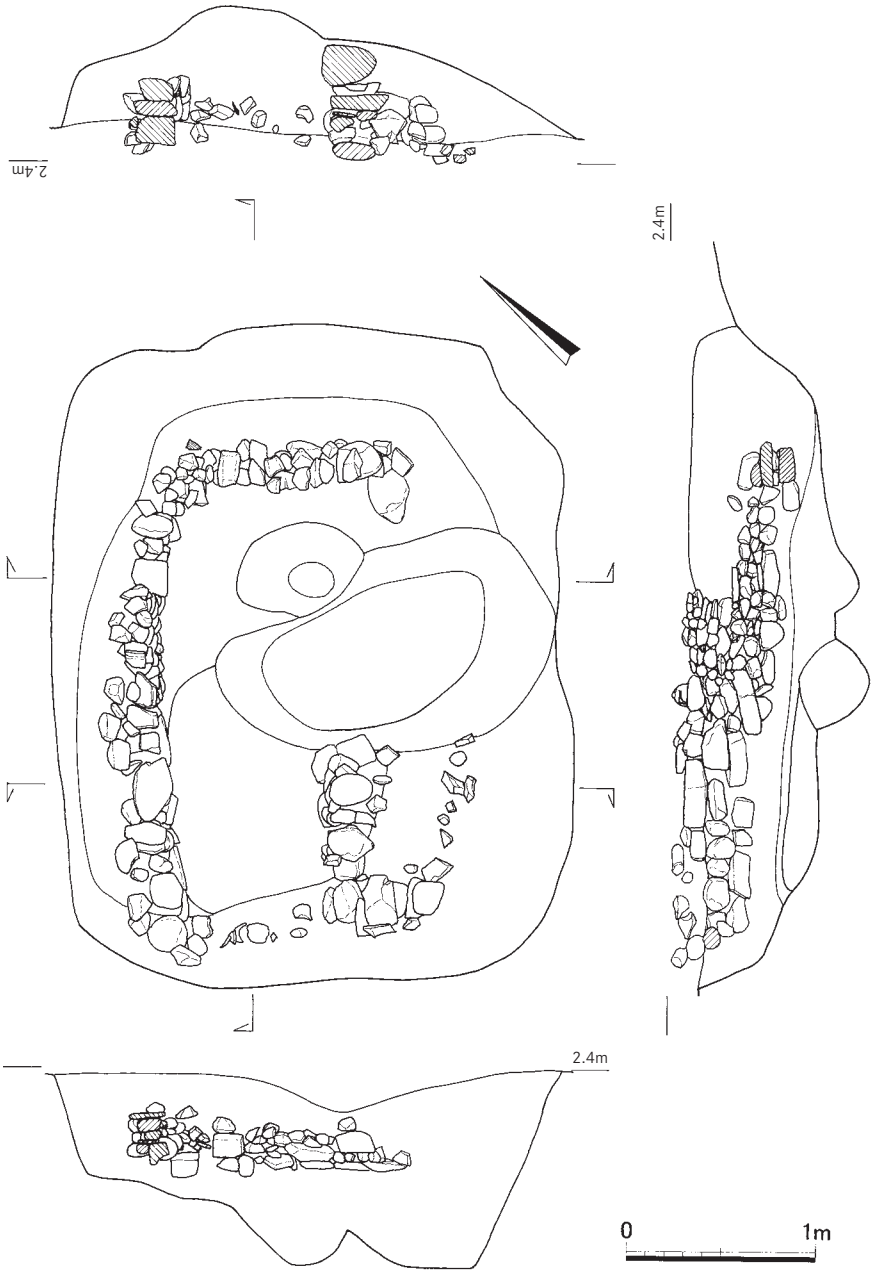


Fig.41　ＳＸ７５実測図（1/40）

Ph.26　ＳＫ５５土層（南から）

Ph.27　ＳＫ５５（東から）

Ph.28　ＳＸ７５（東から）

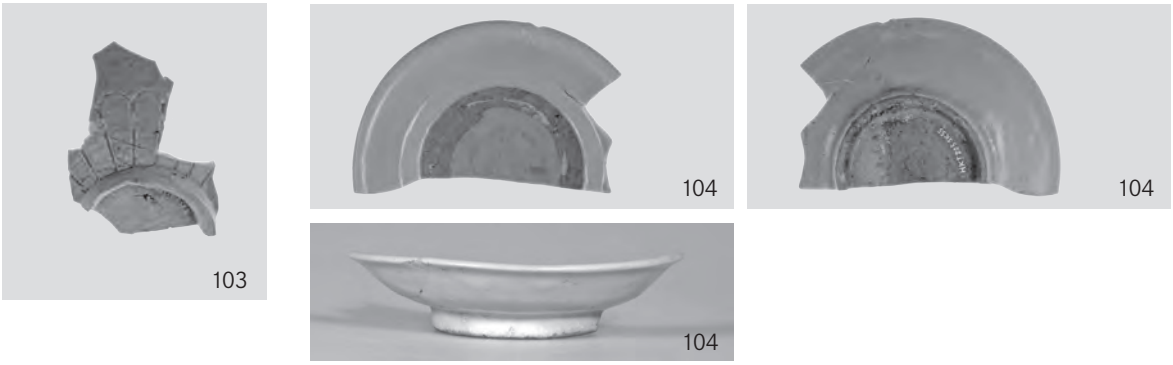
Ph.29　ＳＫ５５・ＳＸ７５（東から）

ち、出てきた礫を投げ込んだものであろう。土層図１層から19層がＳＫ５５の覆土であろう。19層と31層の境は調査時の観察ミスと思われ、破線が正しいと考えられる。

ＳＸ７５はＨ・Ｉ－４・５に位置する石積土坑。ＳＫ５５に切られる。北壁と東壁の石積はよく残るが、西側は残りが良くない。また、南側はＳＫ５５に破壊されている。石組の内法は長辺2.4ｍ、短辺0.8～1.1ｍ。深さは60cmである。

ＳＫ５５として取り上げた遺物をFig.42・Ph.30に示す。掘りすぎたためＳＸ７５の遺物も多く含んでいるであろう。**99**・**100**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。**99**は口径6.0cm、底径3.9cm、器高1.6cm。底部に板状圧痕がある。口縁部全周にススが付着しており、灯明皿として使用されている。**100**は口径6.7cm、底径4.2cm、器高1.5cm。**101**・**102**は土師器の坏。底部は回転糸切り。**101**は口径10.3cm、底径7.0cm、器高1.7cm。**102**は復元口径11.0cm、復元底径6.8cm、器高2.3cm。**103**は中国産の白磁碗。釉は透明度低い灰黄色味で内面から体部外面に施釉される。内底中央にヘラ彫りで花文、外面体部下位にヘラ彫りで花弁を描く。ＳＤ４８・ＳＸ３９出土片と接合。**104**は中国産の白磁皿。内面から外面高台下位まで施釉され、内底の釉を輪状に掻き取る。**105**は中国景徳鎮産の碁笥底を呈する青花皿Ｃ群。内底に花文、体部にアラベスク風の文様、外面は口縁部に波濤文、体部に芭蕉葉文を描く。全面施釉後、外面体部最下位の釉を掻き取る。**106**は中国華南産の青花皿Ｃ群。内底に「寿」字を描く。焼成不良で発色が悪い。胎土は淡灰黄色を呈し粗い。釉は黄色味を帯び、透明度は低い。全体に粗い貫入が入る。内面から外面底部近くまでやや厚く施釉。呉須は彩度が低く、薄く不鮮明。**107**～**110**は天目碗である。**109**が中国産の他は瀬戸。**111**は瓦質の擂り鉢。８本１単位の擂り目を交差に入れる。口縁部内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。外面口縁下をくぼませている。注口のくぼみは浅い。**112**は瓦質の方形の鉢。脚が外れた痕跡がある。外面にヘラによる沈線や半裁竹管によ

Fig.42　ＳＫ５５出土遺物実測図（1/3）



Ph.30　ＳＫ５５出土遺物（約1/3）

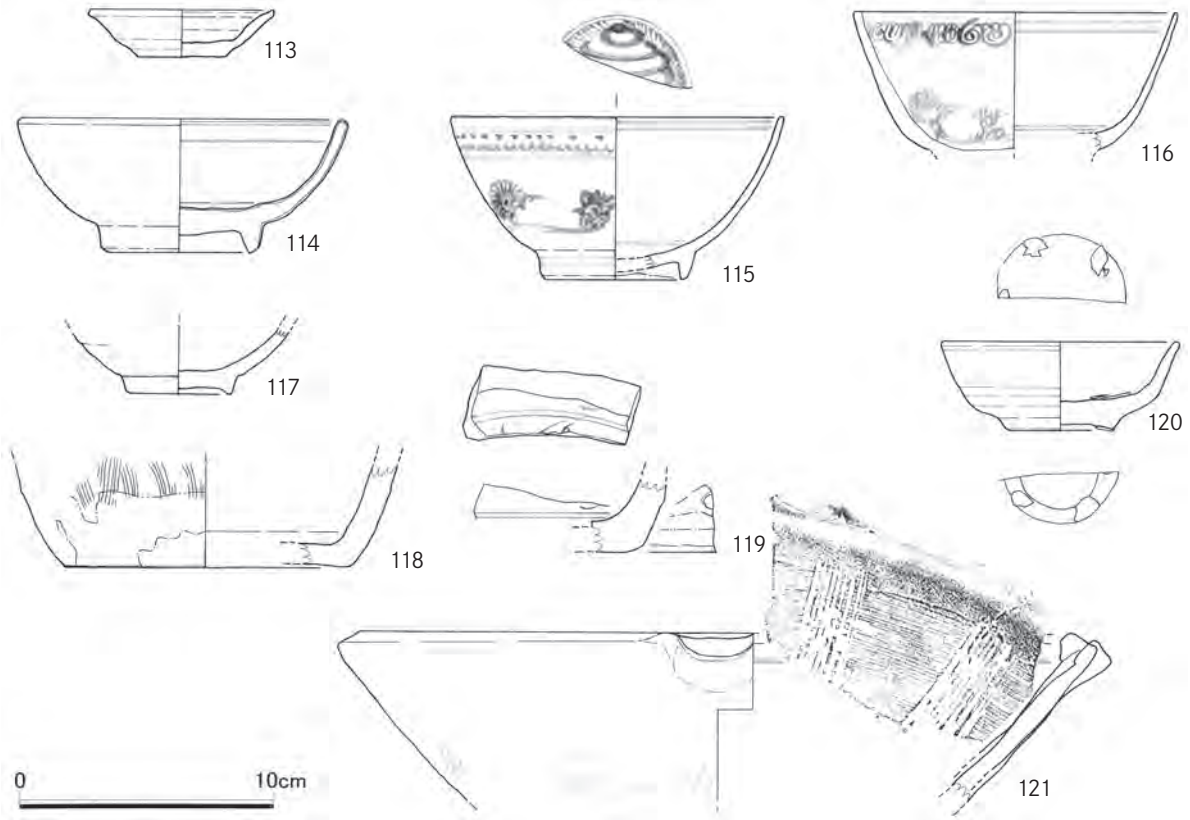
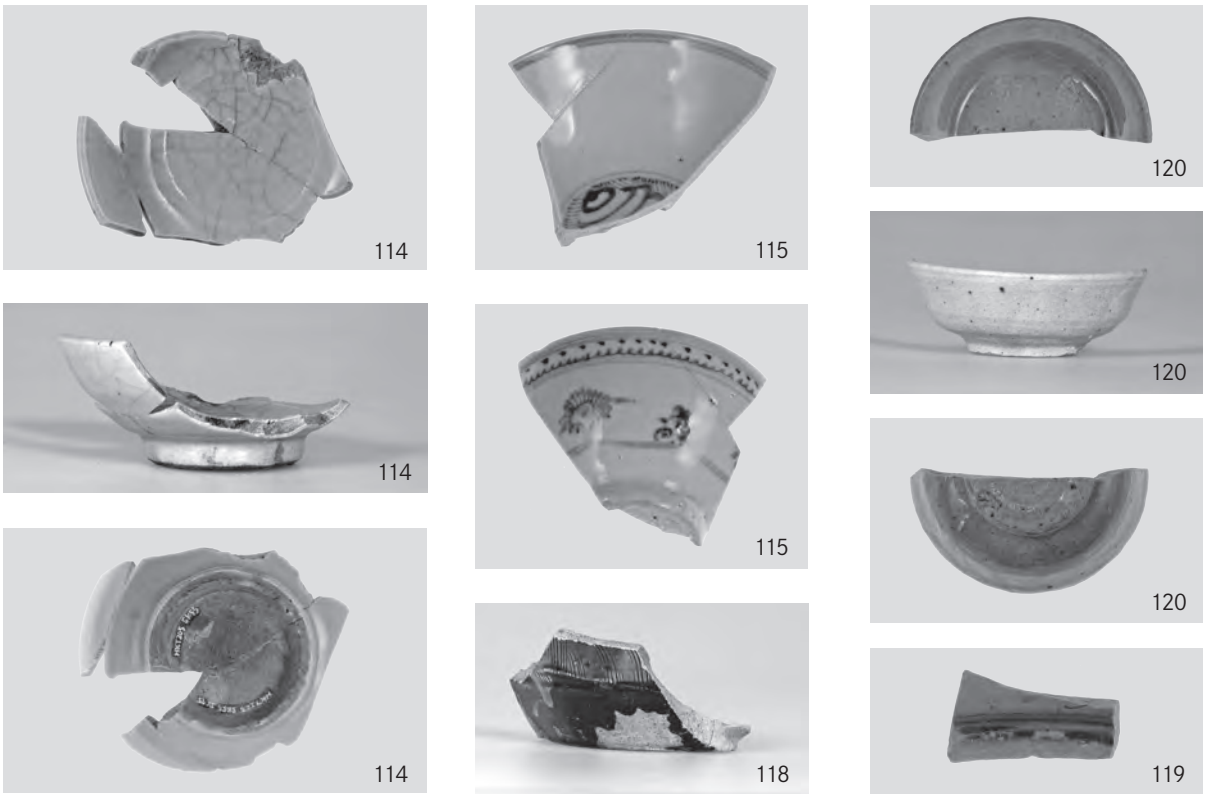


Fig.43　ＳＫ５５・ＳＸ７５出土遺物実測図（1/3）



Ph.31　ＳＫ５５・ＳＸ７５出土遺物（約1/3）

る半円、小さな四菱文スタンプなどが施される。

Fig.43･Ph.31はＳＫ５５・ＳＸ７５として取り上げた遺物。**113**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。復元口径7.3cm、底径3.5cm、器高1.9cm。**114**は中国産の青磁碗。灰色で硬質の胎土。白色・黒色の微砂粒を含む。釉は淡青白色で透明度は低く、光沢はある。全体に粗い貫入が入る。内面から高台外面まで厚く施釉される。Ｃ－４包含層出土片と接合した。**115･116**は中国景徳鎮産の青花碗。**115**はＣ群。内底に法螺貝､外面口縁部に波濤文､体部にアラベスク風の文様。**116**はＤ群。外面口縁部に渦巻き文、体部にアラベスク風の文様。**117**は瀬戸の天目碗である。**118・119**は中国華南三彩壺か盤。**118**の胎土は灰橙茶色で軟質、褐色微砂粒をやや多く含む。釉は内面が明緑色、外面は明緑・黄・茶色の三彩で光沢強い。全体に細かい貫入が入る。釉下に化粧土あり。外面体部に縦方向の櫛目を入れる。**120**は朝鮮王朝の軟質白磁。内底、高台畳付に砂目跡。**121**は瓦質の擂鉢。口縁部内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。擂り目は９本を１単位とする。防長系。他に**323**の茶臼も出土している。

出土遺物からいずれも16世紀前半の遺構であり、切り合いからＳＸ７５が古く、ＳＫ５５が新しい。

ＳＫ５９（Fig.44・45、Ph.32）

Ｋ・Ｌ－５に位置する円形の土坑。径1.2ｍ、深さ1.1cm。覆土は暗茶褐色砂である。ＳＤ７９を切る。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、炭化した籾が浅いコンテナケース３分の１ほど採集できた。

出土遺物をFig.45に示す。**122**は土師器の坏。底部は回転糸切り。器高が高く、深めの器形。口縁端部が内側に小さく突出する。胎土は精良で砂粒の混入は少ない。器体は歪んでいる。復元口径8.6cm、復元底径4.6cm、器高3.8cm。**123**は中国景徳鎮産の青花皿Ｃ群。内底に捻花文、外面体部に芭蕉葉文を描く。**124**は朝鮮王朝の軟質白磁の碗。胎土は粗く１mm以下の黒色粒を含む。青味がかった釉が全面に

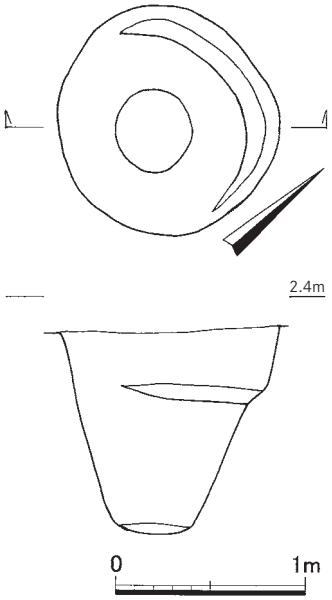


Fig.44　ＳＫ５９実測図（1/40）

Ph.32　ＳＫ５９（南から）

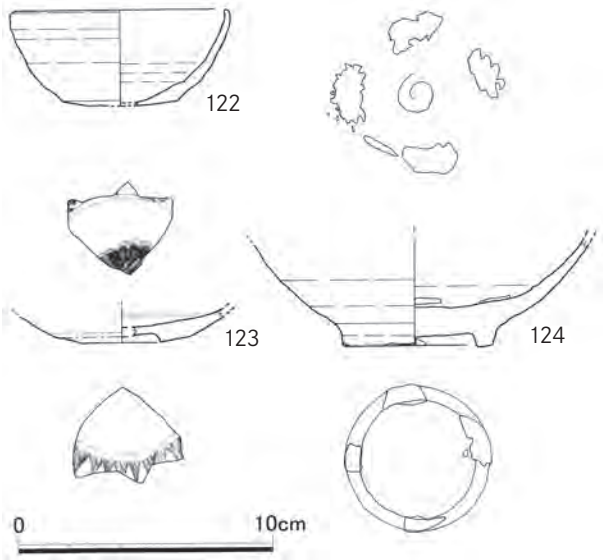


Fig.45　ＳＫ５９出土遺物実測図（1/3）

かかり、高台脇の釉溜りは青白色を呈する。目跡は砂目で内底と高台畳付に４ヶ所ある。

出土遺物から16世紀中頃の遺構と考えられる。

SK60（Fig.46・47、Ph.33・34）

Ｌ・Ｍ－６・７に位置する土坑。東側と南側は調査区外に延びる。調査範囲での規模は南北2.0ｍ、東西1.2ｍ、深さ30cmである。ＳＤ７９を切る。

出土遺物をFig.47・Ph.34に示す。**125**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。復元口径7.2cm、復元底径4.4cm、器高1.9cm。口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されていた。**126**・**127**は土師器の坏。底部は回転糸切り。**126**は口径10.4cm、底径6.4cm、器高2.3cm。**127**は口径10.4cm、底径6.8cm、器高2.0cm。外底に板状圧痕残る。**128**は中国景徳鎮産の青花碗Ｄ群。口縁部外面に花文、体部外面にアラベスク風の文様を描く。釉は灰色味を帯び、透明度はやや低い。呉須は灰色味に発色。**129**は朝鮮王朝の軟質白磁の碗。胎土は粗く、1mm以下の暗褐色粒含む。乳白色の釉がかかり、貫入が入る。内底

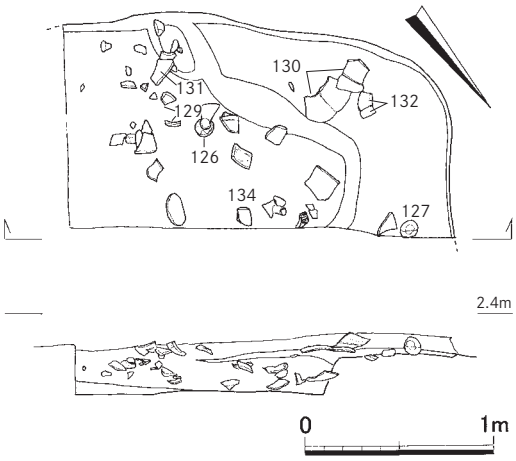
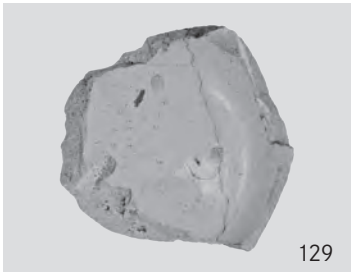


Fig.46　ＳＫ６０実測図（1/40）

Ph.33　ＳＫ６０（西から）



Ph.34　　ＳＫ６０出土遺物（約1/3）

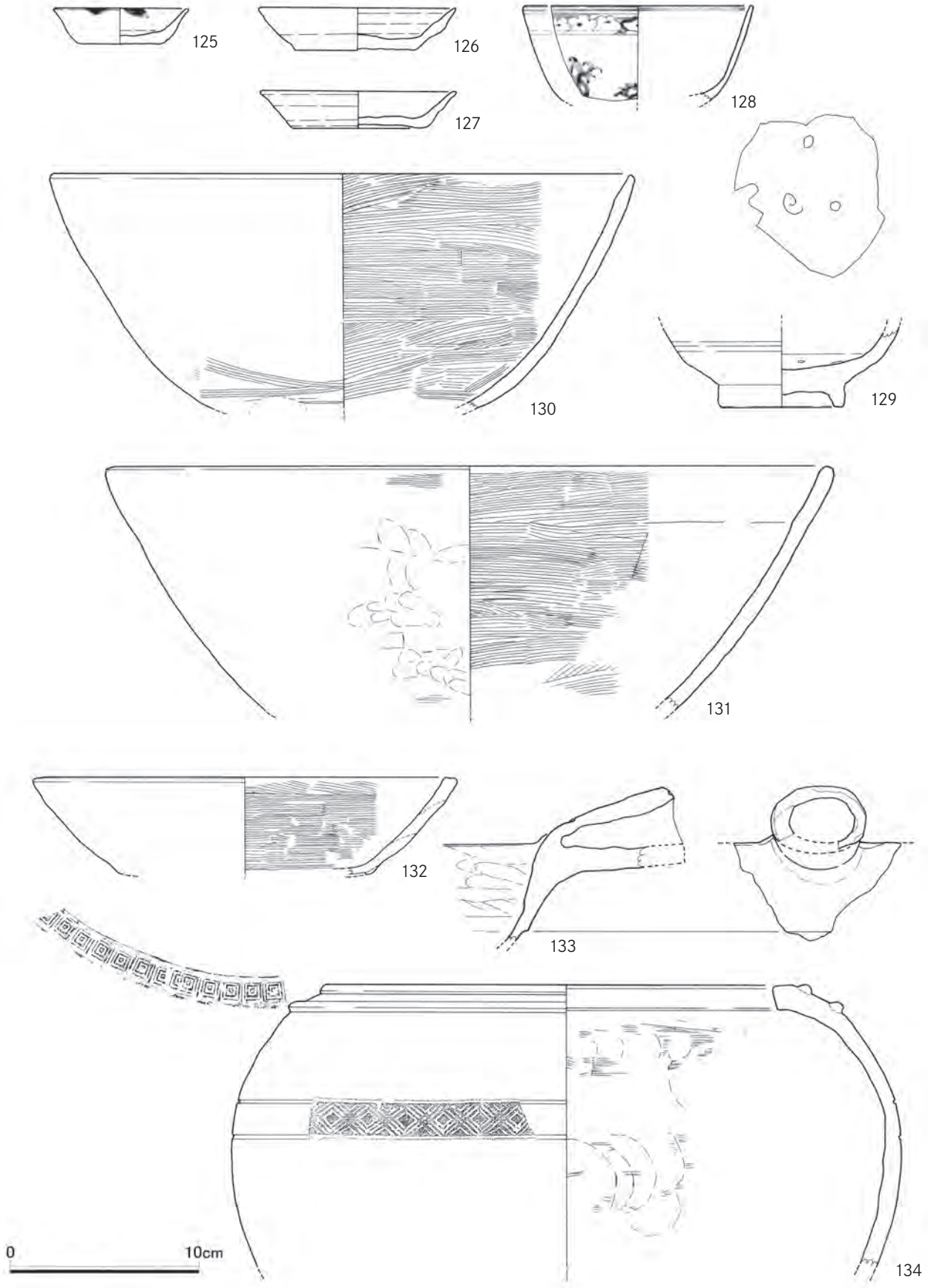
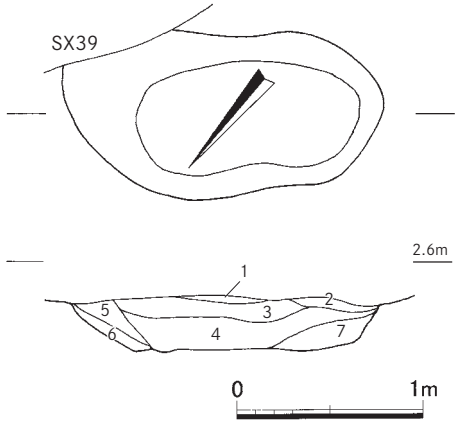


Fig.47　ＳＫ６０出土遺物実測図（1/3）

Ph.35　ＳＫ６２土層（北から）



1. 灰褐色砂質土　炭化物含む。
2. 灰褐色砂質土　炭化物含む。　灰黄褐色粘土ブロック含む。
3. 灰褐色砂質土　１より明るい。炭化物含む。　灰黄褐色粘土ブロック含む。
4. 暗灰褐色砂質土　炭化物含む。　灰黄褐色粘土ブロック含む。
5. 灰褐色砂質土　炭化物含む。　灰黄褐色粘土ブロック含む。
6. 暗灰褐色砂質土　炭化物・焼土含む。
7. 灰褐色砂質土　炭化物含む。

Fig.48　ＳＫ６２実測図（1/40）

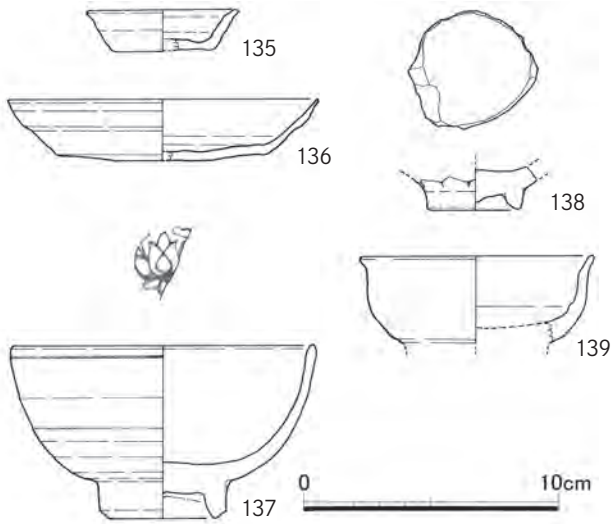


Fig.49　ＳＫ６２出土遺物実測図（1/3）

Ph.36　ＳＫ６２出土遺物（約1/3）

に小さな胎土目がある。**130・131**は土師器の鍋。内面ヨコハケが残る。**130**は外面全体、**131**は外面下半にススが付着している。**132・133**は土師器の焙烙。**133**は把手の部分。**134**は瓦質の火鉢。口縁は内湾する。外面口縁部に二条の突帯を巡らしその間に三枡文のスタンプを施す。外面体部中央には二条の沈線を巡らしその間に菱文のスタンプを施している。体部は丁寧に磨かれ光沢がある。

出土遺物から16世紀中頃の遺構と考えられる。

SK62（Fig.48・49、Ph.35・36）

Ｇ・Ｈ－５・６に位置する楕円形の土坑。長軸1.8m、短軸0.9m、深さ30cm。ＳＫ６３・８６を切り、ＳＸ３９に切られる。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、炭

化した籾と、微量の外皮を付けたままの炭化麦と外皮を取り除いた炭化麦が浅いコンテナケース６分の１ほど採集できた。

出土遺物をFig.49・Ph.36に示す。**135**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。復元口径6.0cm、復元底径4.0cm、器高1.6cm。**136**は土師器の坏。底部は回転糸切り。板状圧痕残る。復元口径12.1cm、復元底径8.4cm、器高2.4cm。**137・138**は中国龍泉窯系青磁の碗。**137**の胎土は灰白色で硬質。微砂粒を含み、ややザラつく。釉は淡緑色で透明度はやや低い。全体に細かい貫入が入る。内面から高台内側面にやや厚く施釉される。内底に蓮華文の陽印花を施す。**138**の胎土は淡灰色で硬質。釉は灰緑色で透明度はやや低い。全面施釉後、畳付の釉を掻き取る。体部外面にヘラによる縦線。体部を打ち欠いた瓦玉か。**139**は朝鮮王朝の灰青陶器の小鉢。焼成良好で胎土は磁胎となる。灰色で、微細な黒色粒子を少量含む。釉は透明で光沢があり、内外面に貫入が入る。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＫ６４（Fig.50・51、Ph.37）

Ｆ・Ｇ－６に位置する隅丸長方形の土坑。長辺2.1ｍ、短辺1.5ｍ、深さ40cm。近世井戸ＳＥ１５・に切られ、ＳＫ６５・８７を切る。

出土遺物をFig.51・Ph.37に示す。**140**は土師器の坏。底部は回転糸切り。一部に板状圧痕がある。復元口径10.6cm、底径6.0cm、器高2.5cm。**141～143**は中国景徳鎮産の白磁皿Ｅ－２ｂ類。**141・142**には呉須で外底に銘が入る。**143**はＳＫ２８出土片と接合した。ＳＫ２５の項で説明した白磁皿Ｅ－２ｂ類**13・14**の破片も出土している。**144**は中国景徳鎮産の青花碗Ｃ群。体部に梅月文を描く。**145～154**は中国景徳鎮産の青花皿Ｂ１群。**145～149**は外面に宝相華唐草文を描き、内底の残る**145・147**には玉取獅子が描かれる。**146**はＨ－３包含層、**147**は近世井戸ＳＥ１２出土片と接合。**150～154**は体部内外面に唐草文、内底の残る**150～152**には松竹梅と鹿・鶴を描く。竹を中央に置き、右には片足を上げ、羽を広げた鶴、右端に梅、左には顔を左に振り向いた鹿、左端に松が配されている。春の訪れを告げる「鹿鶴」は中国語で「六合（東西南北・天地）」の発音に近いため、天地四方がすべて春を迎えることを意味する。「鹿鶴同春」という。ＳＫ２５出土の**16**と同一の意匠で皿Ｂ１群の中でも古相とされる。高台がやや高く、体部の傾斜が急。口縁部片の**153・154**は**150～152**と同一個体の可能性がある。**151**はＣ－１包含層出土片と接合。**155**は中国褐釉陶器の皿。胎土は淡黄色で硬質。褐色微砂粒を少量含む。釉は暗褐色で不透明。にぶい光沢があり、内面から外面口縁下まで薄くかかり、口縁部の釉は掻き取られる。内面体部に円盤状の粘土が釉下に貼り付いている。ＳＫ１１６出土片と接合。**156**は朝鮮王朝硬質白磁の皿。釉はやや青味がかる。内底と高台畳付に砂目の目跡がある。**157**は備前焼の甕。胎土は暗褐色から暗灰色で硬質。３㎜以下の砂粒をやや多く含む。器壁は暗紫褐色を呈する。口径40cm程か。

出土遺物から16世紀前半の遺構で、ＳＫ２５と同一時期に埋没したと考えられる。

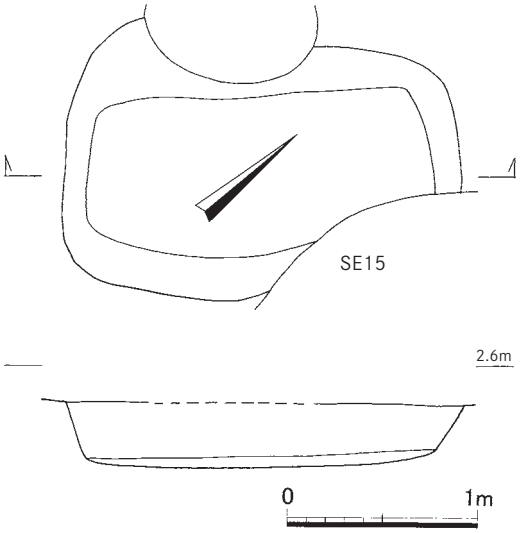


Fig.50　ＳＫ６４実測図（1/40）

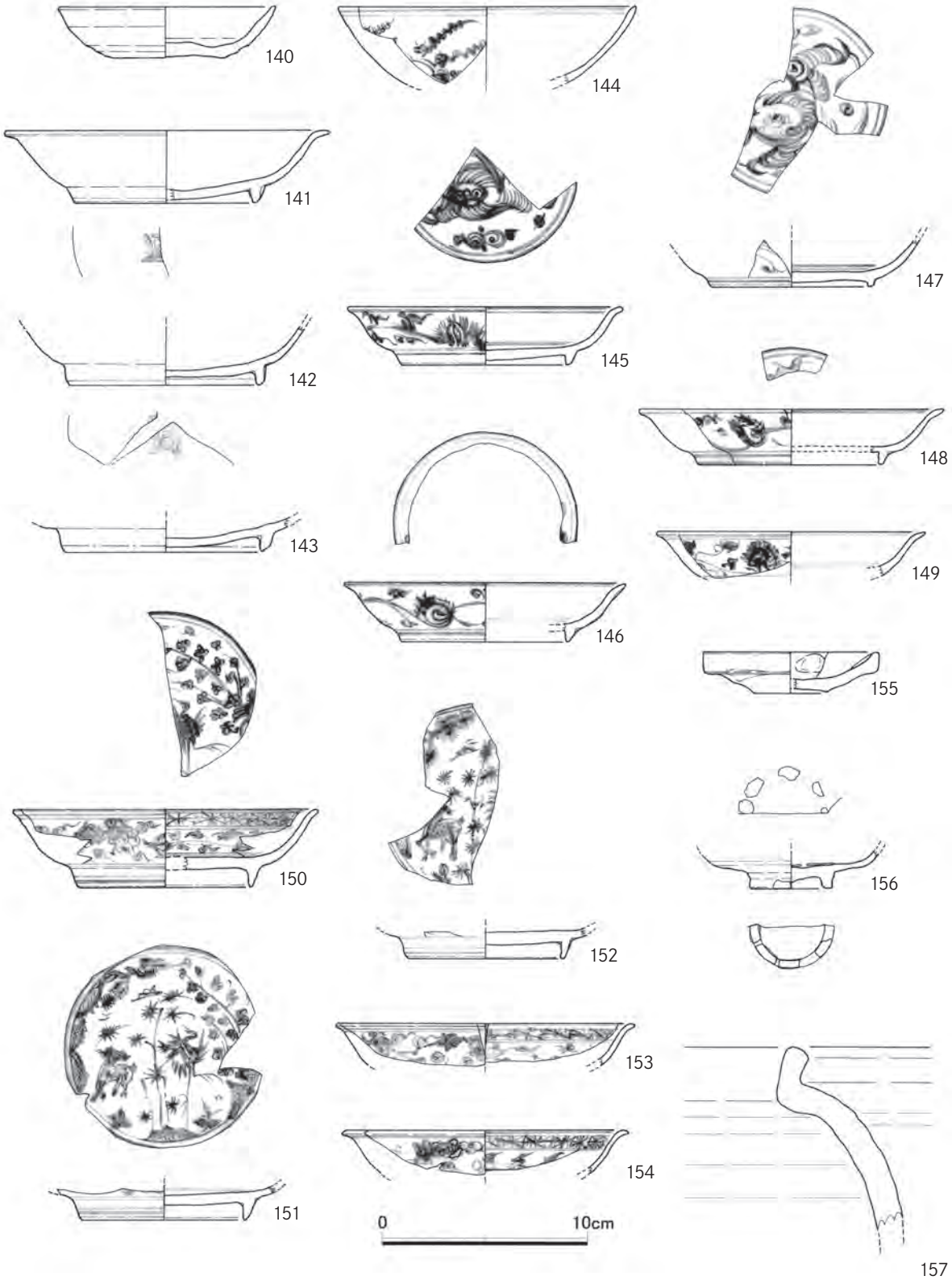
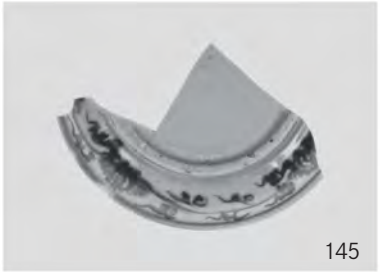
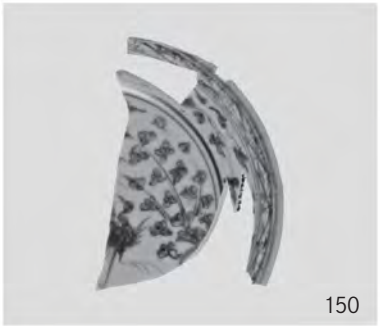
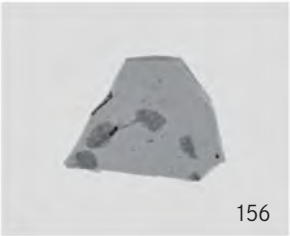


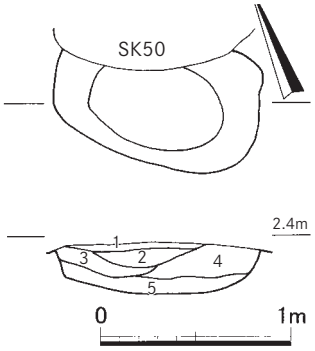
Fig.51　ＳＫ６４出土遺物実測図（1/3）







Ph.37　ＳＫ６４出土遺物（約1/3）



1. 暗灰褐色砂質土　炭化物・焼土含む。
2. 暗灰褐色砂質土　炭化物・焼土含む。１より明るい。
3. 灰褐色砂質土　炭化物・焼土含む。
4. 灰褐色砂質土　炭化物・焼土含む。３より明るい。
5. 暗黄褐色砂

Fig.52　ＳＫ６６実測図（1/40）

Ph.38　ＳＫ６６土層（西から）

SK66（Fig.52、Ph.38）

Ｉ－５・６に位置する楕円形の土坑。長軸1.1m、短軸0.7m、深さ25cm。ＳＫ５０に切られる。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、外皮を付けたままの炭化麦と、微量の炭化した籾と外皮を取り除いた炭化麦が浅いコンテナケース６分の１ほど採集できた。

SK76（Fig.53・54、Ph.39）

Ｅ・Ｆ－１・２に位置する楕円形の土坑。近世井戸ＳＥ１３に切られ、ＳＫ８３を切る。北側は調査区外に延びる。雨により南側がかなりえぐれてしまった。長軸3.0m、残存部短軸1.5m、深さ60cm。

出土遺物をFig.54・Ph.39に示す。**158～162**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。**158**は底部板状圧痕あり。口径6.6cm、底径5.3cm、器高1.3cm。**159**は口径7.0cm、底径5.0cm、器高1.2cm。**160**は復元口径7.3cm、底径5.4cm、器高1.1cm。**161**は口径7.1cm、底径5.7cm、器高1.3cm。**162**は復元口径7.6cm、底径4.3cm、器高1.5cm。**163**は中国産白磁の皿Ｅ類。**164・165**は中国華南産の青花皿。**164**は高台を有し、直口口縁の皿。体部内外面に厚く施釉し、内外底は露胎とする。全体に貫入が入り、光沢は強い。内面は圏線のみで、外面は圏線と渦巻文を描く。ＳＫ１６０出土片と接合している。**165**は碁笥底を呈する青花皿Ｃ群。灰白色、不透明の釉を内面から外面体部下位に施す。ＳＫ１２３・Ｃ－３包含層出土片と接合した。**166**は中国陶器の翡翠釉の皿。透明度の低い淡明青色釉を内面から高台外面までかける。内面の釉は薄く、斑点状に釉がかからない部分が生じている。外底にはごく薄く透明釉をかけるが、塗りムラで露胎となる部分がある。**167**は中国華南三彩の鉢。胎土は淡茶色を呈し軟

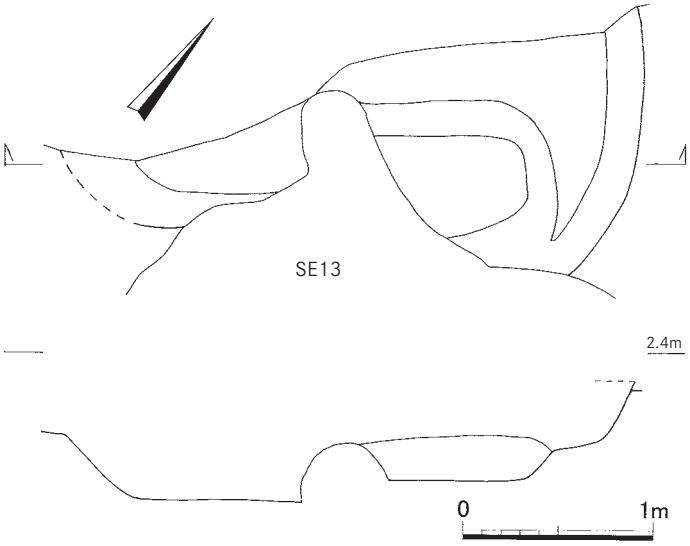
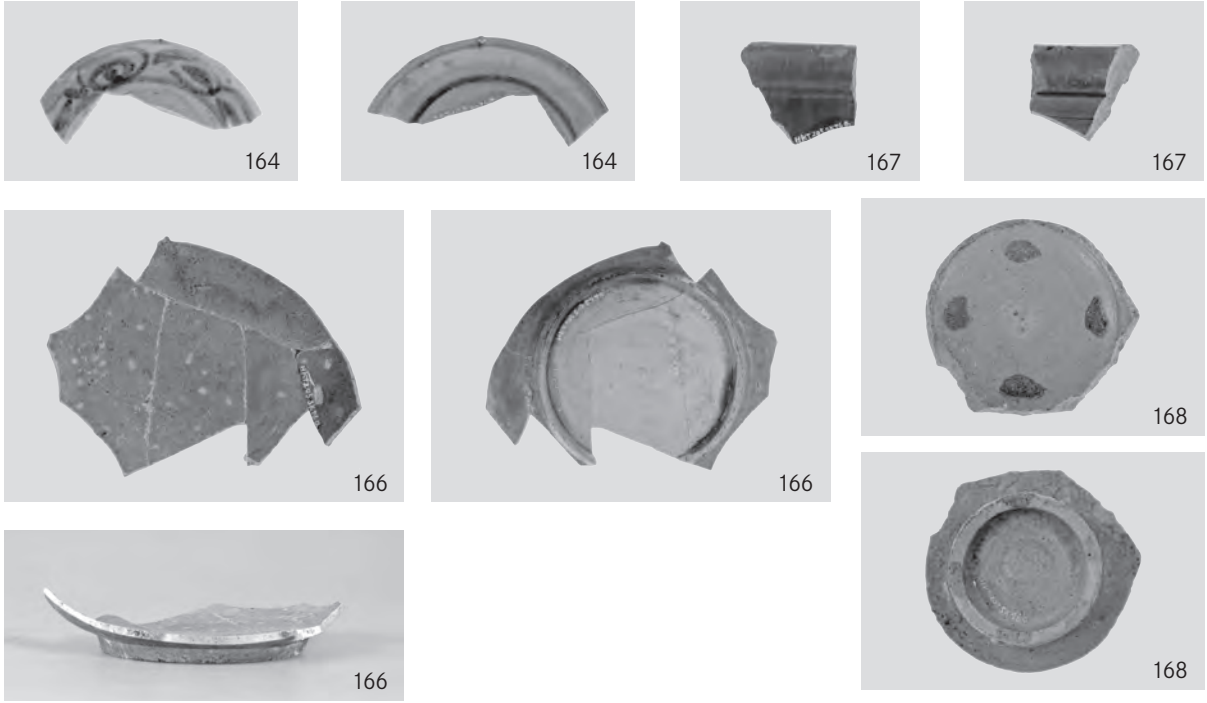


Fig.53　ＳＫ７６実測図（1/40）



Ph.39　ＳＫ７６出土遺物（約1/3）

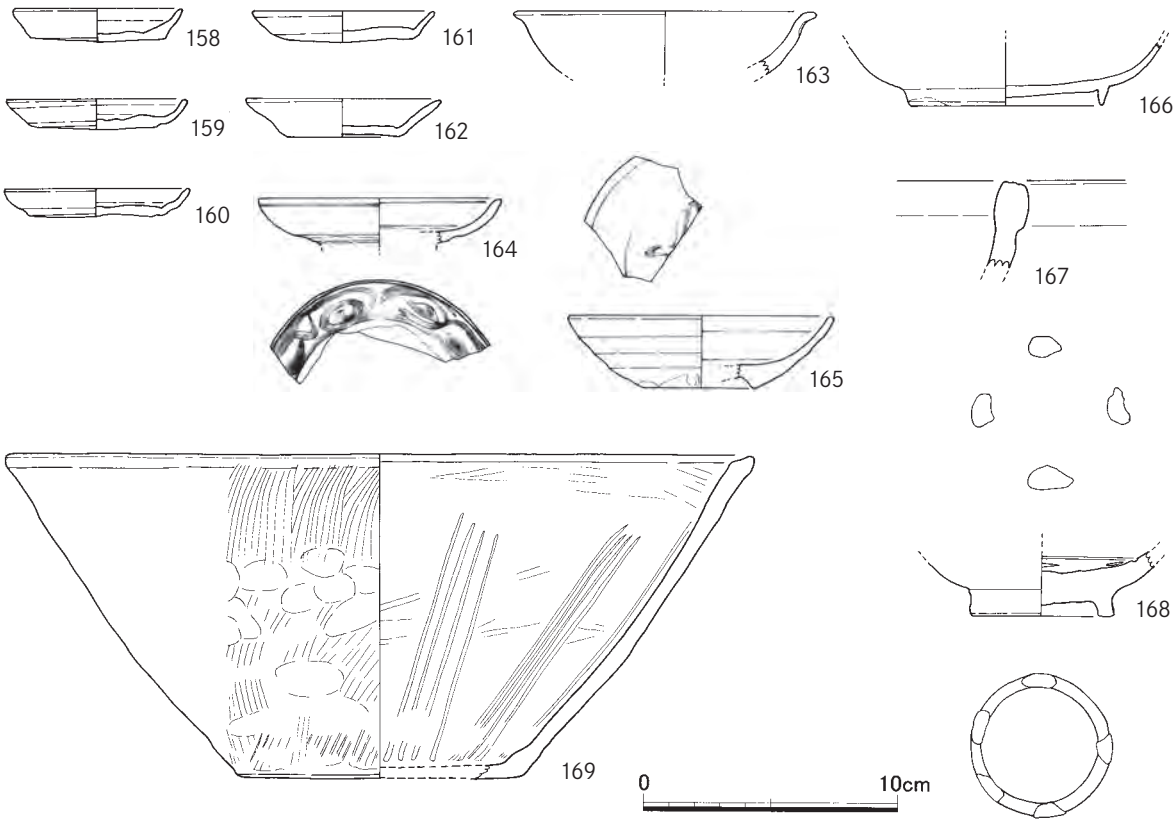


Fig.54　ＳＫ７６出土遺物実測図（1/3）

質。透明度が高く、光沢の強い黄緑色の釉を施す。釉下には化粧土がかけられる。**168**は朝鮮王朝の軟質白磁の碗。青味がかった釉が全面にかかり、高台脇の釉溜りは青白色を呈する。目跡は砂目で内底に４ヶ所、高台畳付に５ヶ所ある。**169**は瓦質の擂鉢。４本１単位の擂り目を放射状に入れる。外面は粗いタテハケと指押さえの痕跡、内面はヨコハケ調整だが、使用により摩滅し、剥落している。ＳＫ７０出土片と接合した。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

SD79（Fig.55・56、Ph.40 ～ 43）

調査区東端に位置する溝。西岸のみの検出で、東岸は調査区外に位置する。長さは調査区いっぱい12ｍ分検出し、幅は調査区内で2.3ｍ確認した。４ｍ以上になると見られる。深さは1.0ｍ。覆土は砂であり、比較的古い遺構と考えられる。ＳＫ５９・６０・９４・９６・ＳＸ９５などに切られる。

出土遺物をFig.56・Ph.43に示す。**170 ～ 172**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。**170**の内底には左巻きの渦巻の彫り込みが密に入れられる。**171**は口径6.8cm、底径4.3cm、器高1.7cm。胎土に3mm以下の砂粒を多く含み粗い。**172**は口径7.8cm、底径6.3cm、器高1.3cm。**173・174**は土師器の坏。底部は回転糸切り。**173**は厚いつくりで胎土は粗い。雲母を大量に含んでいる。復元口径10.0cm、底径6.8cm、器高2.7cm。**174**は復元口径11.0cm、底径5.8cm、器高1.9cm。**175･176**は中国龍泉窯系青磁の皿。**175**は口縁が直口し、内面にヘラ彫りで放射状に刻みを入れ菊皿にする。淡緑色で光沢の強い釉をやや厚めにかける。**176**は稜花皿で内面に櫛状工具とヘラで文様を刻む。青緑色で透明度の低い釉を厚めにかける。**177**は中国産白磁水注。内面から外面体部下位まで施釉される。底部は露胎で、ススが

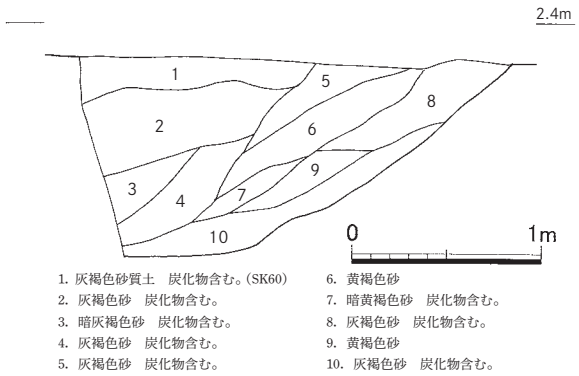


Fig.55　SD７９土層実測図（1/40）

Ph.40　ＳＤ７９土層（北から）

Ph.41　ＳＤ７９南部（南から）

Ph.42　ＳＤ７９北部（北から）

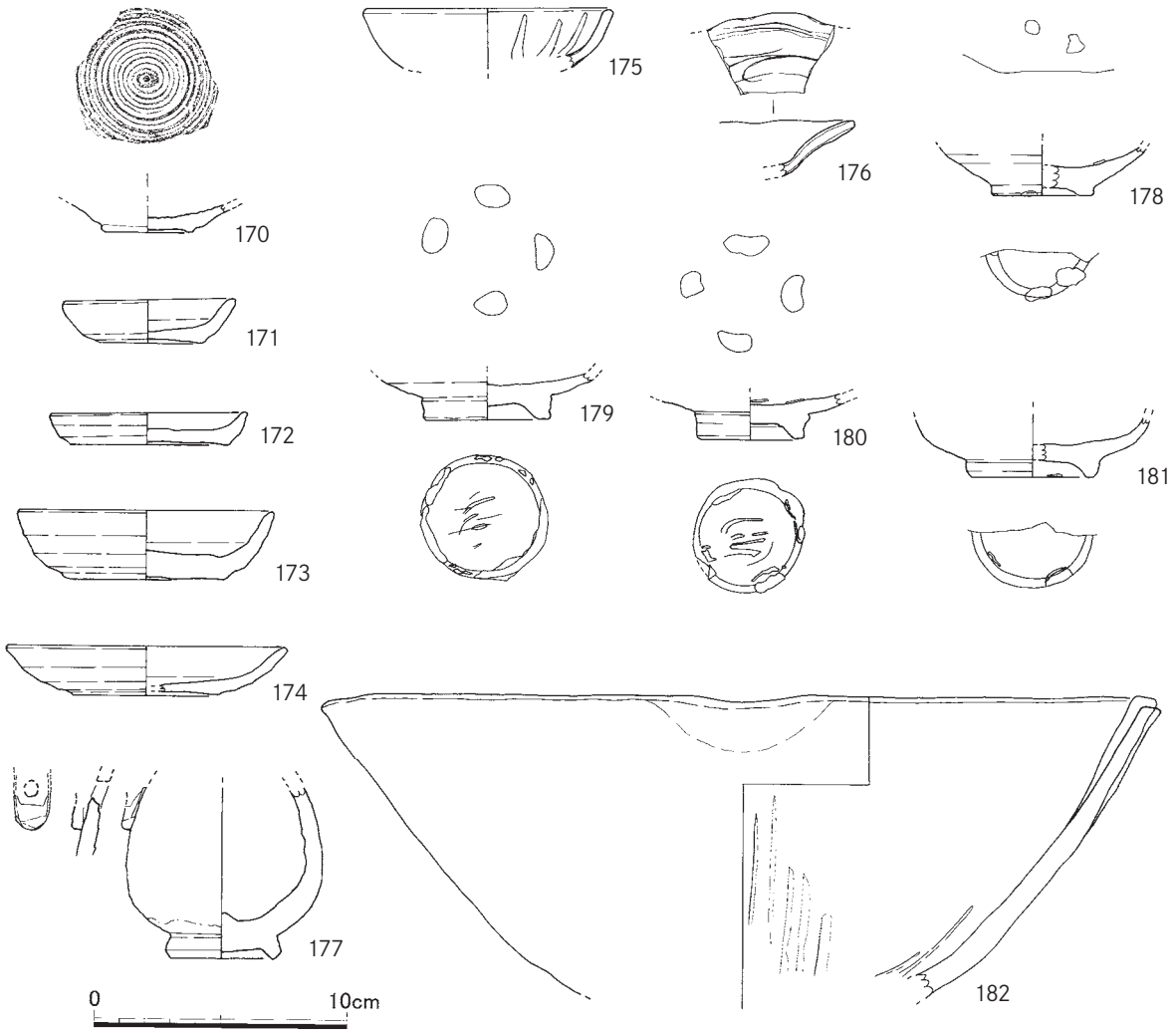
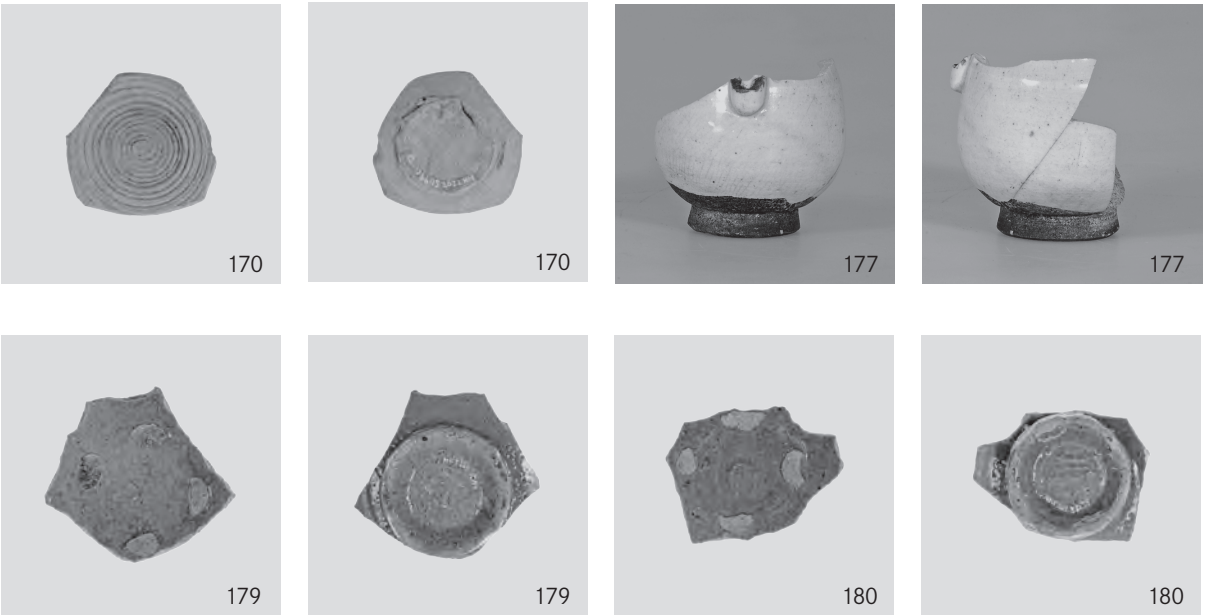


Fig.56　SD７９出土遺物実測図（1/3）



Ph.43　ＳＤ７９出土遺物（約1/3）

付着している。**178～181**は朝鮮王朝の灰青陶器の皿。**178**は胎土が灰色で２mm以下の白色砂粒、１mm以下の黒色粒子を含む。内底と高台畳付に砂目。**179**は胎土灰色で１mm以下の白色砂粒と黒色微細粒子を含む。釉は透明で光沢があり一部赤味がかる。貫入が入る。内底に砂目が４ヶ所、高台畳付全体に砂付着。外底には押痕。**180**は胎土が灰色を呈し黒色微細粒子を含む。釉は透明で光沢がある。砂目が内底、高台畳付に４ヶ所ある。外底には押痕。**181**は灰色の胎土に１mm以下の白色砂粒、黒色粒子を含み、赤褐色粒子を微量含む。釉は光沢があり、青味がかった灰色を呈する。高台畳付に胎土目。**182**は土師質の両口擂鉢。５本１単位の擂り目を放射状に刻む。内面の磨耗著しい。ＳＫ６０出土片と接合した。**334**の青銅製品も出土している。

以上のほか中国景徳鎮産の青花碗Ｂ群、皿Ｃ群、青磁皿が出土しており、15世紀後半～16世紀前半に埋没したと考えられる。

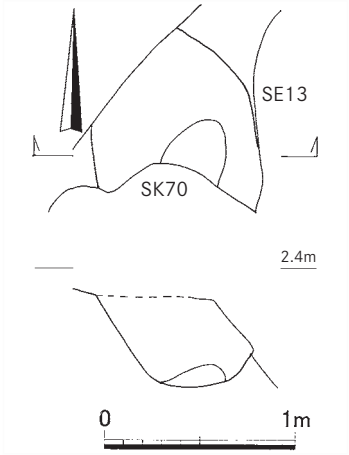


Fig.57　ＳＫ８３実測図（1/40）

SK83（Fig.57・58、Ph.44）

Ｅ－１に位置する土坑。ＳＫ７０・７６に切られ、北側は調査区外に延びるため、形状・規模は不明。深さ50cm。

出土遺物をFig.58・Ph.44に示す。**183・184**は中国景徳鎮産の白磁皿Ｅ－２ｂ類。**185**は中国景徳鎮産の青花碗Ｂ群。

出土遺物から15世紀後半～16世紀前半の遺構と考えられる。

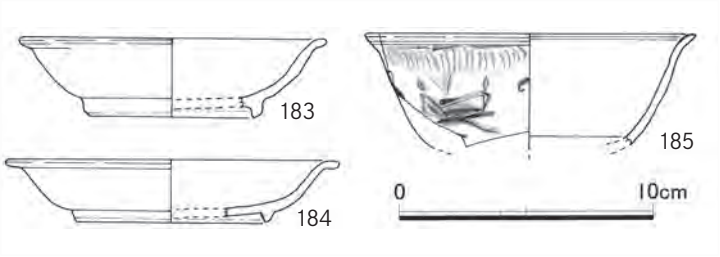
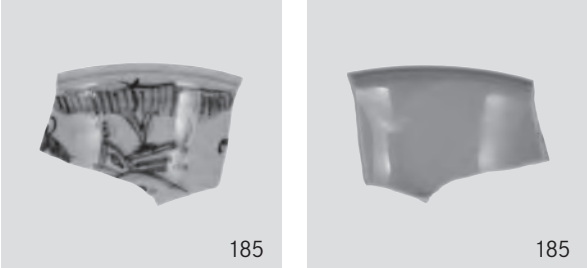


Fig.58　ＳＫ８３出土遺物実測図（1/3）



Ph.44　ＳＫ８３出土遺物（約1/3）

SX84（Fig.59、Ph.45）

Ｄ－４に位置する石積土坑。南側を近世の溝

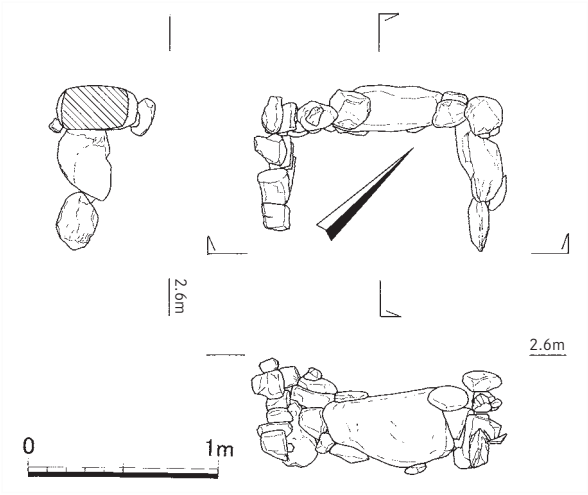


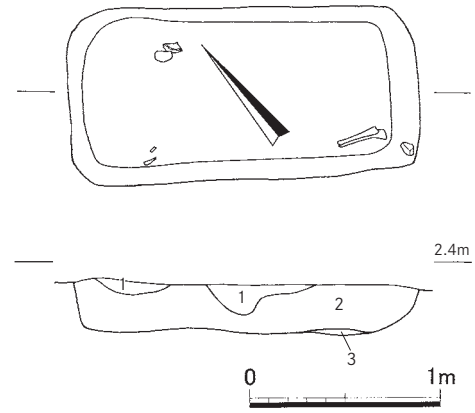
Fig.59　ＳＸ８４実測図（1/40）

Ph.45　ＳＸ８４（南から）

ＳＤ４８に切られ失う。東西方向の石組の内法は0.9ｍであり、高さ60cmほど残存している。

SK90（Fig.60・61、Ph.46・47）

Ｊ－２・３に位置する隅丸長方形の土坑。長辺1.8ｍ、短辺0.9ｍ、深さ30cm。ＳＫ１３３・１４０を切る。南西隅に骨が出土し、整った隅丸長方形を呈しているので土壙墓とも考えられた。そのため骨について福岡市博物館屋山洋氏の鑑定を受けた。結果はシカの橈骨と尺骨であり、墓ではない結果となった。



1. 暗灰褐色砂質土炭化物多く含む。焼土含む。鉄分で茶色がかる。
2. 暗灰褐色砂質土炭化物多く含む。焼土含む。
3. 暗灰褐色砂

Fig.60　ＳＫ９０実測図（1/40）

Ph.46　ＳＫ９０（東から）

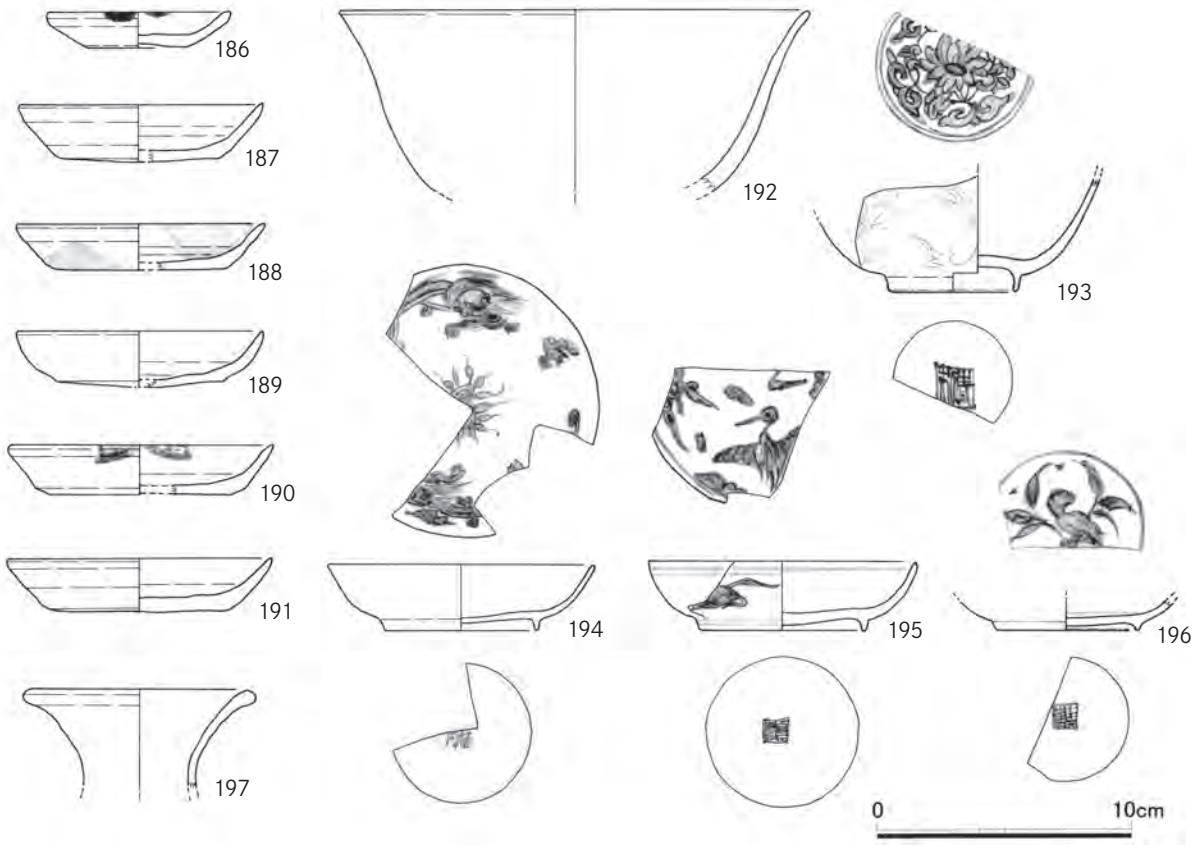
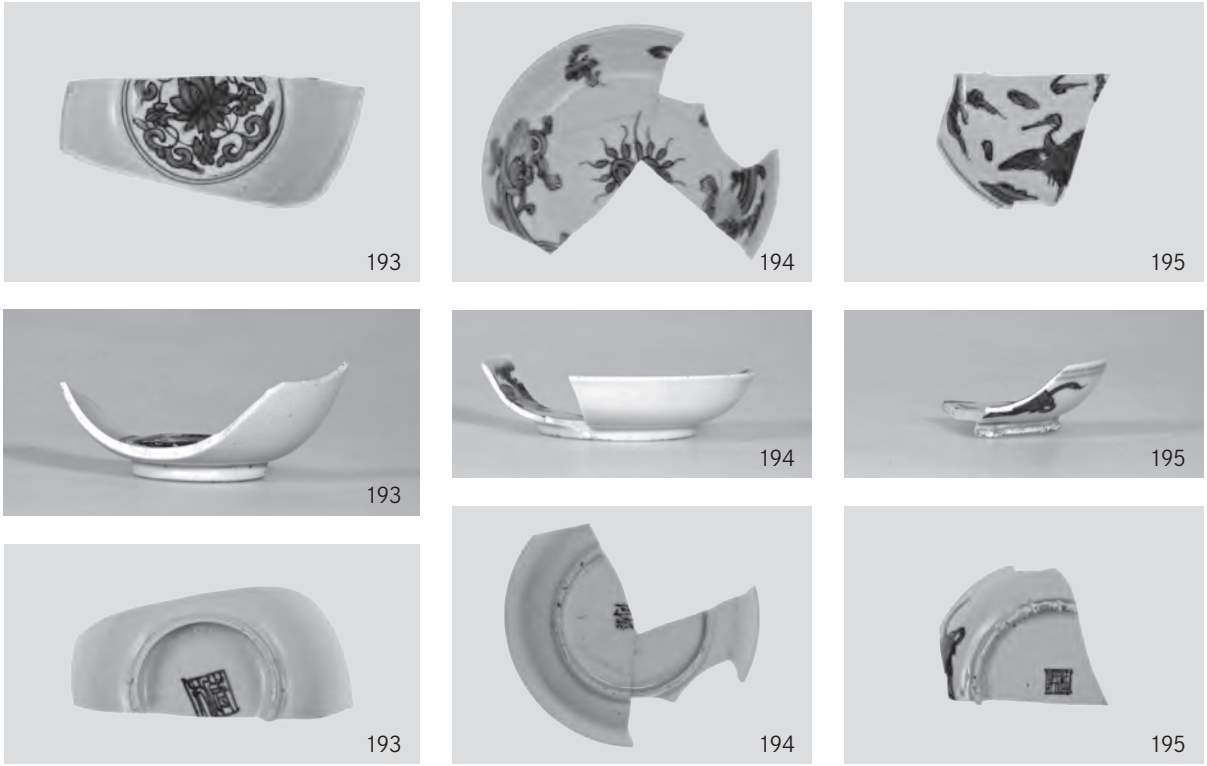


Fig.61　ＳＫ９０出土遺物実測図（1/3）

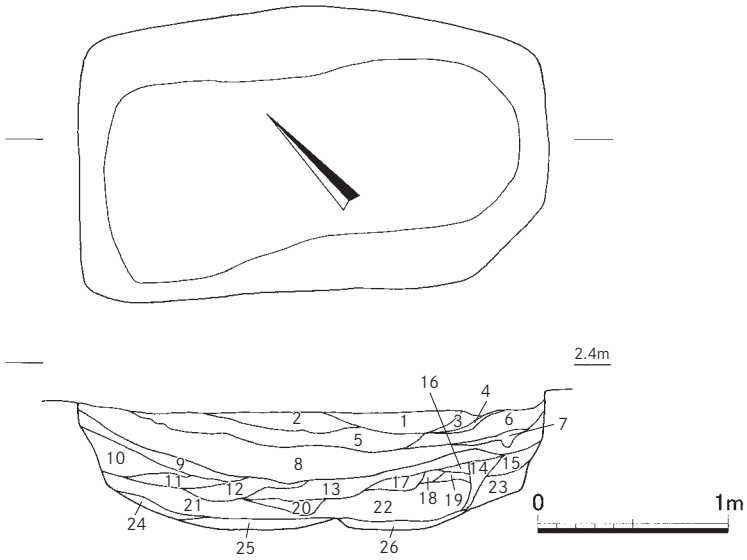


Ph.47　ＳＫ９０出土遺物（約1/3）

また、シカの骨の周囲からは魚類の骨もあり、食物残滓を廃棄していたようである。シカの骨について以下のコメントをいただいた。「シカの橈骨と尺骨は同一固体のものでどちらにも解体痕が見られる。シカは骨端が化骨化した成獣だが、骨端部の接合線がわずかにみられ、まだ若い固体である。」

出土遺物をFig.61・Ph.47に示す。**186**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。復元口径7.2cm、底径4.1cm、器高1.4cm。**187**～**191**は土師器の坏。底部は回転糸切り。**187**は復元口径9.6cm、復元底径6.3cm、器高2.3cm。**188**は復元口径9.8cm、復元底径6.8cm、器高1.9cm。**189**は底部中央に板状圧痕が残る。復元口径9.8cm、復元底径6.6cm、器高2.2cm。**190**は復元口径10.4cm、復元底径7.1cm、器高1.9cm。口縁部にススが付着しており灯明皿として使用されている。**191**は復元口径10.4cm、復元底径7.4cm、器高2.1cm。**192**は朝鮮の硬質白磁碗。胎土は白色で黒色微粒子を含む。釉はやや青味がかる透明釉で全体に細かい貫入がみられる。**193**は中国景徳鎮産の青花碗Ｅ群。内底に蓮華文を描く。外面体部には唐草文をヘラ彫りで陰刻する。外底に呉須で銘を入れる。高台を削り出した際のカンナ痕が放射状に残る。青味がかった透明釉が全面に施釉され、畳付の釉を掻き取っている。**194**～**196**は中国景徳鎮産の青花皿Ｅ群。**194**は内底中央に花文、内面体部から内底縁にかけて二対の蟠龍文を描く。外底に呉須で「福」と「同」の文字が見られ、「萬福攸同」の銘が入っていたものである。内面にはやや青味がかった透明釉、外面には透明の釉がかかる。**195**は内面に鶴と雲文を描く。**196**は内底に圏線の中に枝に止まる鳥が描かれている。**195**・**196**ともに外底に呉須で銘を入れる。内面から高台外側にはやや青味がかった透明釉、高台内側には透明の釉がかかる。**197**は朝鮮陶器の瓶。口縁部の破片で、茶褐色の釉がかかり、内面はやや緑がかった褐色を呈している。このほか赤色の漆膜が検出された。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。



1. 茶褐色砂質土　炭化物・焼土少量含む。
2. 灰褐色砂質土　炭化物・焼土少量含む。
3. 灰褐色砂
4. 黒色炭化物
5. 暗灰褐色砂質土　炭化物・焼土多く含む。
6. 灰褐色砂質土　灰褐色砂含む。
7. 黒色炭化物
8. 暗茶褐色砂質土　炭化物・焼土非常に多く含む。
9. 暗灰褐色砂質土　炭化物・焼土含む。
10. 暗茶褐色砂質土　炭化物・焼土非常に多く含む。
11. 暗灰褐色混土砂　炭化物含む。
12. 暗灰褐色砂質土
13. 暗茶褐色砂質土　炭化物含む。焼土非常に多く含む。
14. 暗茶褐色砂質土　炭化物・焼土多く含む。
15. 暗灰褐色混土砂
16. 暗茶褐色砂質土　炭化物・焼土多く含む。
17. 暗黄褐色混土砂　暗灰褐色砂質土含む。
18. 暗黄褐色混土砂
19. 暗灰褐色砂質土
20. 暗灰褐色砂質土　炭化物・焼土含む。
21. 暗茶褐色砂質土
22. 暗黄褐色混土砂
23. 暗茶褐色砂
24. 灰褐色砂質土　炭化物含む。
25. 灰褐色砂質土　焼土含む。
26. 暗灰褐色砂質土

Fig.62　ＳＫ９２実測図　（1/40）

ＳＫ９２・ＳＸ１６３（Fig.62 ～ 64、Ph.48 ～ 51）

ＳＫ９２はＨ・Ｉ－２・３に位置する隅丸方形の土坑。長辺2.5ｍ、短辺1.5ｍ、深さ70cm。掘削を進めると北側に石組が見られたので石組土坑かと考えたが、石組がＳＫ９２より西側に延びたため別遺構と判断し、石組土坑をＳＸ１６３とした。ＳＫ１３２・１３３・１６４・１６５・ＳＸ１６３を切る。

ＳＸ１６３はＨ・Ｉ－２に位置する石組土坑。ＳＫ９２に大半を破壊され、北側の石組のみ残る。東西方向の石組の内法は1.2ｍであり、高さ40cmほど残存している。

出土遺物をFig.64・Ph.51に示す。**198・199**は掘削初期に出土したものでＳＫ９２・ＳＸ１６３どちらの出土か判断つかない遺物。おそらくＳＫ９２の遺物であろう。土師器の小皿で、底部は回転糸切り。**198**は底が盛り上がり、体部の器壁は薄い。復元口径6.2cm、底径4.2cm、器

Ph.48　ＳＫ９２土層（東から）

Ph.49　ＳＫ９２（東から）

高1.1cm。**199**は底部に板状圧痕が認められる。口縁部にススの付着があり、灯明皿として使用されたものである。口径6.2cm、底径1.6cm、器高4.0cm。**200**～**204**はＳＫ９２出土遺物。**200**は中国産青磁の鉢。胎土は灰白色で硬質、砂粒を多く含むためか均質でなくガサつく。釉は淡青緑色で透明度は高く、光沢は強い。全体に貫入が入る。景徳鎮産か。**201**は中国景徳鎮産の白磁小杯。外底に呉須で「宣徳年造」の銘が入る。内面から高台外側には透明の釉が、高台内側にはやや青味がかった透明釉がかかる。**202**は中国景徳鎮産の青花碗Ｃ群。内底と体部外面に丸を三つ結合した文を描く。呉須は灰色がかりやや薄い。釉は灰青味で透明度はやや低い。**203**は中国景徳鎮産の青花皿Ｂ２群。内底に釉が輪状に剥落している。重ね焼きの痕跡か。輪の外側から高台外側までの釉は光沢を失っている。内面から高台外側にはやや青味がかった透明釉、高台内側には透明の釉がかかる。外底に

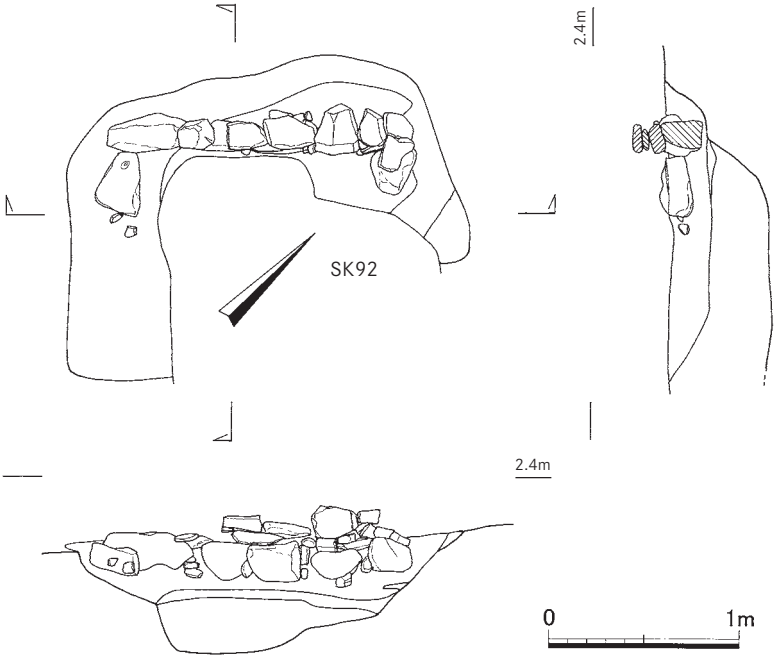


Fig.63　ＳＸ１６３実測図　（1/40）

Ph.50　ＳＸ１６３（南から）

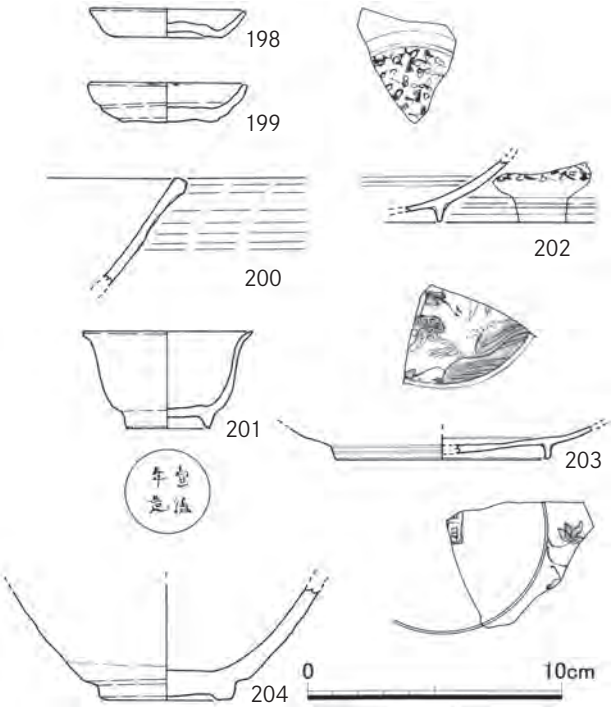
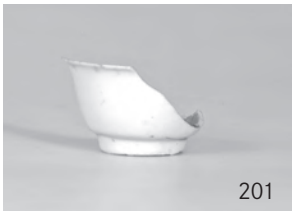
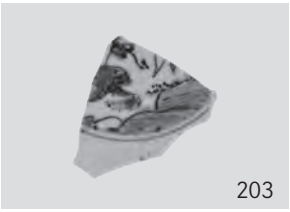


Fig.64　ＳＫ９２・ＳＸ１６３出土遺物実測図　（1/3）





Ph.51　ＳＫ９２出土遺物（約1/3）

呉須で銘を入れる。高台を削り出した際のカンナ痕が放射状に残る。**204**は瀬戸の天目碗。釉は内面の大部分が明茶色で、黒色が混じる。外面は暗茶色を呈する。内面から外面体部下位まで施釉される。

ＳＫ９２は出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

SK94（Fig.65・66、Ph.52）

Ｌ・Ｍ－３・４に位置する楕円形をなすと思われる土坑。長軸2.3ｍ、深さ60cm。調査区内で短軸0.8ｍ。東側半分以上が調査区外に延びる。ＳＤ７９を切る。

出土遺物をFig.66に示す。**205**は土師器の小皿。底部は回転糸切りで板状圧痕がある。口径6.2cm、底径4.0cm、器高1.0cm。**206**は土師器の坏。底部は回転糸切り。口径10.1cm、底径7.0cm、器高2.3cm。**207**は中国景徳鎮産の白磁皿E－２ｂ類。**208**は朝鮮王朝硬質白磁の皿。胎土は灰白色で硬質、白色微砂粒と黒褐色微粒子を含む。釉は灰青味がかる。夾雑物やピンホールがある部分は赤く変色している。

出土遺物と切り合いから16世紀後半の遺構と考えられる。

SX95（Fig.67・68、Ph.53・54）

Ｌ・Ｍ－１に位置する石積土坑。調査区際にあり鋼矢板で破壊されている。西側の石組が比較的良く残るが北側の石組は鋼矢板で動いている。東側は調査区外に延びる。南側の石組は残っていない。もしくははじめからなかった可能性もある。石組の高さ50cmほど残存する。ＳＤ７９を切る。

出土遺物をFig.68・Ph.54に示す。**209**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。体部と底部中央に穿孔がある。復元口径6.2cm、復元底径5.0cm、器高1.3cm。内面体部に墨痕もしくはススの付着がみられる。

Ph.52　ＳＫ９４土層（西から）

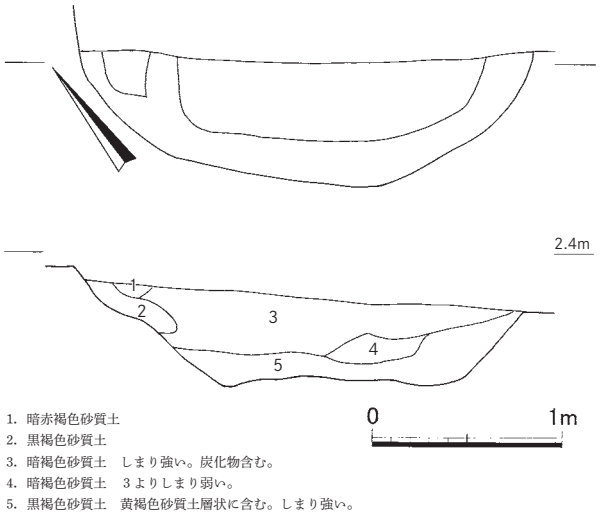


Fig.65　ＳＫ９４実測図　（1/40）

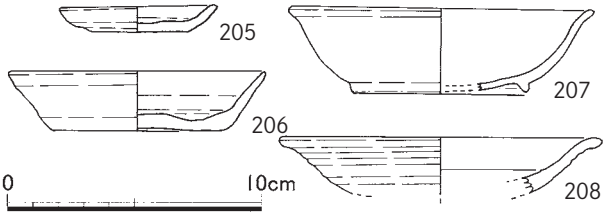


Fig.66　ＳＫ９４出土遺物実測図　（1/3）

Ph.53　ＳＸ９５（南から）

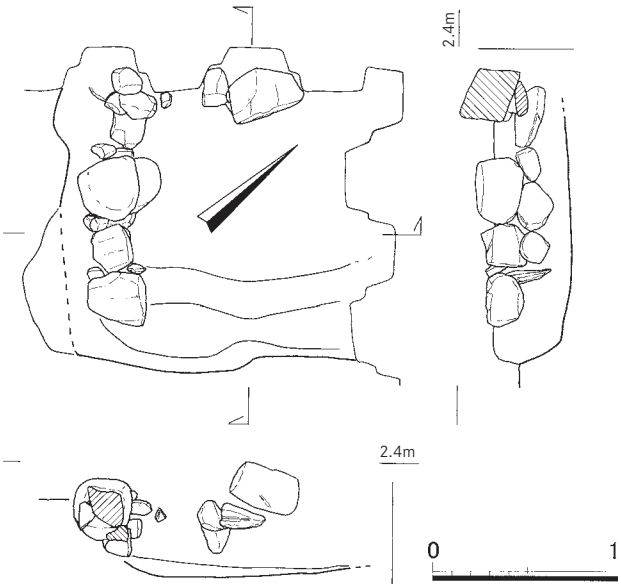


Fig.67　ＳＸ９５実測図　（1/40）

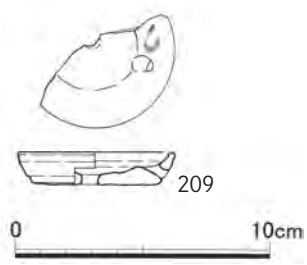


Fig.68　ＳＸ９５出土遺物実測図　（1/3）

Ph.54　SX９５出土遺物（約1/3）

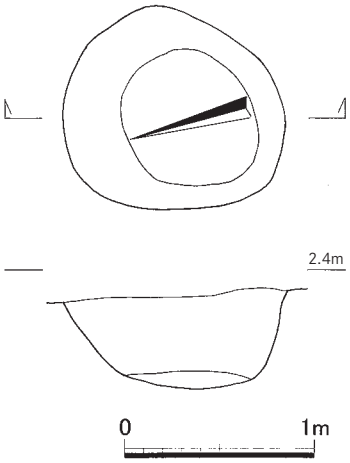


Fig.69　ＳＫ９６実測図　（1/40）

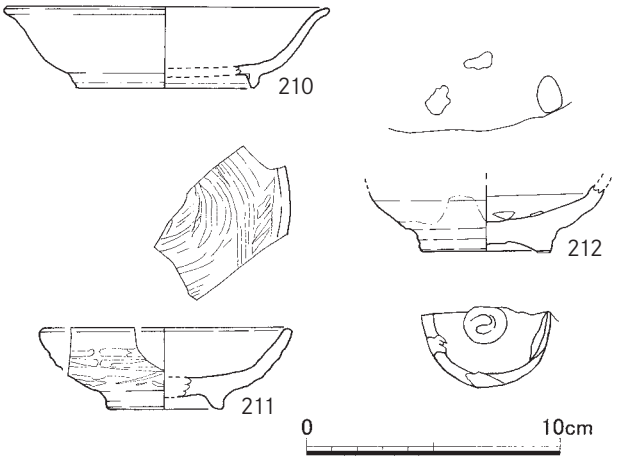
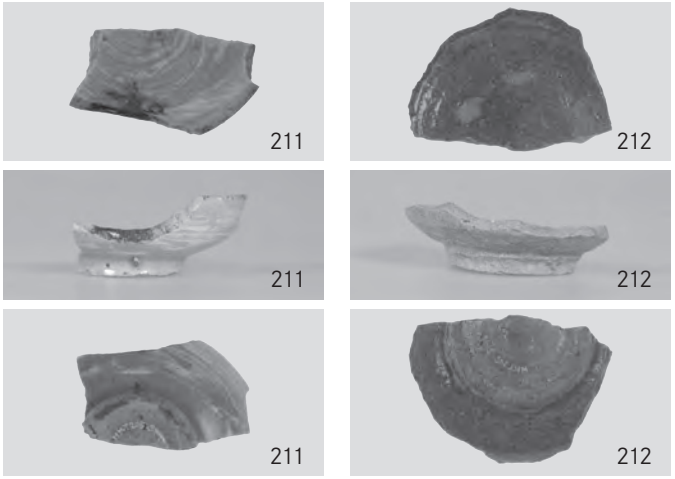


Fig.70　ＳＫ９６出土遺物実測図　（1/3）

SK96（Fig.69・70、Ph.55）

Ｌ・Ｍ－２に位置する略円形の土坑。径1.1～1.2m、深さ50cm。ＳＫ１００・ＳＤ７９を切る。

出土遺物をFig.70・Ph.55に示す。**210**は中国景徳鎮産の白磁皿E－２ｂ類。外面にススが付着している。**211**は朝鮮王朝粉青沙器刷毛目皿。胎土は灰色で、硬質、1mm以下の褐色から黒色粒子を含む。内外面に刷毛で白化粧土を施す。青味がかった透明釉がかかる。全体に細かい貫入が入る。破



Ph.55　ＳＫ９６出土遺物（約1/3）

損後ススが付着している。**212**は朝鮮王朝灰青陶器碗。胎土は淡橙色を呈し、軟質。1mm以下の白色砂粒と黒色微粒子を含む。釉は灰色で光沢があり、施釉が薄い部分は橙白色を呈する。内底と高台畳付に砂目の目跡がある。

出土遺物より16世紀後半の遺構と考えられる。

SK102（Fig.71・72、Ph.56）

Ｂ－６・７の第２面で検出された楕円形土坑。北側が深くなる。長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍ、深さ60cm。ＳＫ１０７を切る。

出土遺物をFig.72・Ph.56に示す。**213～215**は中国龍泉窯系青磁の碗。**213・214**は口縁部が直口の

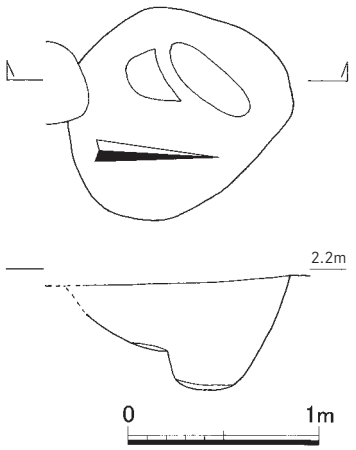


Fig.71　ＳＫ１０２実測図　（1/40）

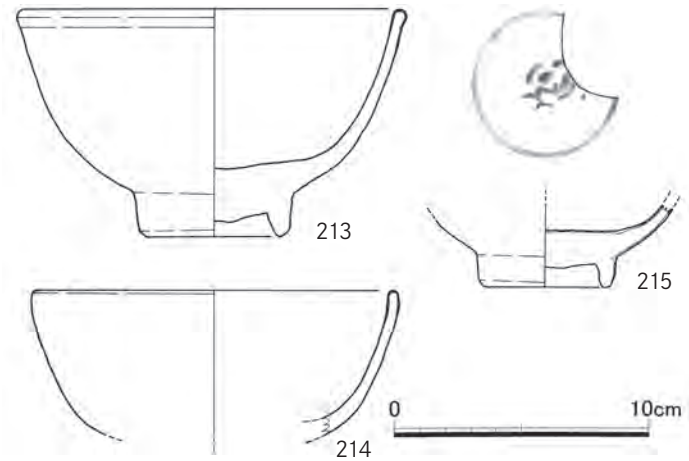
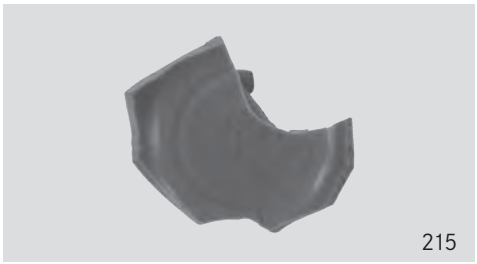
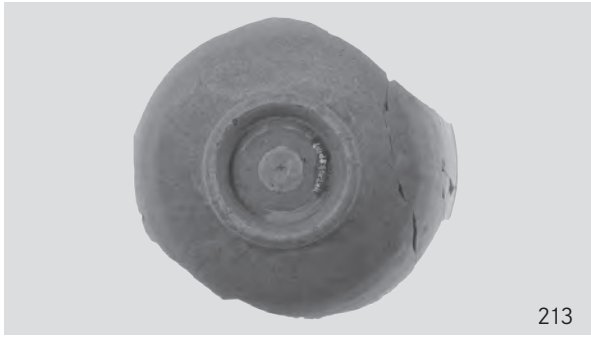
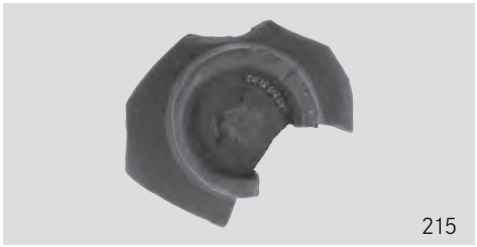


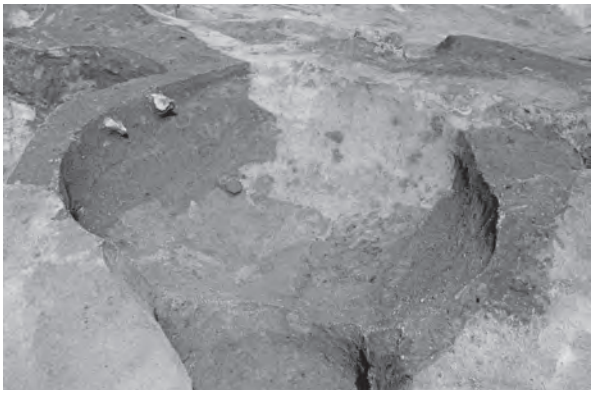
Fig.72　ＳＫ１０２出土遺物実測図　（1/3）







Ph.56　ＳＫ１０２出土遺物（約1/3）



Ph.57　ＳＫ１０８（東から）

Ph.58　ＳＫ１０８天秤皿出土状況（東から）

Ｅ類。**213**は胎土が淡灰色で硬質。透明度の低い淡緑色の釉を厚くかける。釉は粉状に白く変色している。全面施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。ＳＫ２３・１０５・ＳＰ１１１７出土片と接合した。**214**は胎土が淡灰色で硬質。透明度の低い明緑色の釉が厚くかかるが、口縁端部を除き白く変色している。**215**は胎土が淡灰色で外底付近は焼成悪く赤橙色を呈する。硬質で黒色微粒子を含む。透明度の低い明緑色の釉が厚くかかる。光沢はやや鈍い。全体にやや粗い貫入が入る。全面施釉後、外底の釉を輪状に掻き取る。内底に陰印花文が施されるが釉が厚いため不明瞭。

青花は出土しておらず、15世紀前半の遺構と考えられる。

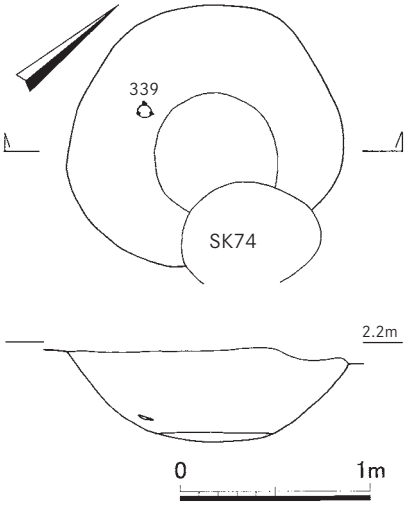


Fig.73　ＳＫ１０８実測図　（1/40）

SK108（Fig.73、Ph.57・58）

Ｂ・Ｃ－４の第２面で検出された略円形の土坑。覆土は暗灰褐色砂質土。径1.4～1.5m、深さ50cm。ＳＫ１０９・１２４・１２５を切る。

白磁や青花の小片が出土したほか、西側下位でFig.97に示す青銅製天秤皿**339**が出土している。

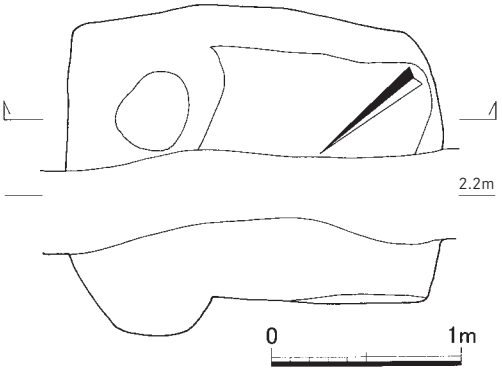


Fig.74　ＳＫ１１２実測図　（1/40）

SK112（Fig.74～76、Ph.59）

Ｃ・Ｄ－１の第２面で検出された推定隅丸方形の土坑。北側は調査区外に延びる。長辺2m、調査範囲での短辺0.8m、深さ45cmで東側ではピット状にさらに20cm深くなる。

出土遺物をFig.75・76・Ph.59に示す。**216**は土師器の坏。底部は回転糸切りで板状圧痕がある。復元口径10.1cm、底径7.2cm、器高1.9cm。**217・218**は中国龍泉窯系青磁の碗。**217**はＢ－Ⅳ－ａ類。胎土は黄灰白色を呈し、やや軟質。黒色微粒子を多く含む。釉は灰黄緑色で透明度は低く光沢は鈍い。全体に粗い貫入が入る。内面から高台内面途中まで施釉され外底は無釉。外面体部にクシ状工具で細蓮弁、内底中央に陽印花を施す。**218**は胎土が淡灰色で硬質。淡緑色で光沢のある、透明度低い釉が

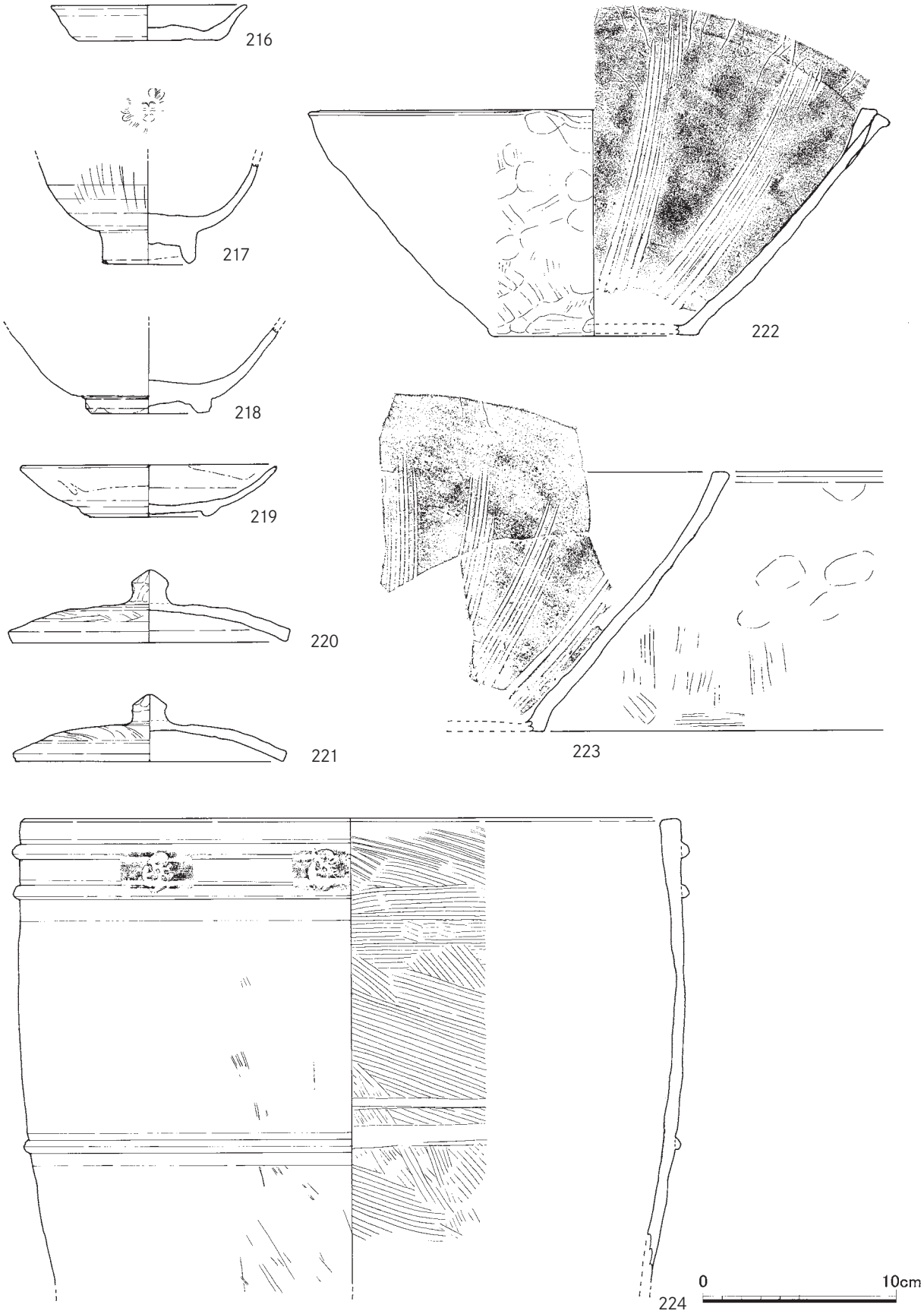


Fig.75　ＳＫ１１２出土遺物実測図　１　(1/3)

外面体部最下位まで施釉され、釉尻は褐色を呈する。内底に円形に擦痕が残る。茶筅の痕か。**219**は中国福建省産の白磁皿。内底と体部下半は露胎。内外面にススが付着している。**220・221**は瓦質土器の蓋。胎土はきめの細かい土に微砂粒が多く混入し、やや粗い。暗灰色から灰橙色を呈する。**222・223**は瓦質土器の擂鉢。４本１単位の擂り目を放射状に入れる。胎土はきめが細かく、焼成良好である。**222**は注口が２ヶ所ある。**224・225**は瓦質土器の火鉢。**224**は口縁下に二条の突帯を廻らせ間に円形の花文とみられるスタンプを施す。胴部には一条の突帯を廻らす。**225**は口縁下、胴部中位、胴部下位に二条の突帯を廻らせ、間に陽刻の三巴文とみられるスタンプを２ヶ所１単位

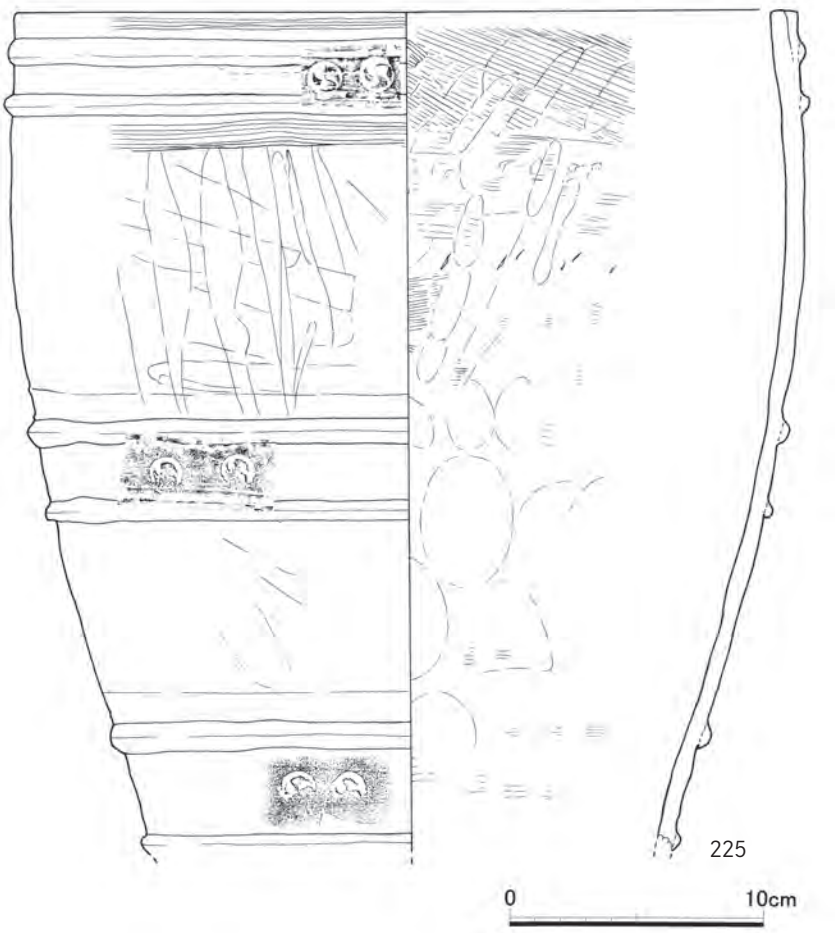
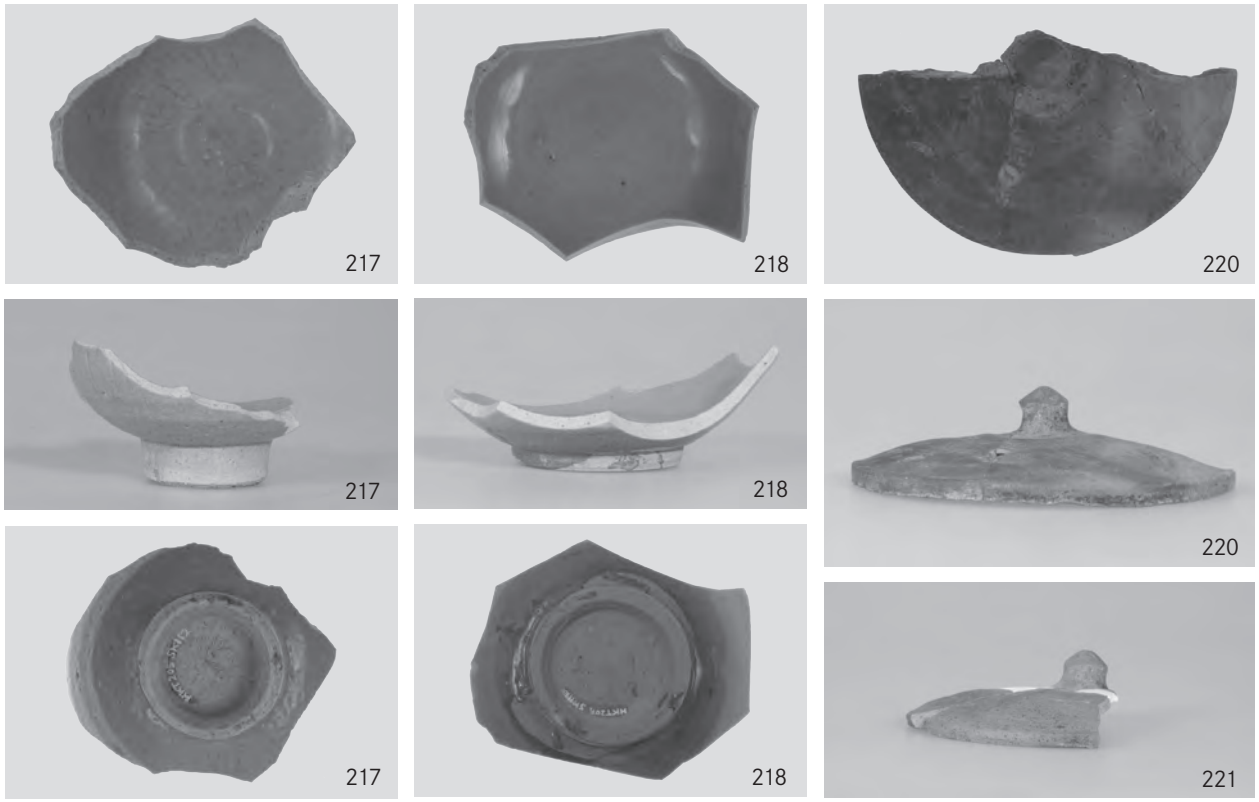


Fig.76　ＳＫ１１２出土遺物実測図　２　(1/3)



Ph.59　ＳＫ１１２出土遺物（約1/3）

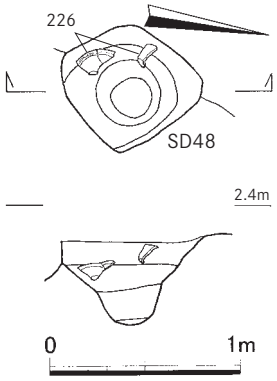


Fig.77　ＳＫ１１３実測図　(1/40)

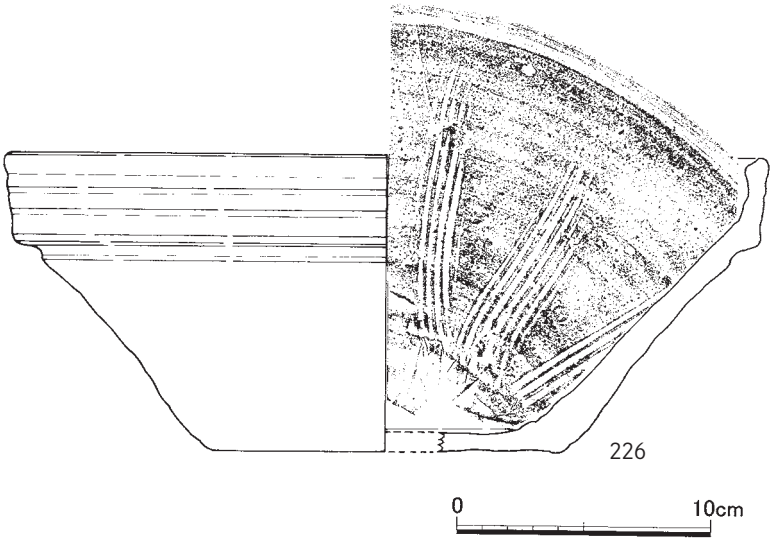


Fig.78　ＳＫ１１３出土遺物実測図　(1/3)

で施す。ＳＫ７０出土片と接合している。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

SK113（Fig.77・78）

Ｃ・Ｄ－４の第２面で検出された略円形の土坑。径0.7m、深さ45cm。近世の溝ＳＤ４８とＳＸ８４に切られる。

出土遺物をFig.78に示す。**226**は備前焼擂鉢。遺構の南側上位から中位で出土した。16世紀中頃の製品。

SK120（Fig.79・80、Ph.60）

Ｆ・Ｇ－２・３の第２面で検出された大型の土坑。近世井戸ＳＥ１２に切られ規模は不明。深さ40cm。

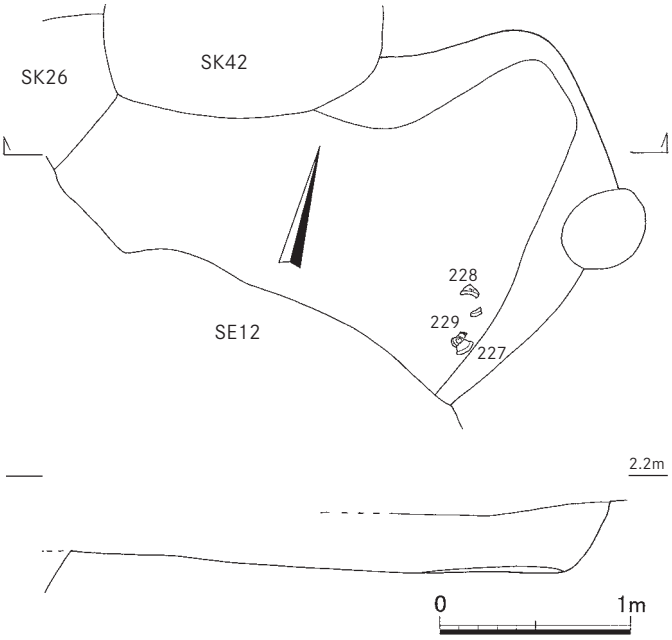


Fig.79　ＳＫ１２０実測図　(1/40)

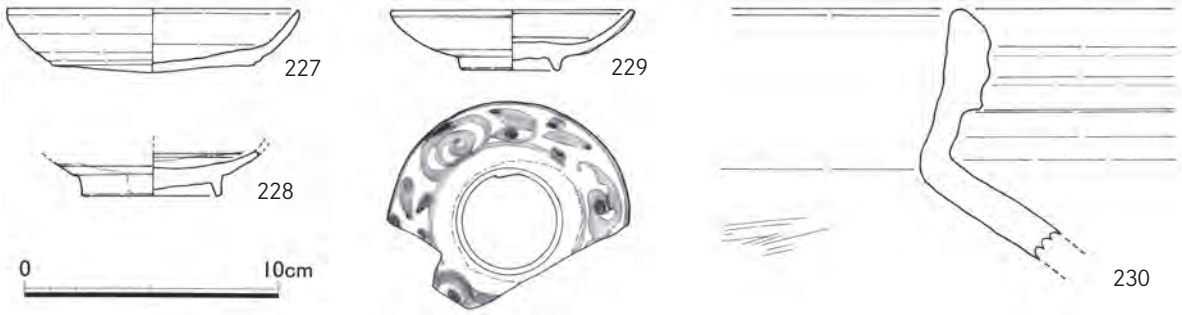
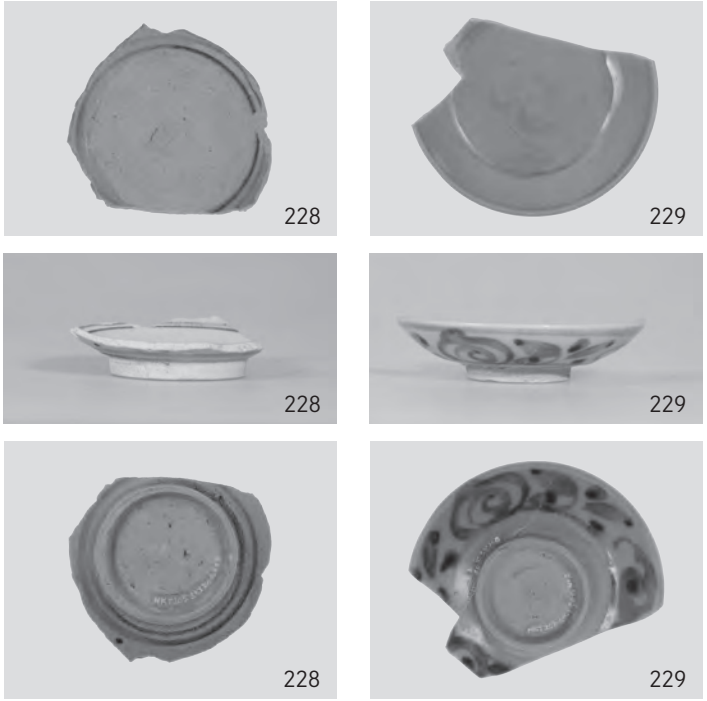


Fig.80　ＳＫ１２０出土遺物実測図　(1/3)

出土遺物をFig.80・Ph.60に示す。**227**は土師器の坏。底部は回転糸切り。復元口径11.5cm、復元底径8.0cm、器高2.4cm。**228**は中国華南産の青花碗。胎土は灰黄色でやや粗くやや軟質。釉は灰黄色白濁気味全体に貫入が入る。内底と外底を露胎とする。呉須は灰色味を帯び、やや薄い。釉のかからない部分は褐色を呈する。内底露胎部分は平滑で何かを擂った可能性がある。**229**は中国華南産の青花皿。胎土は灰白色で硬質。釉は灰青味で透明度はやや低い。光沢は強い。内面から外面体部下半まで施釉され、外底露胎。釉尻は橙褐色を呈する。呉須は彩度が低くやや薄い。**230**は備前焼の大甕。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。



Ph.60　ＳＫ１２０出土遺物（約1/3）

SK126（Fig.81・82、Ph.61）

Ｆ・Ｇ－４・５の第２面で検出された楕円形の土坑。第１面のＳＫ２５の下部に位置する。西側は近世井戸ＳＥ１２に切られる。長軸2.9m、短軸2.3m、深さ100cm。

出土遺物をFig.82・Ph.61に示す。**231**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。口径9.2cm、底径6.5cm、器高1.8cm。**232・233**は土師器の坏。底部は回転糸切り。**232**は復元口径11.6cm、底径6.3cm、器高2.4cm。**233**は底部に板状圧痕がある。復元口径12.6cm、復元底径9.5cm、器高2.4cm。**234**は中国景徳鎮産の青花皿Ｂ１群。胎土は灰黄色を呈しやや軟質。内面から高台外側には灰黄色味の透明度の低い釉がかかり、やや粗い貫入が入る。高台内側には透明の釉が薄くかかる。**235**は朝鮮王朝軟質白磁の碗。胎土は灰白色で、黒色微粒子を含み、空隙がある。釉は黄灰

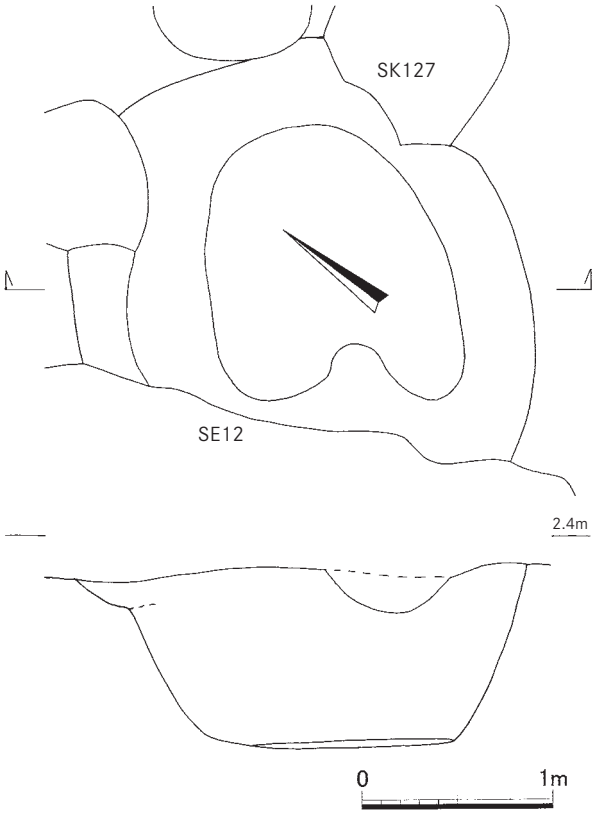


Fig.81　ＳＫ１２６実測図　（1/40）

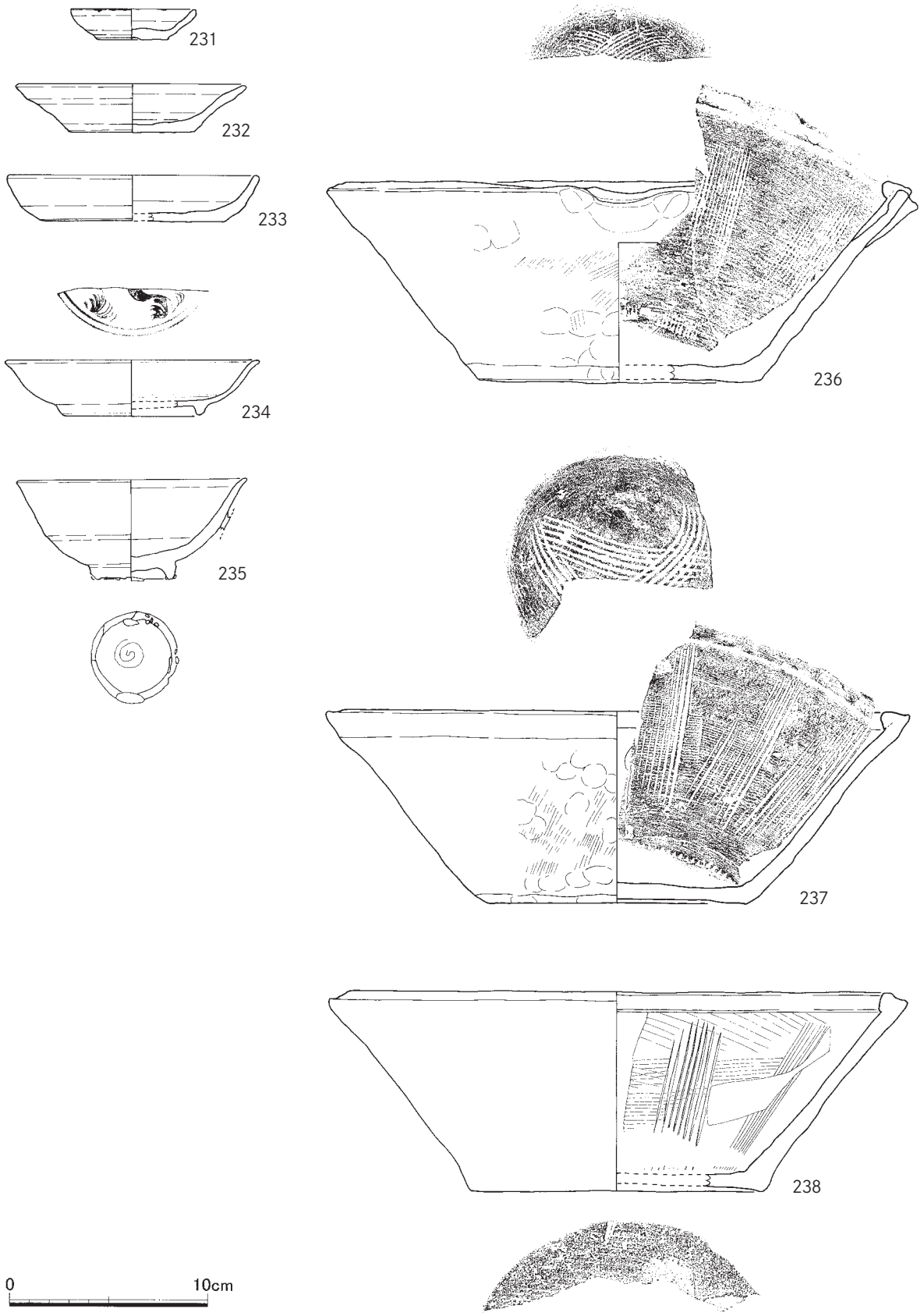
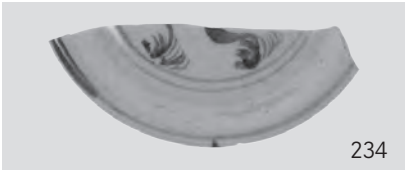


Fig.82　ＳＫ１２６出土遺物実測図　(1/3)

色がかり光沢がある。畳付に4ヶ所の胎土目。体部外面に別固体の破片が釉着している。**236～237**は瓦質の擂鉢。口縁部内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。防長系とされる。**236**は内面体部に11本１単位のやや密な擂り目が放射状に入り、内底にも同じクシ状工具で擂り目を入れる。小さく片口をつくっている。**237・238**は内面体部に９本１単位の擂り目が放射状に入り、内底にも同じクシ状工具で擂り目を入れる。**238**の外底には板状圧痕がある。ＳＫ２５出土片と接合している。



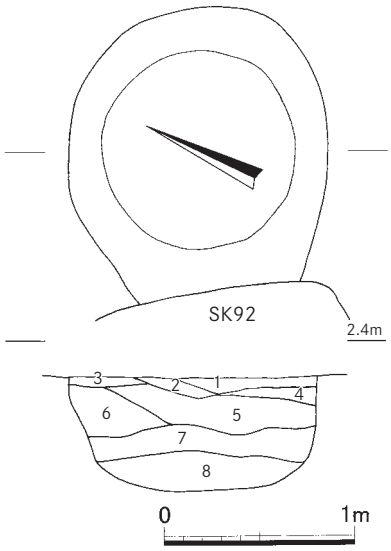
Ph.61　ＳＫ１２６出土遺物（約1/3）

出土遺物から16世紀中頃の遺構と考えられる。

SK132（Fig.83、Ph.62・63）

Ｉ－３・４に位置する略円形の土坑。残存部の長軸1.5m、短軸1.4m、深さ60cm。ＳＫ９２に切られ、ＳＫ１３３・１５９を切る。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、外皮を付

Ph.62　ＳＫ１３２土層（西から）



1. 暗褐色砂質土　炭化穀物含む。
2. 暗灰褐色砂質土　炭化物含む。
3. 暗褐色砂質土　炭化物含む。
4. 暗灰褐色砂質土　炭化物含む。
5. 暗褐色砂質土　炭化物多く含む。
6. 灰黄褐色砂　炭化物少量含む。
7. 灰褐色砂質土　炭化物含む。
8. 灰褐色砂質土　７より黄色味がかる　炭化物少量含む。

Fig.83　ＳＫ１３２実測図　（1/40）

Ph.63　ＳＫ１３２（南から）

けたままの炭化麦と、微量の外皮を取り除いた炭化麦が浅いコンテナケース２分の１ほど採集できた。

出土遺物は多くなく、陶磁器は小片ばかりで、中国龍泉窯系青磁碗Ｂ－Ⅲ類、内外底露胎の碗、景徳鎮産青磁菊皿、白磁皿Ｅ－２ｂ類、朝鮮王朝の灰青陶器小皿、褐釉陶器瓶などがある。

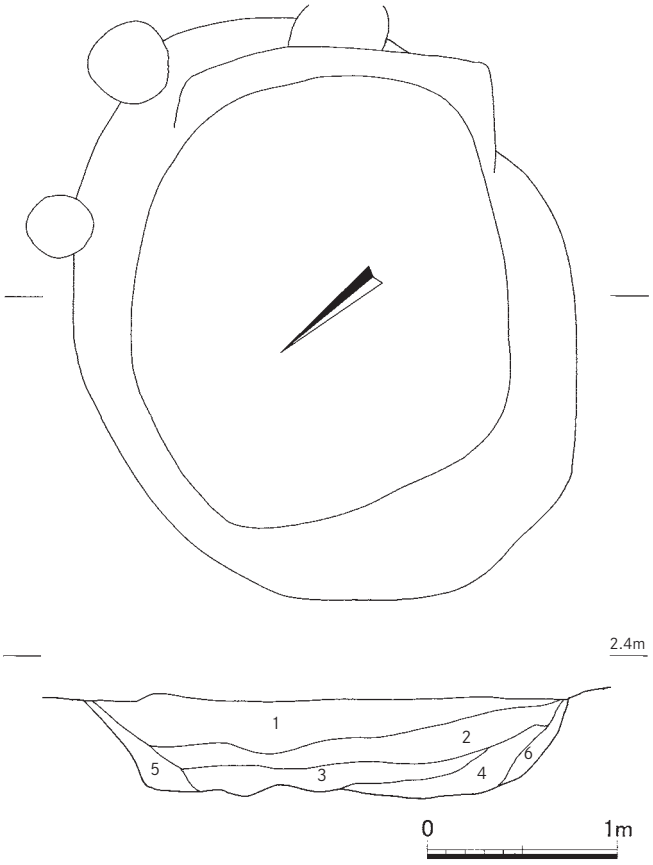
出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

SK134（Fig.84、Ph.64・65）

Ｊ～Ｌ－２～４に位置する楕円形の土坑。長軸3.1ｍ、短軸2.7ｍ、深さ50cm。ＳＫ１４８を切る。南側に方形の撹乱がある。覆土に炭化物粒が認められ、水洗の結果、外皮を付けたままの炭化麦と、小量の外皮を取り除いた炭化麦が浅いコンテナケース２分の１ほど採集できた。

遺構の規模に比べて出土遺物は多くない。中国龍泉窯系青磁碗Ｅ類、景徳鎮産青磁菊皿、白磁皿Ｅ－２ｂ類、青花碗Ｃ群、朝鮮王朝の灰青陶器小皿、刷毛目皿、褐釉陶器瓶・鉢などがある。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。



1. 褐色砂質土　黒色砂含む。炭化物・焼土少量含む。炭化穀物少量含む。
2. 黄褐色砂質土　黄灰色砂層状に含む。炭化穀物少量含む。
3. 暗黄灰色砂質土　黒色砂含む。しまり弱い。炭化穀物少量含む。
4. 暗黄灰色砂質土　炭化穀物少量含む。
5. 黄灰色砂　白色砂含む。炭化穀物微量含む。
6. 黄灰色砂　白色砂含む。炭化穀物微量含む。

Fig.84　ＳＫ１３４実測図　（1/40）

Ph.64　ＳＫ１３４土層（北から）

Ph.65　ＳＫ１３４（東から）

SD138

(Fig.85・86、Ph.66)

Ｉ－１に位置する溝。北側は調査区外に延びる。調査区内での長さ1.9m、幅0.4m、深さ30cm。

出土遺物をFig.86・Ph.66に示す。**239**は土師器の小皿。底部は回転糸切り。口径7.1cm、底径4.8cm、器高1.5cm。**240**は中国産白磁の皿。口縁外反する。胎土は灰黄色でやや粗くやや軟質。灰青味がかった釉がかかる。全体に細かい貫入が入る。体部下位と内底露胎。**241**は中国景徳鎮産の青花皿Ｂ２群。口縁部内面に四方襷文、体部外面に唐草文を描く。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

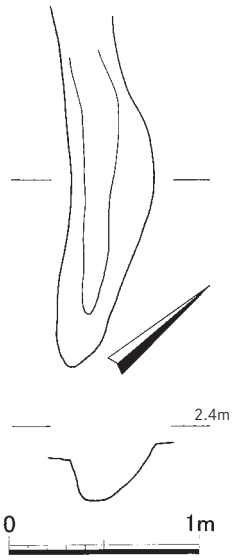


Fig.85　SD138実測図 (1/40)

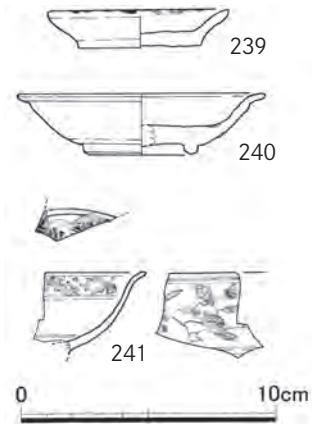
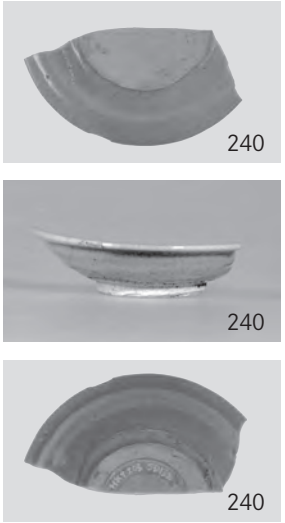


Fig.86　SD138出土遺物実測図 (1/3)



Ph.66　SK138出土遺物 (約1/3)

SK148 (Fig.87・88)

Ｋ・Ｌ－２・に位置する楕円形の土坑。長軸2.0m、短軸1.7m、深さ40cm。ＳＫ９９・１３４に切られる。

出土遺物をFig.88に示す。**242**は中国龍泉窯系青磁の碗。胎土は灰色で硬質。淡緑色の釉が内面から高台内面途中まで施釉され、外底は露胎。全体に貫入が入る。内底中央に印花を施す。**243**は中国景徳鎮産の白磁皿E－２ｂ類。**244**は中国景徳鎮産の白磁菊皿でやや青みがかった釉がかかり、青磁としてもよい。全体に貫入が入る。内面から高台外面まで施釉され、外底は露胎。口縁を波状にし、体部内面をヘラで削り、体部外面に沈線を入れて花弁をあらわす。**245**は中国景徳鎮産の青花碗Ｃ群。体部外面に梅月文を描く。

出土遺物から16世紀前半の遺構と考えられる。

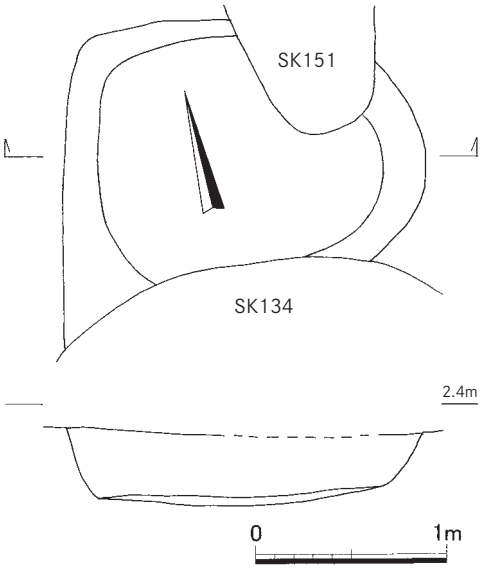


Fig.87　ＳＫ１４８実測図（1/40）

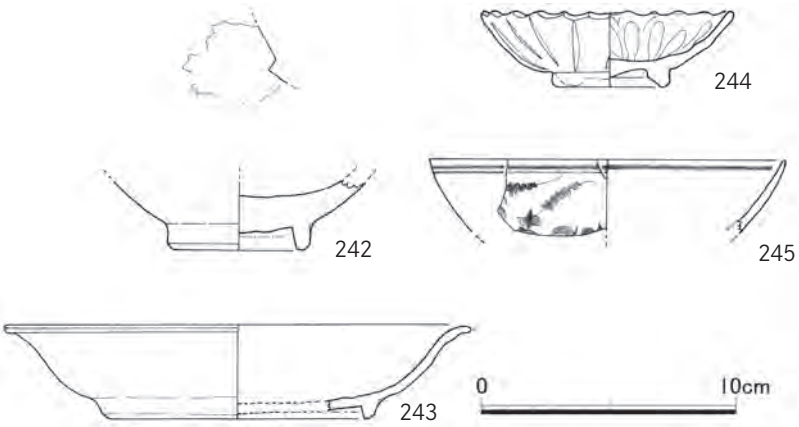


Fig.88　ＳＫ１４８出土遺物実測図（1/3）

３．その他の出土遺物

最後にこれまでに触れた遺構出土以外の土器・陶磁器と石製品、金属製品、玉類、銭貨について報告する。

中国産青磁（Fig.89・Ph.67）

246･247は龍泉窯系青磁碗。**246**はD類。胎土は暗灰色で硬質、白色・暗褐色の微砂粒をやや多く含む。透明度が低い灰緑色の釉が薄くかかる。**247**は胎土暗灰色で硬質、白色・黒色の微砂粒をやや多く含む。透明度が低い灰黄緑色の釉が内面から外面高台外側まで薄くかかる。内面にヘラ彫り文がある。外底に墨書がある。**248・249**は景徳鎮産の青磁皿。**248**は菊皿。透明度がやや低く、光沢の強い灰緑気味の青磁釉が内面から外面高台外側までやや厚くかかる。外底には透明度がやや低く、光沢の強い灰色がかった透明釉がやや薄くかかる。露胎となる畳付は赤茶色に発色している。**249**は透明度が低く、光沢の強い淡緑色の青磁釉が内面から外面高台外側までかかる。外底には透明度が低く、光沢の強い透明釉がかかる。

中国産白磁（Fig.90・Ph.68）

250～261は中国景徳鎮産の白磁皿E－２ｂ類。遺構出土を含め今回の調査で数多く出土している。復元口径は11.2cm～17.8cm、器高は2.9cm～4.4cmとサイズが様々。**255･256**には外底に呉須で銘が入る。**262**は八角口縁の皿。内面から高台脇まで透明度が低い光沢のあるやや灰緑がかった透明釉がかかる。全体に貫入が入る。福建省産か。**263**は小さな高台を削り出す小皿。口縁は外反する。胎土は白色で微細黒色粒子を含む。空隙が層状にみられる。内面から高台脇まで透明度が低い光沢のあるやや青灰がかった透明釉がかかる。外面体部下位に高台を削り出した際のカンナ痕が放射状に残る。景徳鎮産か。**264**は福建省産の皿。内底と体部下半は露胎。

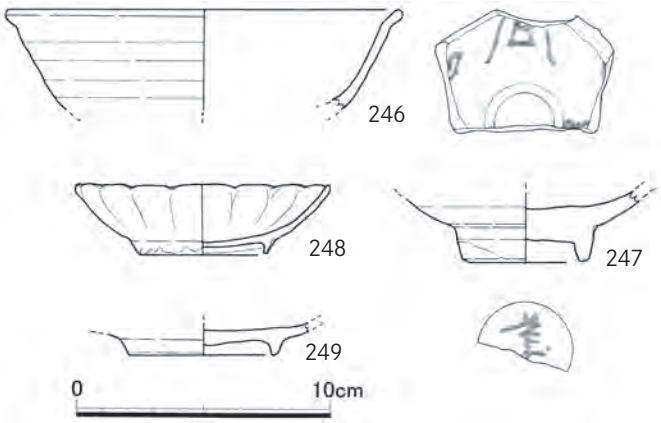
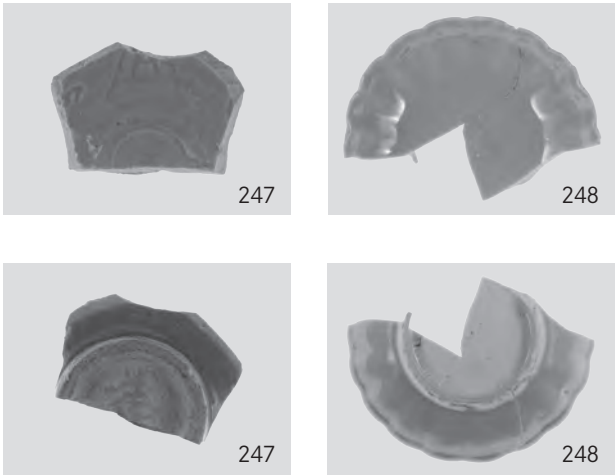


Fig.89　中国産青磁実測図　（1/3）

中国産青花（Fig.91・92・Ph.69・70）

265～279が碗、**280～295**が皿である。

265～268は景徳鎮産青花碗C群。**269**は口縁が大きく外反する碗で**267**と同じ文様構成。**270・271**は景徳鎮産青花碗D群。**272～274**は景徳鎮産青花碗E群。**272**は黄灰色がかった透明釉がかかり、呉須は黒ずむ。**273・274**の内面から高台外側には



Ph.67　中国産青磁（約1/3）

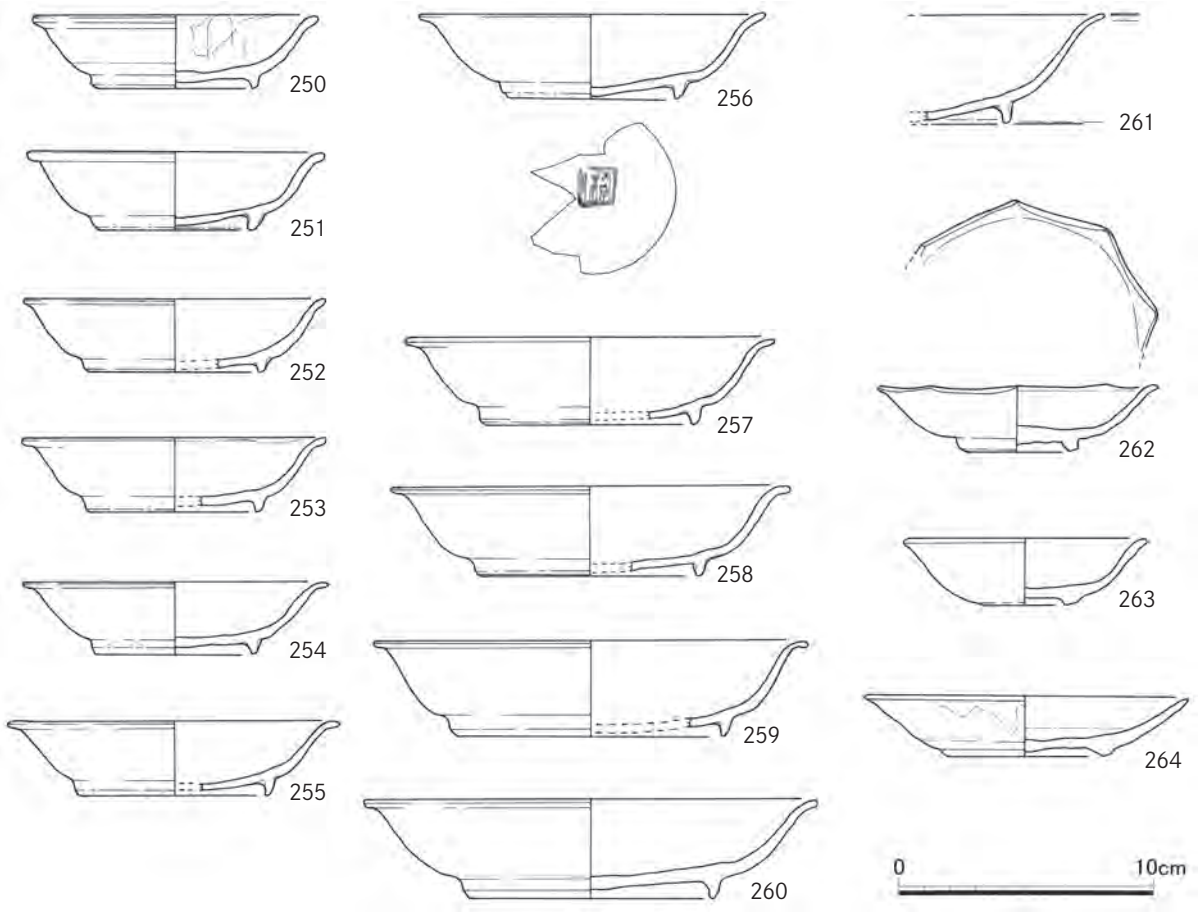
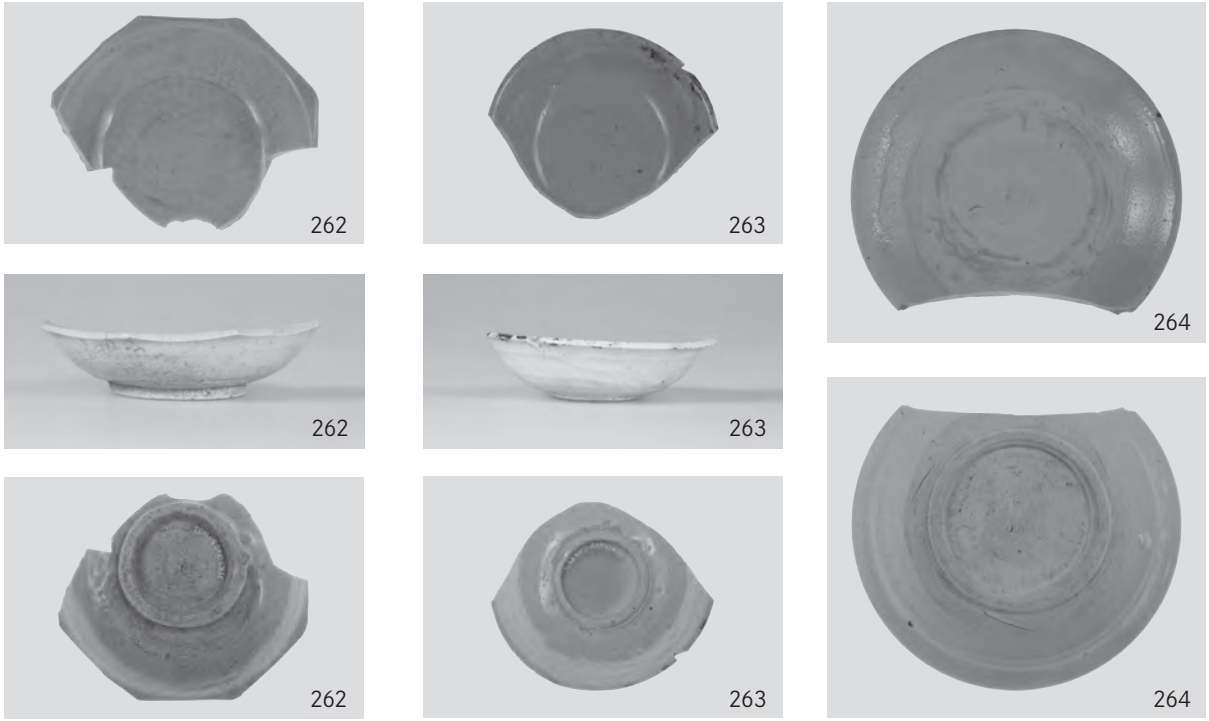
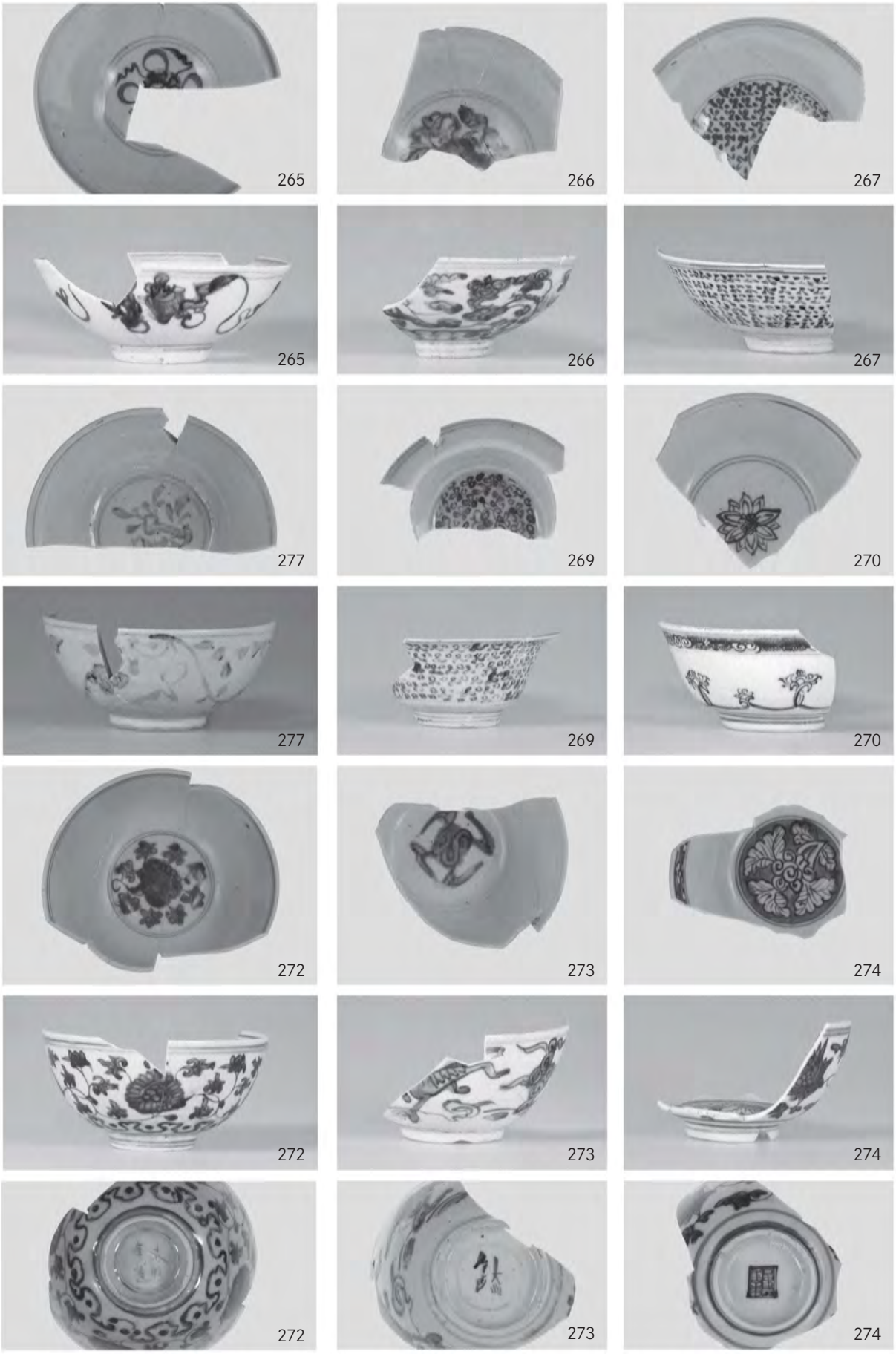


Fig.90　中国産白磁実測図　（1/3）



Ph.68　中国産白磁（約1/3）

Fig.91　中国産青花実測図　1　(1/3)



Ph.69　中国産青花　1（約1/3）

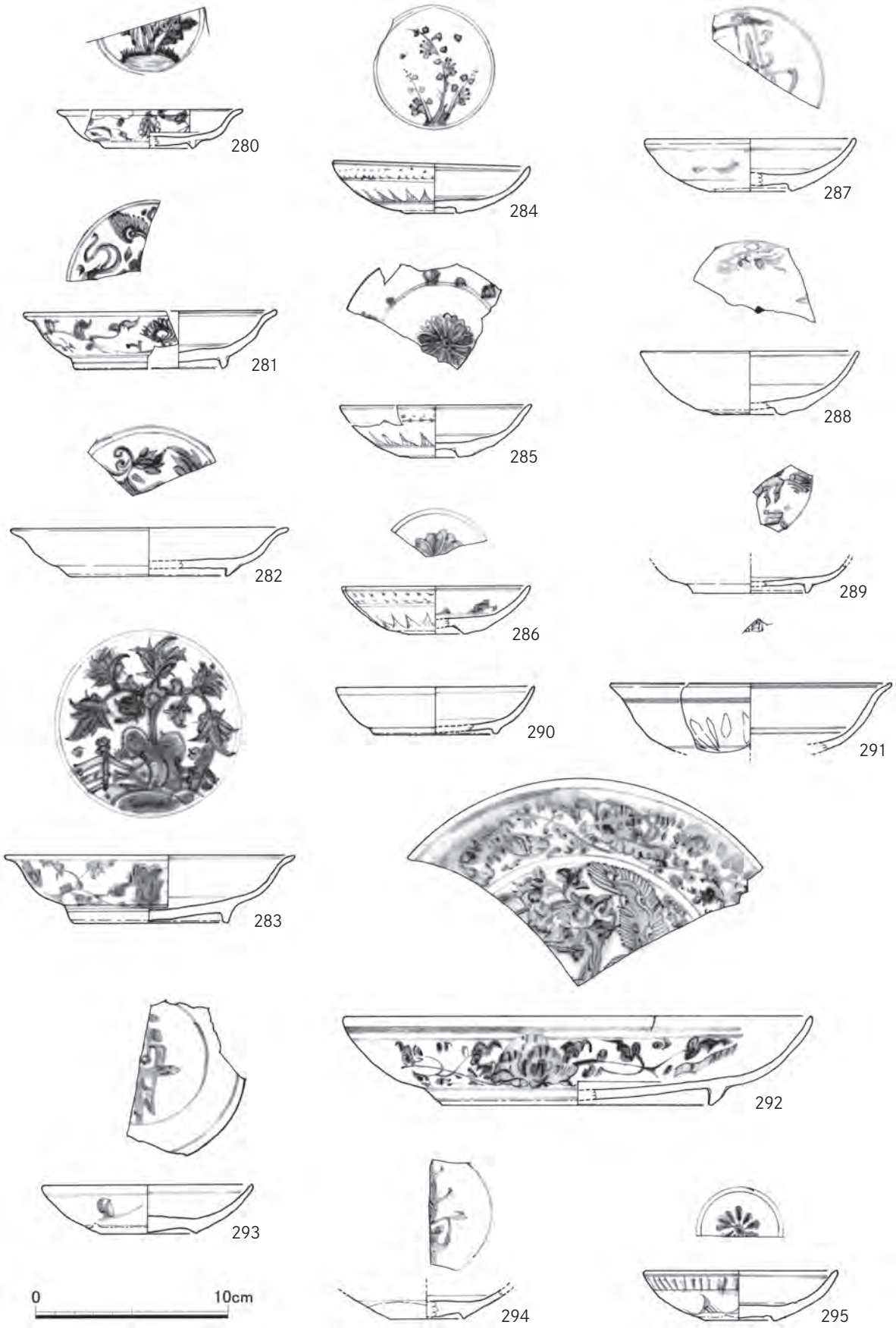
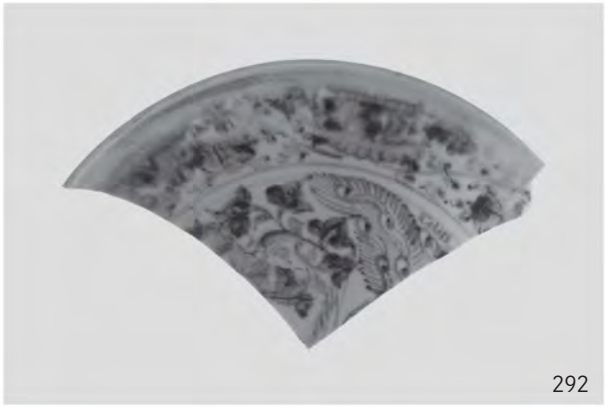
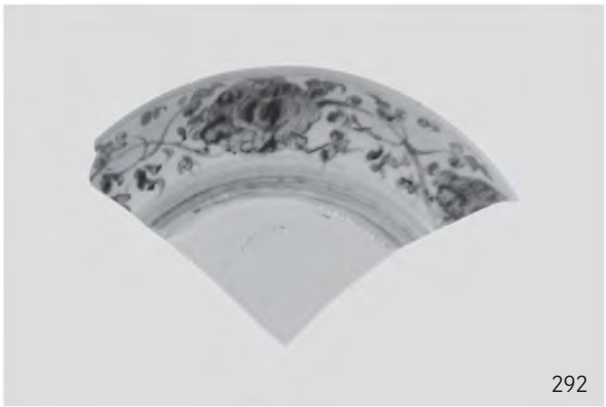


Fig.92　中国産青花実測図　2　(1/3)





Ph.70　中国産青花　2（約1/3）

やや青味がかった透明釉、高台内側には透明釉がかかる。**272・273**の外底には「大明年造」、**274**の外底には「富貴佳器」の銘。**275**は焼成良好であるが、器壁が厚く、釉も厚い。文様が粗雑で、景徳鎮産とは異なるか。**276**は小碗。景徳鎮産であろう。**277～279**は華南産の碗。**277**は焼成不良で胎土が橙色を呈する。釉は灰色味を帯び、やや不透明で全体に貫入が入る。呉須は黒ずみ発色が悪い。畳付の釉を掻き取る。**278**は青味がかった透明釉が内面から高台外面までやや厚くかかる。呉須は薄く、にじむが発色は良い。**279**は青味がかった透明釉が内面から外面体部下位までかかり全体に貫入が入る。呉須はやや黒ずみにじんでいる。

280～283は景徳鎮産青花皿B１群。**280**の呉須は黒ずみ、発色が悪い。**284～288**は景徳鎮産青花皿C群。**284**の口縁部にはススが付着している。**287**は青味がかった透明度の高い釉がかかり、貫入が入る。**288**の釉は白濁している。**289・290**は景徳鎮産青花皿E群。**291**は外面体部にヘラで彫り込みを入れる。青味がかった透明釉がかかり、全体に貫入が入る。**292**は大皿。青黄味がかった透明釉がかかるが白濁している。呉須の発色は良いがにじんでいる。**293～295**は華南産の青花皿C群。**293・294**は白化粧土を全体にかけた後、透明釉を内面から外面体部下位までかける。貫入が全体に入る。内底に呉須で「寿」字。**293**の釉は黄白色がかりやや不透明。**294**の釉は青灰色がかり透明度が高い。

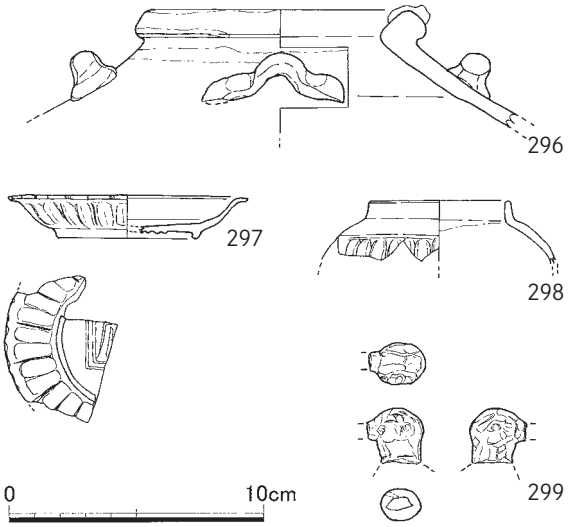
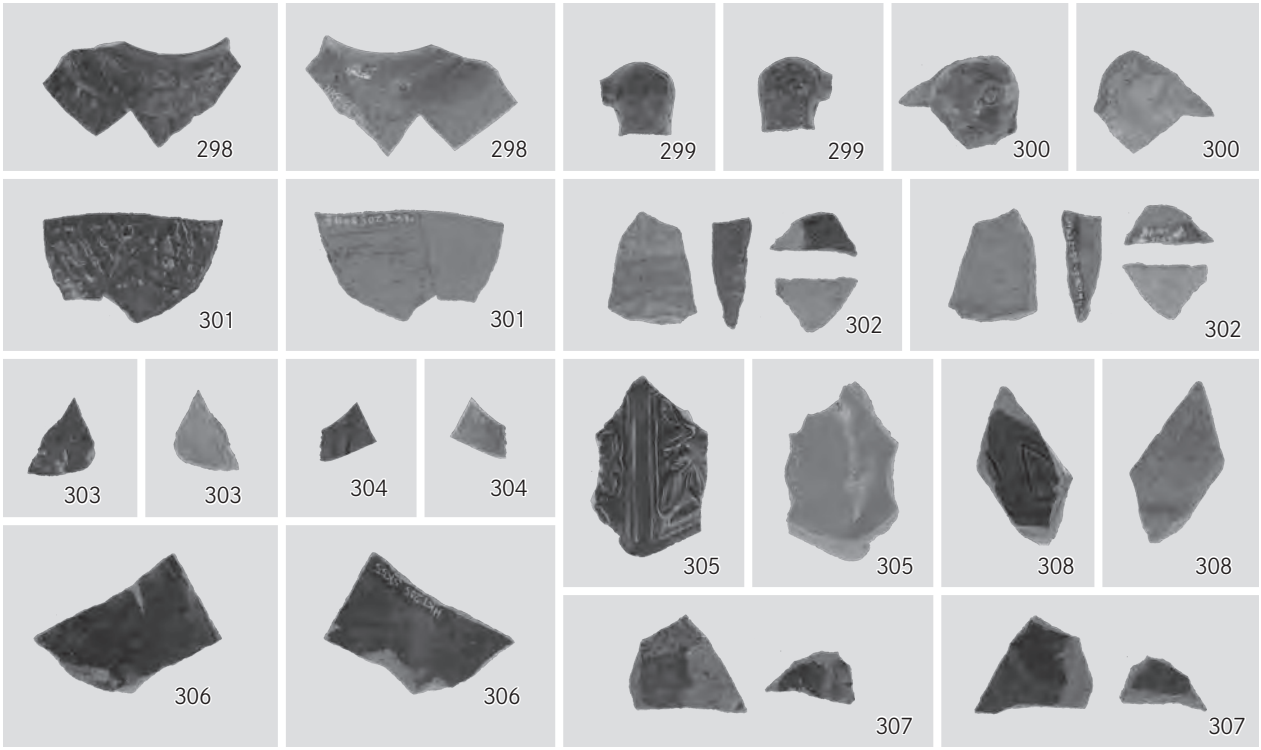


Fig.93　中国産陶器実測図　（1/3）

中国産陶器（Fig.93・Ph.71）



Ph.71　中国産陶器（約1/2）

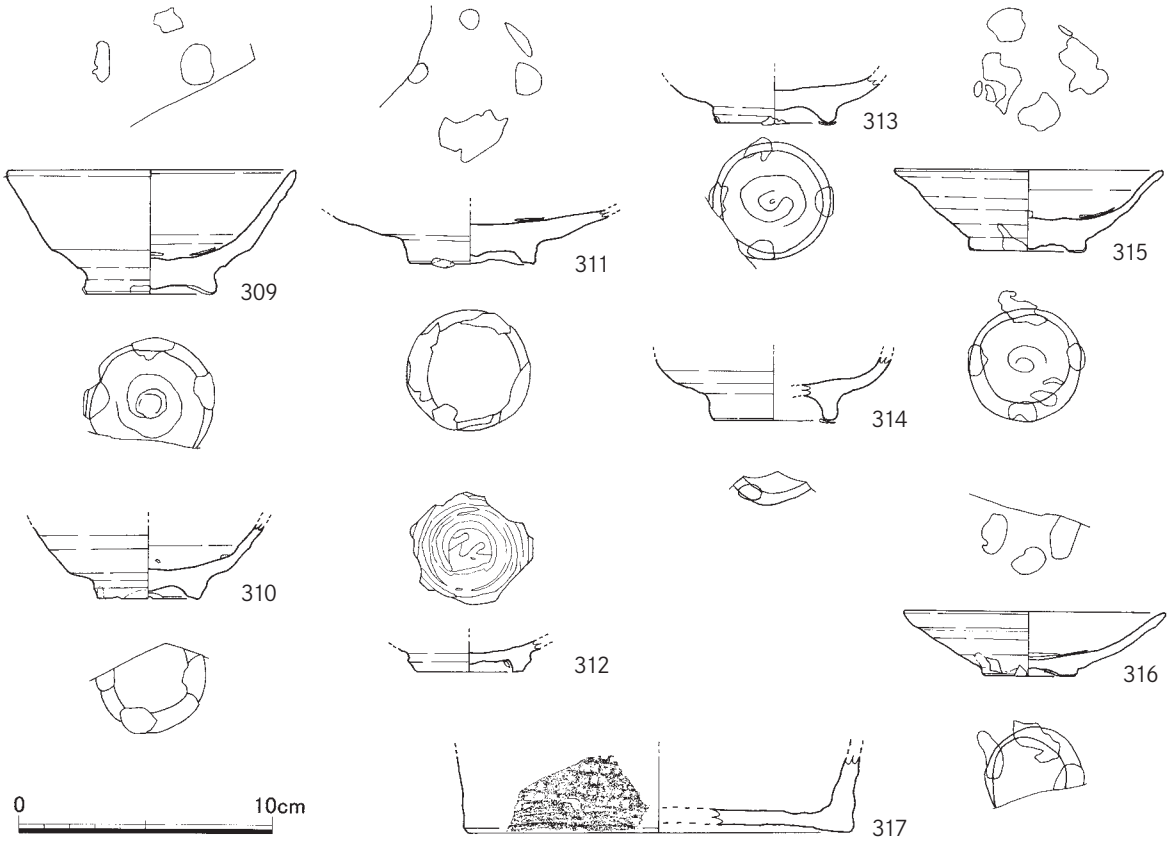
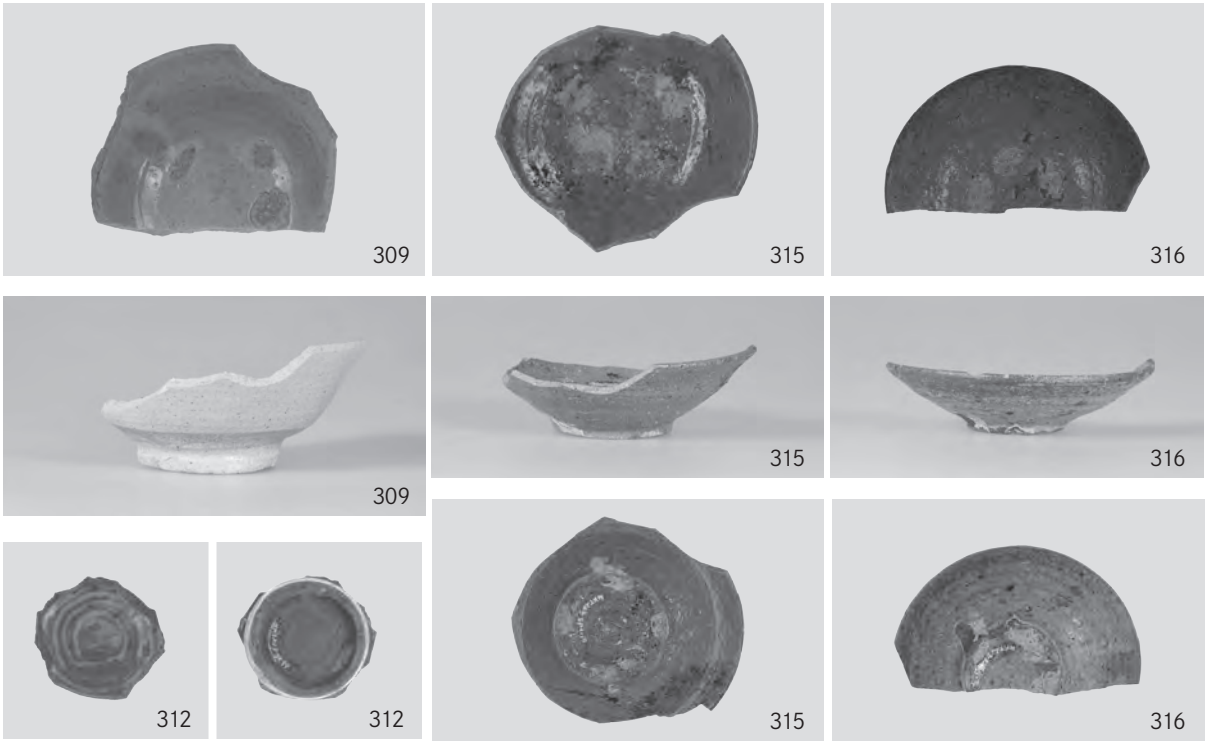


Fig.94　朝鮮産陶磁器実測図　（1/3）



Ph.72　朝鮮産陶磁器（約1/3）

296は四耳壺。暗茶褐色の不透明釉が内外面にかかる。**297**は型打ちの翡翠釉皿。よく見られる小皿より大きめ。外底露胎。**298**～**308**は華南三彩。**298**は小壺。胎土は白色、緻密で硬質。外面に明緑色、頸部内面に黄色釉がかかる。体部に型打ちで蓮弁をあらわす。**299**は鳥形水滴。頭部の破片で、胎土は淡茶色で軟質。くちばしに黄釉、他に緑釉を薄くかける。**300**～**303**は鴨形水注。**62**の口縁部と同一固体であろう。**300**は頸部に巻きつく雌鳥の頭部、**301**は胴と羽の部分。胎土は淡茶白色で軟質。**304**は**298**と同一固体の破片か。蓮弁が打ち出される。**305**は蓋の破片か。胎土は淡茶白色で軟質。外面に緑色釉と黄色釉、内面に透明釉がかかる。**306**・**307**は壺の破片か。胎土は淡茶色でやや硬質。外面に緑色釉と黄色釉、**306**にはさらに紫釉がみられる。内面には褐釉がかけられる。外面に線刻文が入る。**308**は盤の破片か。胎土は淡茶色で軟質。外面に明緑色で光沢のある釉がかかる。線刻文が入る。

朝鮮産陶磁器（Fig.94・Ph.72）

309は軟質白磁。内外底に砂目。**310**・**311**は硬質白磁。青味がかった透明釉がかかる。目跡は胎土目であるが、**310**の内底には無い。**312**は粉青沙器刷毛目皿。**313**・**314**は灰青陶器。灰緑色の透明度が高い光沢のある釉がかかる。**315**・**316**は灰青陶器皿。内外底に砂目。灰色～灰褐色を呈する。**317**は陶器瓶。胎土は暗赤紫色で表面は暗灰色を呈し、２mm以下の白色砂粒を含む。外面に格子目タタキ痕が残る。

国産陶器・土器（Fig.95・Ph.73）

318は備前焼擂鉢。口縁帯は内傾し、外面に凹線が入る。**319**は備前焼水屋甕。口縁内側に蓋受の段がある。**320**は瀬戸・美濃系窯の灰釉折縁皿。体部内面に丸ノミ状工具で削ぎを入れる。**321**・**322**は瓦質の擂鉢。口縁部内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。防長系。

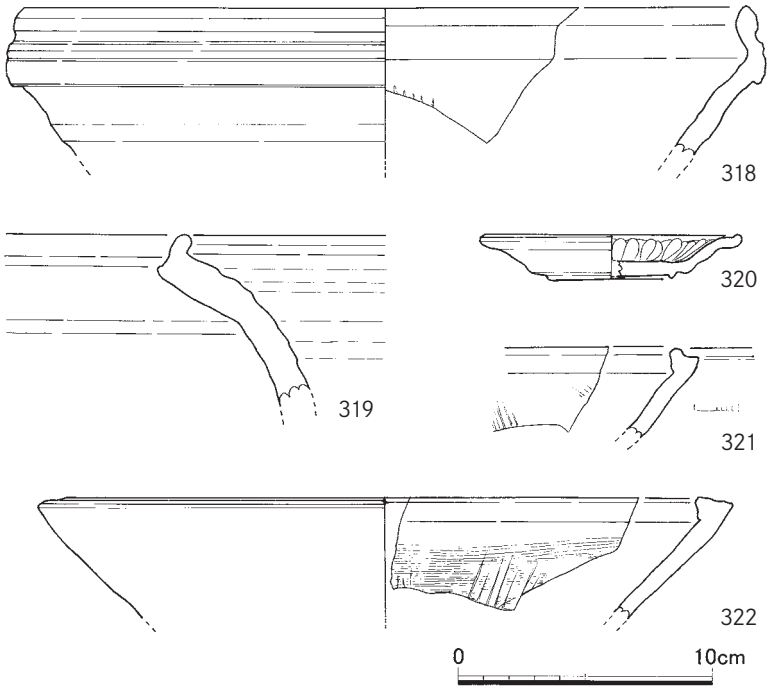


Fig.95　国産陶器・土器実測図　（1/3）

Ph.73　国産陶器（約1/3）

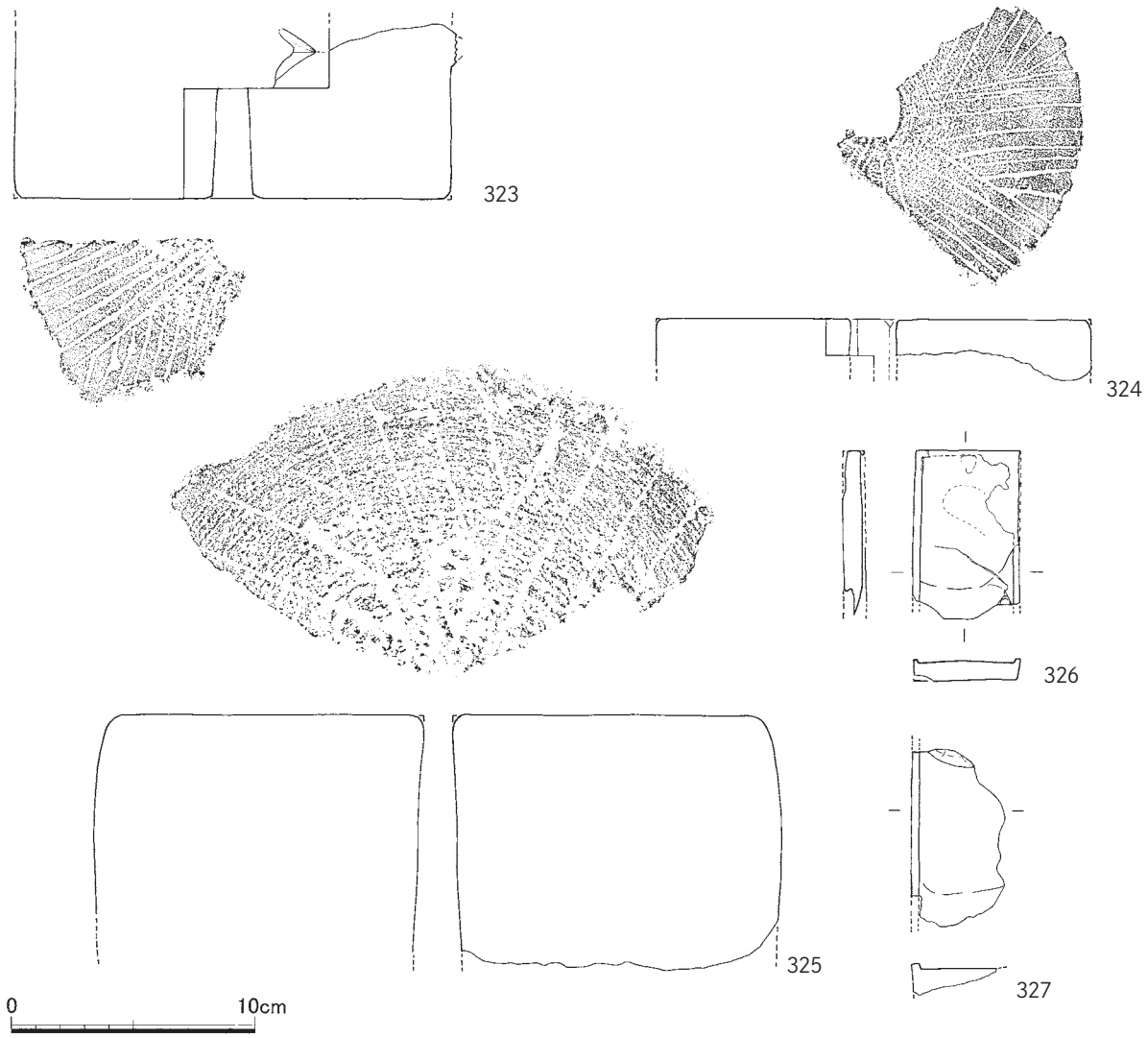
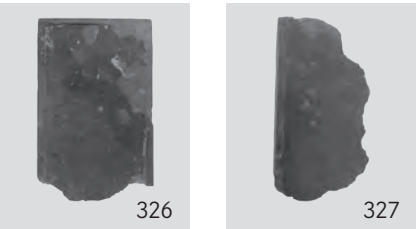


Fig.96　石製品実測図　（1/3）

石製品（Fig.96・Ph.74）

323～**325**は石臼。臼面はすべて８分画であろう。**323**は茶臼の上臼。側面には菱形の削り出し部の一部が残る。ＳＫ５５・ＳＸ７５出土。**324**は茶臼。上下は不明。芯棒孔は隅丸方形。**325**は粉挽き臼の下臼。**326**・**327**は硯。**326**はＳＸ１１出土。**327**はＳＸ９５出土。



Ph.74　石製品（約1/3）

金属製品（Fig.97・Ph.75）

328～**339**は青銅製品。**328**は鍵。**329**・**330**は笄。**331**はキセルの雁首。近世の土坑ＳＫ７３出土。**332**はキセルの吸い口。近世の土坑ＳＫ３１出土。**333**は脚。方形の鉢形製品に付くのであろう。**334**は楕円形の薄板。現況で頂部が互い違いに小さく折れている。**335**はミニチュアの鍋。三足の脚が付く。口縁部が欠損しているが、片口になっていた可能性がある。また、突出部があり、把手があったようである。**336**は小型の鉢か。**337**・**338**は金具。**339**に付くものか。ＳＫ１０８出土。**339**は天

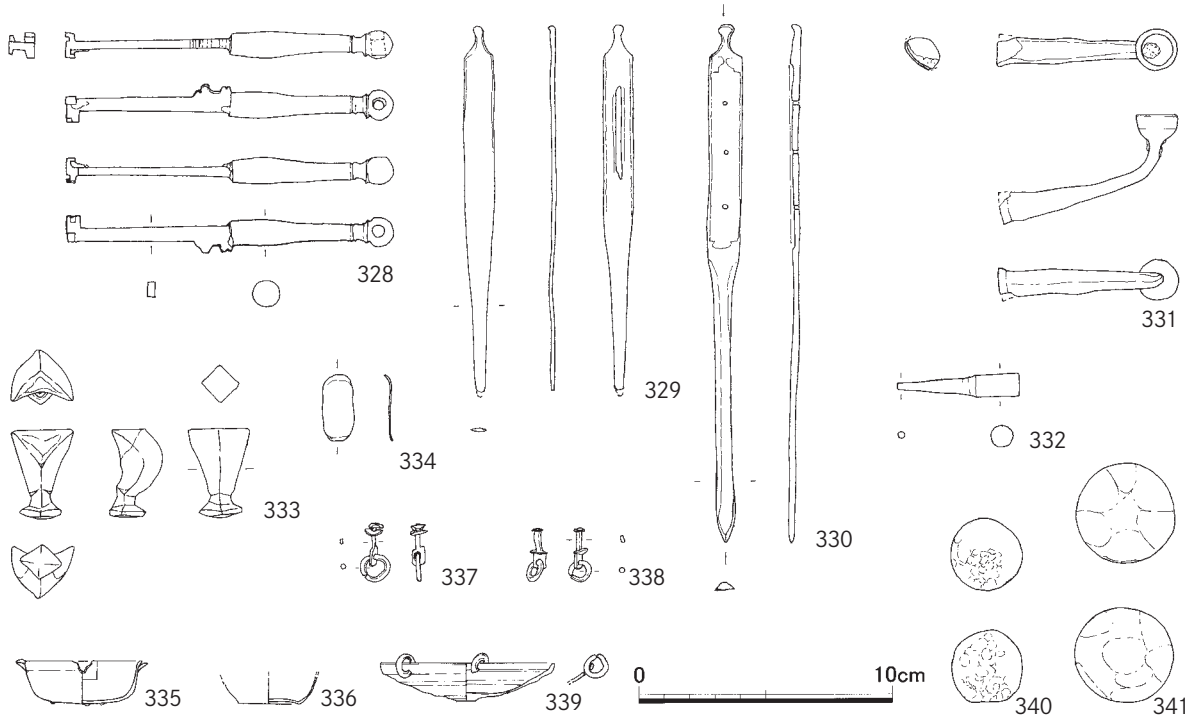
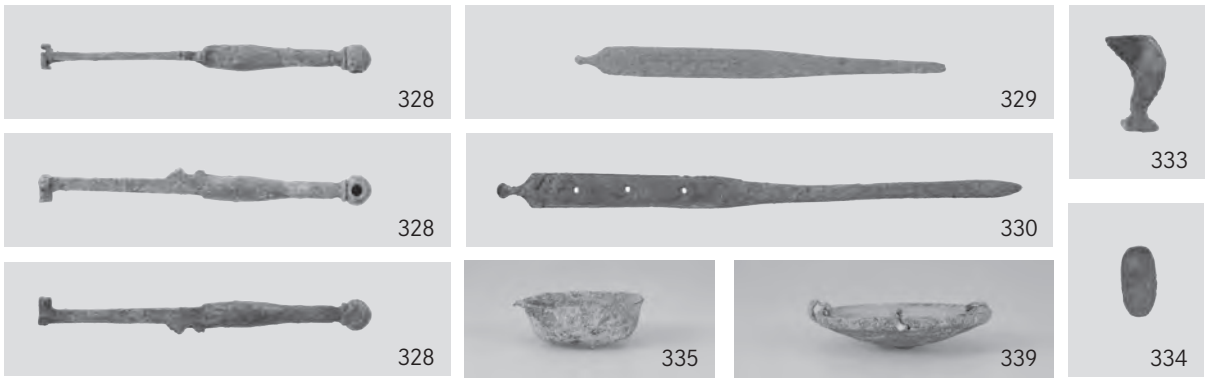


Fig.97　金属製品実測図　（1/3）



Ph.75　金属製品（約1/3）

秤皿。３ヶ所に穿孔があり、環が通される。ＳＫ１０８出土。

340・341は鉛玉。**340**は重量118.8g。１面Ｄ－４ＳＸ１０南側出土。**341**は重量316.6g。ＳＸ１０の南北方向石列出土。

玉類（Fig.98）

342～352はガラス製。**342～344**はＳＸ２９出土。緑色で透明。**345**は緑青色透明。**346・**

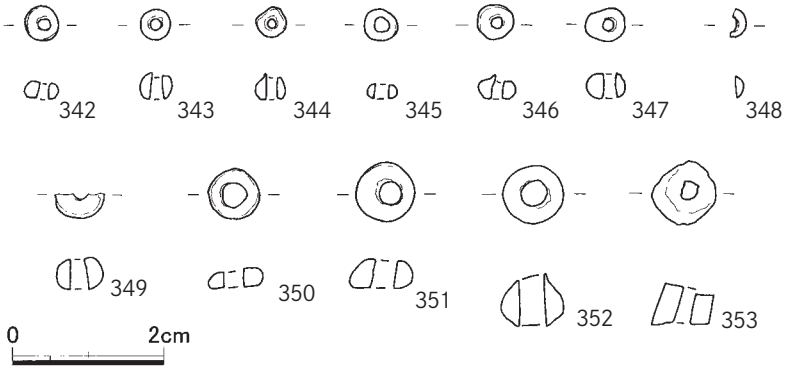


Fig.98　玉類実測図　（1/1）

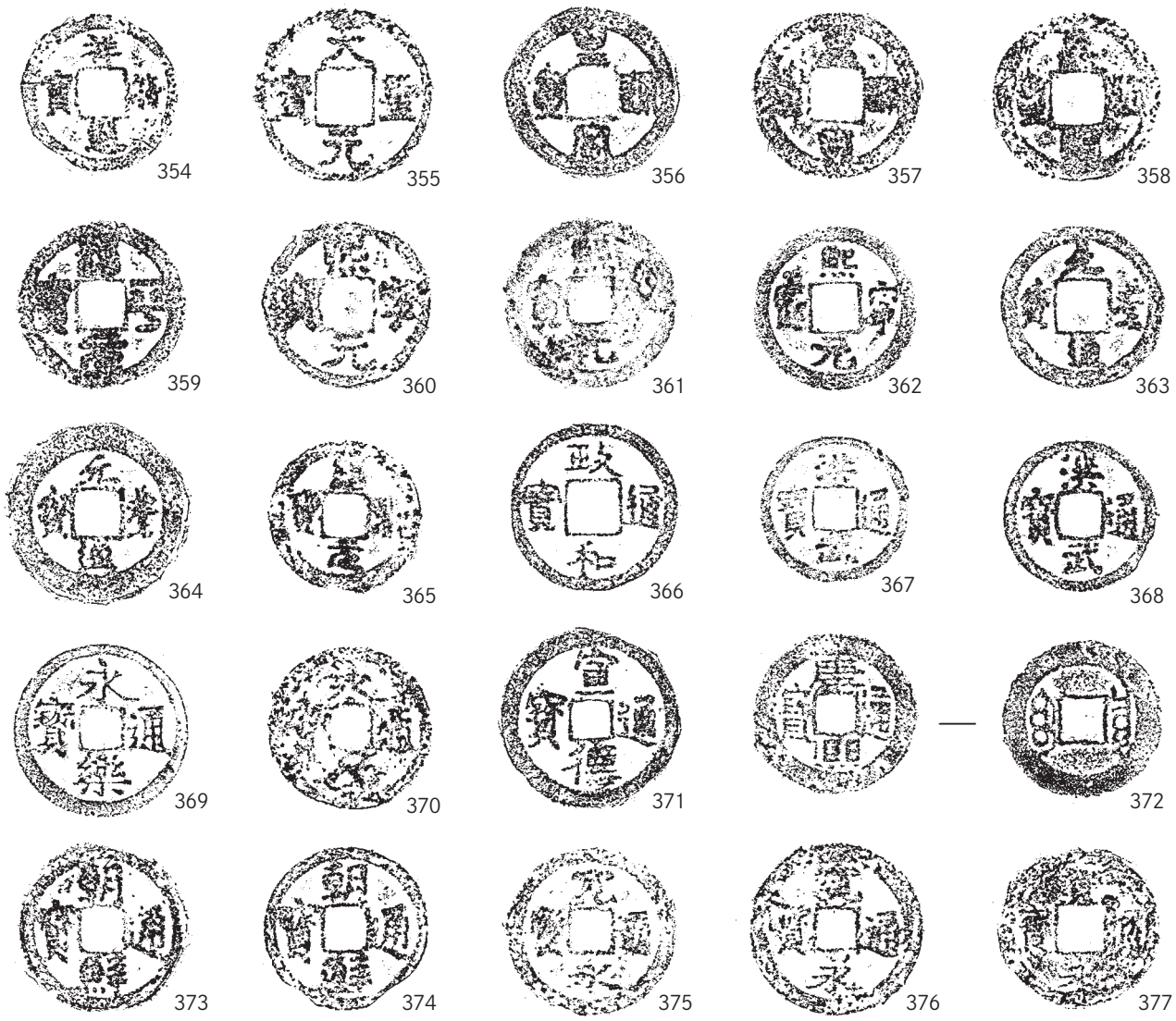


Fig.99　出土銭貨拓影　（1/1）

347は水色不透明。**348**は緑色透明。**349**は白灰色不透明。**350**は緑色不透明。**351**は濃暗褐色不透明。ＳＫ100出土。**352**は緑青色不透明。**353**は土製で黒色を呈する。ＳＫ４０出土。

銭貨（Fig.99）

近世の寛永通寶まで含めて93点出土している。銭名がわかるものをFig.99に拓影で示す。

354～**366**は北宋銭。**354**は祥符通寶。**355**は天聖元寶。ＳＫ５５出土。**356**・**357**は皇宋通寶。**358**は嘉祐通寶。**359**は治平元寶。**360**～**362**は熙寧元寶。**360**はＳＫ１３４出土。**363**･**364**は元豊通寶。**363**はＳＫ５４出土。**365**は紹聖元寶。ＳＫ２３出土。**366**は政和通寶。

367～**371**は明銭。**367**・**368**は洪武通寶。**367**は近世土坑ＳＫ２１出土。**369**・**370**は永楽通寶。**369**はＳＫ１９出土。**370**は模鋳銭であろう。**371**は宣徳通寶。

372は清銭である。康熙通寶。近世土坑ＳＫ０２出土。

373・**374**は朝鮮王朝の朝鮮通寶。**373**はＳＸ１０、**374**はＳＫ１２６出土。

375～**377**は日本の寛永通寶。**375**は近世井戸ＳＥ１３、**376**は近世土坑ＳＫ２６出土。

Ⅲ　ま　と　め

今回の調査で得られた成果を簡単にまとめておく。

調査地点は息浜北東部にあたる。旧地形や111次調査の成果から元寇防塁は調査地点より南側に位置するとみられ、博多の町から見ると防塁の外側の位置していた。息浜は11世紀後半頃、南の「博多浜」と陸続きになり、12世紀後半以降都市化が進み、中世後半期には「博多浜」の繁栄を凌ぐほどに発展していたと見られる。しかしながら、２度目の蒙古襲来に備えて築かれた元寇防塁により、町場は長らく海側へは拡大しなかった。これまでの発掘調査より、元寇防塁を越えて町場が海側へ広がるのは15世紀後半以降であるとされている（大庭2013）。今回の調査でもそれを裏付けるように15世紀後半以降、遺構が出現している。

貿易陶磁の出土はかなり多い。青花碗Ｃ・D群、青花皿Ｂ１群・Ｃ群、白磁皿Ｅ－２ｂ類といった15世紀後半～16世紀前半の陶磁器が特に多く、青花碗Ｅ群、青花皿Ｂ２群、景徳鎮産青磁皿といった16世紀後半の陶磁器がやや多い。また、朝鮮王朝の陶磁器類の出土が多いのも特徴であり、朝鮮との貿易が盛んであったことを物語っている。そのほか華南三彩の鴨形水注や鳥形水滴などは博多でも出土例が少ない貴重なものである。

発掘地点周辺は嶋井宗室や神屋宗湛、伊藤小左衛門といった豪商の屋敷の伝承地であり、本調査地点も出土遺物からかなりの富裕な博多商人の屋敷地であったことが想定できる。長らく都市の拡張を阻んでいた元寇防塁であったが、その間砂丘は拡大していたと思われる。蒙古襲来の記憶が薄れたこの時期、元寇防塁を越えて広大な空閑地が広がっていた場所に豪商たちが進出したのであろう。

調査区東側で検出したＳＤ７９は幅４ｍ以上、深さ１ｍ以上あることから区画溝と考えられる。15世紀後半に埋没してしまうが、元寇防塁外側の息浜の土地計画線を考える上で重要である。現在の町割りからやや東に振れる方位を取っている。１１１次調査地点では15世紀後半の幅1.1～1.7ｍ、深さ0.4～1.2mの溝ＳＤ１５６が長さ約40ｍ分調査されており、ほぼ平行している。息浜北東部、元寇防塁外側の地域はこの軸で開発されたのであろう。

調査区東側のいくつかの土坑から炭化穀物が出土している。土壌水洗の結果、米と麦であることがわかった。総量は薄コンテナケース５箱に及ぶ。水洗できなかった遺構もあり、その量はさらに多くなる。米は籾の状態で、一部塊で炭化している。麦は外皮を取り除いたものと取り除く前のものがある。この３種が同比率で出土したのではなく、それぞれの遺構で主体となる穀物が異なっている。米主体の遺構が最も多く、次いで、外皮が付いたままの麦主体の遺構であり、外皮を取り除いた麦主体の遺構はＳＫ５１のみである。使用する分だけ挽いていたのであろう。ＳＫ５０以外は覆土である砂質土に炭化穀物が混じっている状態であり、焼けた穀物をまとめて捨てたという様子ではない。炭化した後、やや時間を置いて土壌と一緒に埋没したものと想定される。

参考文献

大庭康時　2013「中世博多の地割りと地形変遷」『新修福岡市史－特別編　自然と歴史からみた福岡の歴史』福岡市

鶴巻康志　2006「新潟県上越市至徳寺遺跡出土の貿易陶磁－中世後期の資料を中心に－」『貿易陶磁研究』No.26　日本貿易陶磁研究会

報告書抄録

ふりがな	はかた　159
書名	博多　159
副書名	博多遺跡群第205次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1339
編著者名	田上勇一郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１　　TEL　092－711－4667
発行年月日	西暦2018年３月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	（世界測地系）				
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくしもごふくまち 博多区下呉服町	40132	0121	33° 36′ 02″	130° 24′ 27″	20160404 ～ 20160730	325	集合住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落	中世	土坑・溝・ 石組土坑・ 石基礎・ピット	中国産青磁・白磁・青花・陶器 朝鮮王朝産粉青沙器・白磁・陶器 国産土器・陶器 石製品・金属製品・ガラス製品 銭貨・炭化米・炭化麦	

要約

調査地点は博多遺跡群が立地する三列の砂丘の最も海側、息浜の北東部にあたる。鎌倉時代に博多湾沿岸に築かれた元寇防塁より海側に位置し、15世紀後半以降の遺構が認められた。

貿易陶磁の出土が多く、かなりの富裕な博多商人の屋敷地と推定される。華南三彩の鴨形水注や鳥形水滴といった博多でも出土例が少ない遺物も出土している。

南北方向の区画溝が発見されており、息浜北東部の町割りを知る手がかりとなった。

炭化した米・麦が出土し、当時の食生活をうかがわせる。

博多 159

― 博多遺跡群第 205 次調査報告 ―
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1339 集

2018年３月26日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
印刷　松古堂印刷株式会社
福岡市西区周船寺３丁目28－１

HAKATA 159

—Results of the 205th excavation of the Hakata sites—

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.1339

2018

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY